
男で女な神の使者

瀬見尾津凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男で女な神の使者

【Nコード】

N1659R

【作者名】

瀬見尾津風

【あらすじ】

神様の手違いで転生した俺は救世主になっていた。しかも胸は膨らみ、男のそれも付いているという状態で。宮廷魔女のネネルに説明を受け、徐々にこの世界での暮らしに慣れていく俺だったが……今でもとんでもない魔力を持っているのに、傷や病気を癒す古の超高度魔法を蘇らせることに！しかし魔物が世界に現われ、その一方で俺は変態魔術士に迫られて不安だらけ。これでいいのか、俺。見方によっては、BLにもGLにもなるのでご注意ください。

1 俺は記憶喪失

目が覚めると、そこは異世界だった。いや、異世界というか……新世界？

何故って、俺の身体にはあるはずのないものがくつついていたら。二つの柔らかい感触……そう、胸だ。しかし、股間にはしっかりと自分の物もついていた。

「まさか、あんたが神の使い？ 早速下品なんだけど」

と、声がして顔を上げたら、そこには小さい割にナイスバディで赤毛のツインテールの女の子、否、女性がいた。

はっとして、股間を触っていた手をどける。唯一の救いは、自分がきちんと服を着ていたことだ。

「いや、だって、ってゆーか……え？」

周囲をきよろきよろして、俺はそこが薄暗い部屋であることを知る。

「な、何なんすか？」

「何って、こっちが聞きたいわよ。今朝、唐突に神様からのお告げが降りて、次元の扉を開けた途端にあんたが現われたんだから」

次元の扉？ つーか、神って何だ？ どうやら俺は神様の使者らしいが、その神様の顔を俺は知らないぞ。

俺が困惑している間に、また彼女が言う。

「何、まさかあんた、記憶喪失なの？ はー、やってらんない。確かに普通の人間は次元を通ると記憶を失うけど、神の使者ともあるう人が例に漏れないなんて」

何だか申し訳なくなつた。

でも、そうか……そういえば俺、自分が男だったということくらいしか覚えてないや。いや、でも今は男だけど女だぞ。

「ま、いいわ。説明は後ですから、とりあえず付いてきなさい」
と、彼女が急に俺に背を向けた。置いて行かれないよう、すぐさ

ま彼女の後を追う。

薄暗い部屋を出ると、眩く輝く廊下へ出た。壁や柱がきらきらした装飾で彩られ、まるでおとぎ話のお城みたいだ。

「あたしの名前はネネル。アザリア王家に仕える宮廷魔女よ」

「ふうん……王家、つて、まさかここ！？」

マジでお城かよ！？

「静かにしなさい。それであんたの名前は……ああ、記憶喪失だっけ」

と、息をつくネネル。

「きつと姫様が素敵な名前を付けてくれるわ。それまで待つてなさい」

「……はい」

自分の名前をもらうのに待たされるなんて、不思議な気分だ。

それからは無言だった。俺より頭一つ分小さなネネルは、顔パスで謁見の間へと入っていった。

その部屋はやけに広くて、奥に玉座が三つほど並んでいた。

「お待たせして申し訳ありません。神からの使者を連れて参りました」

と、ネネルが玉座に座った王様らしき男性と、その隣の王妃と姫らしき女性達にひざまづく。俺もその隣で同じように頭を下げた。

「ご苦労であった、ネネル。神の使者よ、我々はそなたを心より歓迎しましょう。して、お名前は？」

「それが、どうやら次元を通った際に私たち人間がそうなるように、記憶喪失になってしまったようなのです」

ネネルがそう返すと、王様が目を丸くした。

「なんと言うことだ、まさかそんなことが……」

どうやら、神の使者は普通の人間とは違うべきらしい。

「そうでしたの。ならば、このフィアンシーナが使者様にお名前を付けてあげますわ」

と、父親とは反対に目をキラキラさせるお姫様。言動に問題はあ

りそうだが、見た目はとっても美少女だった。白金の髪の毛は長くふわりとして、目は綺麗な二重で瞳が透き通るように青い。体つきも華奢で、惚れない方がおかしいくらい可愛かった。

「そうですわね……マリアド、というのはいかがでしょう?」

全員の視線が俺を見る。拾われた捨て犬のような気分だったが、こういう時ってどうしたらいいのだろう。

「それで良いと思います」

口にしてから後悔した。思いますって何だよ、素直に感謝するべきだろ!

「お気に召したようでよかったですわ」

と、何事もなかったかのように笑う姫。ああ、笑顔も可愛いなあ。ふいに王様が咳をして、みんなの注意を向けさせた。

「では、マリアドと呼ばせていただく。それで、今朝のお告げ通りに、そなたはこの世界を救って下さる救世主となるはずだが……ネネル、そこはどうなんだ?」

「記憶喪失の状態なので神の言う通りになるかは分かりませんが、記憶が戻れば何かしら力を発揮するでしょう」

「ふむ、そうだな……では、マリアドの面倒はネネルに任せよう。幸いなことに、今はまだ時間がある」

「ありがとうございます、陛下」

と、ネネル。どうやら、これから俺は彼女と共に生活していくことになるらしい。すると、姫とはあまり会えないのか……今の内にしっかりと見ておこう。

「初めの期限は一週間後だが、あまり焦らないで良いぞ。終末にさえ間に合えば、きっとどうにかなるだろう」

「しかし、まだマリアドがどのような能力を持っているのか、判明しておりません。出来る限り手は尽くさせていただきます」

ぼーっと話を聞いていると、ここが本当に異世界であることが分かる。何やら、この世界の人たちはピンチに陥っている様子だし、終末までに俺が何か力を発揮すればいいようだ。それにしても、終

末かー……え、それってまさか世界の終わり？

「それもそうだな。では、任せたぞ」

「あの、一つ聞いて良いっすか？」

謁見の間を出てすぐ、俺はネネルへ尋ねた。

「何、姫様のこと？」

「いえ、そうじゃなくて。何で俺、両方ついてるんですかね？」

ネネルが怪訝な目を向けた。

「ついてるって、何が？」

「だから、胸があるのに、どうしても」

「は？ 当たり前じゃない」

は！？

「別におかしい事じゃないわよ。確かに両方きちんと育ってるのは珍しいことだけど、この国の人はいたいみんな、両方ついてるものよ」

開いた口が塞がらなかった。少なくとも俺の記憶じゃ、両方ついてるのが当たり前ではなかったぞ。

「もちろん、王様にも王妃様にも、姫様にもね」

「……おかしいでしょ、それ」

「おかしいのはあんたよ、マリアド」

と、ネネルが見下すように笑った。

そして案内されたのはある部屋だった。

「ここがこの城で最も価値ある客間よ。急なことだったから、まだメイドが中にいるかも」

と、ネネルが扉を開けると、先ほどの謁見の間に劣らない、広くて豪華な室内が目に入る。

「あ、これはネネル様！ すぐに済ませますのでお待ちください」

と、中にいたメイドが慌ててベッドメイキングを済ませる。遠かったのでよく分からなかったが、仕事を済ませたメイドがこちらへ来て、初めて俺は目を疑った。

「お部屋の準備が整いました。何かあれば、すぐにお申し付けください」

「別に気にしないで、フュエリ。それで、こちらが神の使者であるマリアドよ」

と、俺を紹介する。頭を下げていたフュエリが俺を見て、深々とお辞儀をした。

「メイドのフュエリと申します」

どう見たって、それは男だった。メイド服を着込んではいるが、俺よりも少し背が高く、銀縁の眼鏡をかけた姿は好青年だ。

「ま、マリアド、です」

言い慣れない名前を名乗る俺。

「そうだ、下がるついでに騎士たち呼んできてちょうだい、フュエリ」

「かしこまりました」

と、フュエリが部屋を出て行き、ネネルの後について俺は部屋の中央まで歩いた。

アンティーク調の椅子に机、壁には絵画がかけられあり、何とも言えぬ雰囲気醸し出している。

「どうしたの、何か聞きたそうな顔してるけど」

と、どかっと椅子に腰を下ろしたネネルが問う。

「あー、えっと……この世界では、男性もメイドになれるんですか？」

「はあ？ 当たり前でしょ、メイドに男も女もないわよ。さっきも言ったけど、この国の人たちはみんな男であり女でもあるの。つまり、仕事だって好きなものを選ぶのよ」

分かりやすくいうと、こうだ。この世界に男女なんてものはないけれども、ない。よって、男がメイドであることは不自然じゃない。たぶん、女性の執事も存在する。

何だか頭が痛くなってきた。溜め息をついて、俺も適当な椅子に座る。

「それにしても、変ね。普通、記憶喪失になっても、基本的なことは覚えているはずなんだけど」

と、俺を見るネネル。

「知りませんよ」

俺がちよつと口を尖らせて返すと、宮廷魔女は笑った。

「ま、それも悪くないけどね」

「意味が分かりません」

「良いのよ、あんたは記憶喪失なんだから」

それにしても……ネネルは本当にナイスバディだ。俺なんかより豊満なバストを見ると、嫉妬なのか性欲なのか、よく分からない何かがわき起こってくる。でも、それで下にも付いているわけだから……想像したくないな。あの可愛い姫にもあるのだと思うと、さらにやりきれない。

ふいにノックの音がして、誰かがカチャリと扉を開けた。

「失礼します」

と、先に入ってきたのは一人の女性だった。腰に下げた剣が、彼女を騎士だと表していた。

そしてその後ろには、黒髪の愛らしい少年。

「早かったわね、ヴェルシにゼーシュ」

「たまたま近くにいたもので」

と、ヴェルシと呼ばれた女騎士がこちらへ歩み寄ってくる。後ろにいたゼーシュという名の少年は、おどおどした様子で彼女の後に付いてきた。

「これが噂のマリアドよ」

先ほどとは違い、端的に俺を紹介するネネル。どうやら、話は伝わっているらしい。

「私は宮廷騎士団第一部隊隊長、ヴェルシと申します」

と、俺の前でひざまづくヴェルシ、女性なのにかっこいい。明るい茶髪はポニーテールに結わえられてあった。

「同じく宮廷騎士団所属、第一部隊隊長の側近で騎士見習いのゼー

シュです」

と、少年。まだ声変わりしていないのか、やけに声が高かった。こっちはむしろ、可愛い印象だ。

「さあ、これから説明をするから、あんた達も座って。あ、マリアドはきちんと話、聞いているのよ?。」

2 この世界のこと

四人で机を囲んでいた。

「まず、今朝の話からするわね。今朝、巫女の一人が神のお告げを聞いたの。次元の扉から現われし我の使者が世界を救う、って」

と、ネネルが説明をする。

「で、今この世界は、終末を迎えようとしている。それも、地下世界に住む黒妖精たちによつてね」

「黒妖精？」

「この世界は二つに分かれています。私たち人間の暮らす地上と、妖精族の住む地下。黒妖精というのは、その妖精族の中でも強い魔力を持った者たちの総称です」

ヴェルシが口を挟んだおかげで、何となく理解が出来た。

「その黒妖精たちは、あたしたち人間を遙か昔から憎んでいるの。それは神に選ばれなかったからで、元々は人間も妖精も一緒に暮らしていたのよ」

「神はその昔、増えすぎた生命を減らすため、人間たちを陽の当たる地上へ残し、妖精たち全てを地下の世界へ閉じ込めてしまったのです」

「でも、そんなの古い話でしょ？　なのに、黒妖精の奴らは目の敵にしているの。彼らが言うには、一週間後に地上へ魔物を送り込むらしいわ」

「え、それってやばいんじゃないすか？」

「やばいわよ。だからマリアドが必要とされてるんじゃない」

三人がじつと俺を見た。そういえば俺、神の使者だった。

「でも、この国には優秀な騎士団がいる。魔物が来たって、すぐにはやられないわよ」

だんだんと状況が飲み込めてきた。

「そして次の期限が三週間後、今度は黒妖精たちが地上を破壊しに

来るそうです」

と、遠慮がちにゼーシュが言う。

「そうなった時は、あたしたち宮廷魔女と魔術師が迎え撃つ予定よ。問題はその次なの」

「三度目の期限？」

「そう、三度目の期限は一ヶ月後。黒妖精たちが独自に編み出した魔法を使って、この世界を焼き尽くすそうよ」

考えただけで恐ろしくなった。焼き尽くすって、どういうことだよ！？

「もちろん、その魔法が何だか分からないから、手を打とうにも策がない。そこでマリアドの出番ってわけ」

「神の使者であるマリアド殿に、この世界を救っていただきたいのです」

「彼らに対抗できるのはあんただけってことよ」

「……そんなこと言われても」

と、俺は苦笑する。何が出来るのか、自分でも分からないのにそんな大それたことを、俺は本当にやるのか？

「大丈夫よ、あたしたちが記憶を取り戻す手伝い、してあげるから」

「……ネネル、私はそんなこと聞いてないぞ」

「何言ってるの、一人でマリアドの面倒見きれははずないじゃない」
横目に互いを睨み合うネネルとヴェルシ。二人は喧嘩するほど仲が良さそうだ。

「……分かった、今回は妥協しよう」

「さすがヴェルシ、分かってるわね！」

喜ぶネネルだったが、ヴェルシは溜め息をついていた。

「というわけだから、明日からさっそく始めるわよ」

「え、何を？」

思わず首を傾げた俺に、ネネルは言った。

「魔法の訓練に決まってるじゃない。基礎からやり直していけば、きつと思ひ出すはずよ」

「じゃあ、私の方では武術の訓練をしましょう。いかなる能力を持つていても、身体が伴わないのでは意味がありません」

訓練……その言葉に嫌な予感しかないのは、何故だろう。

夕食の後だった。

「あまり元気がない様子ですが、どうかされましたか？」

と、メイドのフュエリが俺へ尋ねてきた。

「え、いや……何ていうか」

俺は思いを口にしようかどうか迷った。口にしたところで、ネネルのように「当たり前」の一言で片付けられてしまうんじゃないかと、不安だった。

「私で良ければ、出来る範囲でお答えしますよ」

「う、うん……ありがとう」

フュエリはにこつと笑ってくれたが、俺は未だに慣れなかった。どうしてメイドなのに男なのだろう。

「あ、あの、聞いてもいい？」

「はい、どうぞ」

「えつと……フュエリは、どうしてメイドになったの？」

彼はまた、にこつと笑って答えを返す。

「メイドの仕事が好きだからです。料理洗濯、掃除に雑用。中でも王家の住まう城でメイドとして従事させていただくことは、幼い頃からの夢でしたから」

「へ、へえ」

「それに、城へやって来る貴族の方々のお顔も見られるので、とても満足しております」

あ、貴族っているんだ。

「貴族の人たちって、そんなにすごいのか？」

好奇心から尋ねてみたら、フュエリの目つきが変わった。

「そりゃ、すごいですよ。どこを見ても美青年に美人に、そりゃあもう、毎日が目の保養です！」

意味が分からない。

「特に公爵様なんて、もう素敵すぎて本当に……マリアド様も、きつと一目見たら抱かれないと思うはずですよ！」

「……え、遠慮しとくよ」

抱かれないって、そんな……ああ、そうだった。この世界には男も女もないんだった。つまり、言い換えるとその世界には百合薔薇が咲き誇って……うわあ、あんまり嬉しくない。

「そうですか？ あ、もしかしてマリアド様は女性の方が好みでしたか？」

「え、ああ、うん」

フュエリはどうやら男性が好きらしい。

「そうでしたか。では、あまり話が合いそうにありませんね。ちょっと残念です」

と、明るく笑う。彼と話が合う日なんて、一生来てほしくなかった。

「マリアド様の胸がもう少し小さければ、私的に結構好みなんですけれどねえ」

「あ、あはは」

やばい、狙われてる。

フュエリはにこっと笑うと、俺から離れていった。その後ろ姿を眺めながら、俺は溜め息をつく。

なんて世界へ来てしまったのだろう。それも、神の使者で救世主って……不安しかないじゃないか。最も、今の俺にはここへ来る以前の記憶がないのだから、どうしようもなかった。帰る場所もなければ、帰りたいと思える場所にも心当たりがない。

今は、この現実を受け止めて慣れていくことが最優先だろう。もし、記憶が取り戻せるならその方が良いけれど……ま、その時はその時だ。

翌朝、俺が部屋で朝食を終えた頃、唐突にネネルがやってきた。

「あんたに案内しなきゃいけない場所があること、忘れてたわ」
「え？」

「ほら、さっさと行くわよ。早くしないと終わっちゃう」

と、ネネルに腕を掴まれて部屋から連れ出される。フユエリが相変わらずにつこりと俺を見送っていた。

「ちよ、どこ行くんすか？」

「聖堂よ」

「聖堂？ それってまさか、巫女さんのいるとかいう」

「そう、それ。今は朝の礼拝が行われてる時間なの、これを逃したら夜まで中には入れないわ」

だから急いでるのか。

状況を理解した俺は、ネネルの隣に立って足早に歩き出す。

「ついでに、巫女のジャスナも紹介するわね」

何故だか胸が高鳴った。巫女さんに会えるなんて、わくわくする。
「それとマリアド、言葉遣い変よ。あんたはもっと偉そうにしてて良いんだから」

「え、そうっすか？ あー……がんばる、ます」

「普通に喋って！」

怒られた。でも、みんな知らない人だし、俺って結構人見知りするタイプだしな……いやいや、俺は神の使者。これから気をつけよう。

聖堂は城の隣にあった。一度外へ出て、青を基調とした清楚な建物へ向かう。

「あちゃー、出遅れた」

と、落胆するネネル。建物の周囲には人々が群がって、それぞれに頭を下げて祈っていた。

「そうだ、裏口」

と、ひらめいたネネルが再び俺の腕を掴んで歩き出す。
建物の裏側へ回り込むと、そこは静かだった。ネネルが扉を慎重に開けて、そっと中へ入る。

薄暗い廊下をしばらく行くと、祭壇が見えてきた。その祭壇では数人の巫女と思しき白い服を着た少女たちがひざまづいていた。その中心には比較的年のいった女性がいて、彼女が頭を上げると民衆の方を振り向いて言葉を放つ。

「今日も神の恵みに感謝をし、素晴らしい良き一日にいたしましたよ
う」

人々が彼女へ向かって口々に感謝を伝える。少女たちも立ち上がって、民衆へ向かってにつこりと笑いかけていた。

「中央にいるのが巫女長のセリンよ」

と、ネネルが小さめの声で説明をした。

「それでジャスナがその右側にいる茶髪の子。すごく大人しそうです
しよ？」

「確かに、ちょっと守りなくなる感じがするな」

ネネルよりも背はあるはずだが、とても華奢で内気そうな少女だった。姫とはまた違うタイプで、すごく可愛い。

そして人々が聖堂を後にし始めると、巫女長がこちらに気がついた。

「あら、またそんなところから入って」

と、俺たちの方へ寄ってくる。

ネネルも彼女の方へ歩み寄り、俺を指さした。

「ごめんなさいね、巫女長。でも、今日は紹介したい人がいるの」

「神の使者、マリアドです」

「急に偉そうになったわね」

と、俺を睨むネネル。

「だって、偉そうにしろって言ったのはお前だろ」

「それはそうだけど、もう少し礼儀つてものを」

と、ネネルが言いかけたところで、ジャスナが巫女長の隣へ来た。
「あなたが神の使者様ですね。初めまして、巫女のジャスナと申します」

と、丁寧に俺の前でひざまづく。

「あ、マリアドです」

ジャスナは立ち上がると、にこつとはにかむように微笑みかけてくれた。

「私は巫女長のセリンです。この子、ジャスナが神のお告げを聞いた本人ですよ」

「つまり、ジャスナのおかげであたしは次元の扉を開けたわけになるほど、と納得する俺。

「ってことは、俺がここにいるのもジャスナのおかげなんだね。ありがとう」

「い、いえ、とんでもない。わたしはただ、お告げを聞いて、それを皆様にお伝えしただけですので」

と、困惑するジャスナ。分かりやすく頬を赤らめている様子が可愛らしかった。

3 神の使者として

「では、少し聖堂内をご案内しましょうか？」

セリンがそう言つと、ネネルが答えた。

「そうね、それが良いわ。マリアドは記憶を喪失してるから、何か思い出すかもしれないし」

「分かりました。ではジャスナ、特別に時間をあげるからご案内してさしあげて」

「は、はいっ」

元氣よく返事した彼女を見て、巫女長がその他の巫女たちに目を向けた。

「それでは、私たちはこれで。皆さん、朝の清掃を始めますよ」

と、廊下の奥へ消えていく。

「では、まず初めに祭壇をご案内しますね」

ジャスナに連れられて祭壇の前まで来る。それはとても大きくて、階段の一番上に神らしき彫像が立っていた。

「あちらがわたしたちの父で神様の、ウィンドロード様であらせられます。この世界を作った創世の神であり、マリアド様にとっては主様にあたります」

けれども、やはりその顔に見覚えはなかった。ただのおっさんしか見えない。

「次は地下の霊廟をご案内しますね」

聖堂を一通り回ってジャスナと別れた後、ネネルが言った。

「さあ、さっそく魔法の訓練をするわよ」

「え？」

「何、嫌なわけ？」

じつと睨まれて怯んだ。

「いや、何ていうか……休みたいな、と思って」

「甘えてるんじゃないわよ」

と、ネネル。俺は文句しかかったが、やめた。いくら神の使者といえど、許されることとそうでないことがあるらしい。

彼女の後についてたどり着いたのは、城の中庭だった。

すでに準備がされていたそこで、ネネルは一本の杖を箱から取り出した。

「はい、これ」

「杖？」

「そうよ。その先端に付いてる水晶が、魔力を勝手に引き出し続けるの。まあ、初心者向けだけど」

受け取った杖の先には、小ぶりの透明な水晶玉が付いていた。初心者はこれを使って魔法を覚えていくらしい。

「で、それを両手で持って」

と、ネネルが俺と同じ杖を持ってみせる。右手は水晶玉の下をつかみ、左手は真ん中より少し下に添えられている。

「こう？」

「そうそう、それで呪文を唱えるの」

ネネルは息を吸うと、呪文の言葉を呟いた。

「イグニフェル！」

ぼわつと炎が飛び出して、足元の芝生を焼いた。すぐにネネルが足で踏み消し、俺を見る。

「やってみて」

ごくりと唾を飲み込んで、息を吸う。そして俺は叫んだ。

「……い、イグニフェル！」

出てきたのは小さな火だった。足元に落ちるまでもなくかき消えてしまう。

ネネルは呆然としていた。

「うそ、それだけ？」

「……イグニフェル！」

悔しかったのもう一度やってみたが、結果は同じだった。

冷や汗が俺の顔から吹き出てくる。

神の使者ともあるう俺が、まさか魔法もろくに使いこなせないなんて……何てこった。

「おかしいわね、基本中の基本なのに」

と、考え込むネネル。

杖を持ち直してやってみたが、やはり小さな火が一瞬現われるだけだ。すぐに消えてしまつて意味がない。

「いいわ、考えていたって時間の無駄。次はこれよ……ヴェントス！」

ネネルが出現させた風は俺を直撃して足元をよろめかせた。

それから周囲の葉っぱを巻き込んで空へ消え、俺は思わず尻もちをついてしまう。

「さあ、マリアド」

「う、うん」

立ち上がつて杖を握る。今度こそ、上手くいってくれよ……。

「ヴェントス！」

ぶわわつと巻き起こつたのは小さな風だった。ネネルにぶつかった瞬間にはじけて消える。

苦い顔をして、ネネルは次の呪文を唱えた。

「アキュア！」

水が海のように波打つて辺りの芝生を刈り取つて消える。

「……アキュア！」

しかし、俺の場合は地面に吸い込まれて消えた。

ネネルが溜め息をついた。

俺は居心地が悪くなり、杖をもてあそぶ。

「きつと調子が悪いだけね、そうよ、きつとそう」

と、事実を否認するネネル。期待を見事に裏切つてしまったようで、本当に申し訳ない。

俺も溜め息をついて杖を地面に突き立てる。

「今日はこのくらいにして、休憩に」

と、ネネルが言いかけて目を見開いた。何かと思つて地面を見ると、炎が水の上で風と舞っていた。

「杖から手を離して！」

と、ネネルが叫び、慌てて手を離す。

ぱたりと杖が地面へ倒れ、炎たちも姿を消した。

「……さ、さっきのは？」

「生成魔法よ。属性の違う魔法を組み合わせで、より強力な魔法を生み出すの」

そんなの、した覚えがない。

「あたしでさえ習得中の高度な術よ。それをあんたは、無意識に……」

「何か、やばい感じ？」

「やばいわよ！ あんたに杖は持たせられないわ。そうだ、念のためこれ羽織つて」

と、ネネルは箱から一枚の白いローブを取り出した。

「これは魔力を抑制するローブよ。普通は強い魔法を使う時に的確な操作ができるよう、使う物なんだけど」

薄汚れたローブはずしつと重く、何か押さえつけられる感じがした。しかし、デザインは意外と悪くない。

「そうしたら、両手を前に出してみて」

「こうか？」

ネネルに言われたとおり、両手を前へ出す。その手をネネルによつて重ね合わせられる。

「何でも良いから、呪文を」

「……えっと、ヴェントス！」

何となく被害が少なそうな風の魔法を唱えた。すると、先ほどネネルが起こしたような強風が巻き起こり、周囲を荒らした。

「行けるわ！」

「え、これでいいの？」

「良いのよ！ あんたは何かを媒介にすることなく、自分の身一つ

で魔法が使えるってこと。さっきは水晶を媒介にしたせいで、魔法を生成しちゃったのね」

頭では理解していても、何となく納得がいかなかった。

俺は自分が思うよりも、すごい能力を持っているらしい。

ネネルはそんな俺に気がついたのか、今度は落ち着いて説明をしてくれた。

「魔法には二つの種類があるの。あたしのように杖を使う方法と、あんたみたいに身一つでやる方法。人間はその多くが杖を使うけれど、あんたは黒妖精と同じで何も道具を必要としないタイプなわけ。そしてそれは、下手に道具を使わせると本来の効果を発揮できなかったり、さっきみたいに暴発しそうになるの」

「ああ、なるほど」

「ついでに言うと、あんたがそのローブを脱いで本気出したら、この世界を救う魔法だって夢じゃないわ」

「じゃあ、やっぱり俺……？」

「そう、神の使者であたしたちの救世主よ」

昼食はネネルと一緒に前庭で食べた。

その後、ヴェルシとゼーシュがやって来て、午後は武術の訓練をすると言う。

「っていうか、何でこんな……城、でけえんだよ」

「僕たちはこれを毎朝やってるんですよ」

と、俺の隣を走るゼーシュ。

城の周りを三周しろと言われたのだが、一周したところすでにくたくたになっていた。

「む、無理……ちょっと休ませて」

思わず立ち止まると、ゼーシュが俺の前へ来て言った。

「怒らせると怖いんですよ、ヴェルシさん」

「……そんな脅しには乗らないぞ」

と、呼吸を整える。

ゼーシュは呆れた様子で俺を見ていたが、日陰になっている壁際に移動し、腰を下ろした。

「こっちの方が涼しいですよ」

と、俺を手招きする。 どうやら分かってくれたようだ、良かった。

隣へ座って休憩に入る。

「今日は初日ですし、少しくらい許されるでしょう」

「そうだな……にしても、本当にこの世界って不思議だな」

と、思ったことを口にした。

ゼーシュが首を傾げて俺を見る。

「そうですか？」

「ああ、だって……男も女も、みんな平等に働いてるんだぜ。馬車を引く女もいれば、洗濯してる男もいて……新鮮だよ」

ゼーシュは顔を前へ向けると、遠くの空を仰いだ。

「確かに、外見から胸が小さい人は男と呼ばれます。女は逆に、胸が成長している人。けれども、そのどちらでもない人もいるんですよ」

「どちらでもないって？」

「……僕は、どっちに見えますか？」

聞き返されて、俺は彼を改めて観察した。

黒い髪はショートカットでさっぱりしていて、体つきは完全に男だ。顔立ちはまだ幼さを残していてあどけなく、よく見るとまっけが長かった。

「男」

「……そうですよね」

と、何故か溜め息をつくゼーシュ。

「え、女なの？」

「胸が成長しないので、飽くまでも精神的な意識だけです。でも、騎士団に所属したからには男でいる方が楽かもしれません」

「……そうか」

むしろ、男とか女とか、そういったことに拘るのはやめた方が良
いかもしれないな。ゼーシュもそうだけど、俺だって胸があるの
に男のつもりで生きているわけだし。

「不思議だなあ、本当に」

「そういえば、マリアド様は、その……」

と、ゼーシュが俺をちらっと見た。

「胸の大きい方が、好みですか？」

「え？ いや……どうだろ。確かに女の方が好きだけど、自分
もあるって思うと、あんまり関係ないっていうか」

と、自分の胸を見下ろす。

走っている最中、たぶたぶ揺れて鬱陶しい二つの膨らみ。しかし、
これが当たり前であるなら、性別の認識が怪しくなってくるな。

「何っーか、男でも女でもない状態は、俺もそうだよな」

「……じゃあ、胸がなくても？」

とっさに頭に浮かんだのはフユエリの姿だった。

「うーん……ないな。いや、でもたぶん、相手による」

そう、男は彼だけじゃない。いや、もちろん女の方が好きだけど。

「そうですか」

と、ゼーシュは納得した様子を見せた。

4 神様との遭遇

訓練という名の試練を終えて部屋へ戻ると、フュエリがお茶の用意をしていた。

「お疲れでしょう、マリアド様。夕食の時間までゆっくりおくつろぎください」

と、にこつと笑う。

そんな彼の姿にも見慣れてきた俺は、素直に椅子へ座った。カップから香草の匂いが立ち上っている。

「甘い物はお好きですか？」

「あー、まあまあ」

フュエリが焼き菓子の載った皿を俺の前へ置いた。色とりどりのそれは、とても美味しそうに見えた。

カップを持ち上げて、口を付けた。温かい茶が喉を潤して、気持ちほつと安らぐ。

「先ほど、姫様がこの部屋に来られました」

「えっ」

びつくりしてお茶をこぼしそうになった。

フュエリは構わずにクローゼットをさして言う。

「姫様が衣装を用意して下さったのです。あちらの衣装棚に入れておきましたので、ご確認くださいませ」

「衣装って？」

見たい気持ちでうずうずしたが、俺はとりあえず尋ねた。すると、フュエリがまたにっこり微笑む。

「マリアド様のお身体に合った、素敵な衣装ですよ」

何だか嫌な予感がした。カップを置いて、席を立つ。

クローゼットの前まで行って、がしつと開けた。

「……うっわ」

目の前に広がるのは、きらきら光る宝石のちりばめられたドレス

や、ふわふわしてひらひらなレースのあしらわれたワンピースなど、可愛い女の子が着るべきものばかりだった。つまり俺、完全に女扱いされている……マリアドって名前も女性名だったりして。

嫌な考えを振り切って、俺はクローゼットを閉めた。

「明日からはそれを着て生活して欲しいのだそうです」

「う、うん……ちょっと、無理かな」

強要されたら着るけれど、それまでは普通の動きやすい服を身につけようと思った。

「だってほら、魔法の訓練とか、武術の訓練とかあるし。何もなければ良いんだけど、さすがにこれじゃ動きにくいし」

と、無意識に言い訳をする俺、かっこわるい。

フユエリはそんな俺を怪しむことはせず、ただ頷いてくれた。

「そうですね。では、今日のように動きやすい服をご用意させていただきます」

「うん、ありがとう」

フィアンシーナ姫の気持ちは嬉しいけれど、やっぱり俺は、女にはなれそうにない。

翌朝、目が覚めた瞬間に俺は身体の痛みを覚えた。筋肉痛だ。どうにか上半身を起こし、ぼーっとする頭で両目をしっかりと開く。欠伸が出た。

室内にはまだ誰の姿もなく、俺はベッドを降りて伸びをした。背中が痛い。こんなんでも今日も城の周りを走らせられるのだと思うと、気が重かった。

一つ息を吐いて、近くの窓へ寄ってカーテンを開けた。

「あー、だる……」

眼下に広がる城下町。早くも人々で賑わって、その中でも聖堂を目指して歩いている人々の姿に目が行った。

ぼーっとその列を眺めていると、部屋の外から音がした。誰かが扉をノックして、姿を見せる。

「おはようございます、マリアド様っ」

ジャスナだった。

「おー、おはよう」

と、軽い返事を返して彼女の方へ歩み寄る。

ジャスナは息を切らせていた。加えて、礼拝の時間なのに抜け出してきたということは、俺に大事な用があったものと見られる。

「どうしたの？」

「あ、あのっ……わたし、やはり、あなたにどうしてもお伝えしたいことがあって」

と、俺を見上げるジャスナ。何やら必死な目だ。

「えーと、何？」

部屋に二人きり、というシチュエーションにドキドキしていた。

ジャスナは深く呼吸をすると、俺へ言う。

「もしかしたらわたし、マリアド様の記憶を取り戻せるかもしれない」

……マジで？

はっとしたジャスナがおろおろと視線を逸らし、先ほどより落ち着いた声で説明をした。

「あの、わたしは昔から、神の領域に近いとされているんです。だからお告げを聞くことも出来たし、必要であれば神様の近くまであなた様の精神をお連れすることも可能で……それをすると、わたしはしばらく寝込んでしまうんですけれども」

「え、ジャスナってまさかすごい人？」

「す、すごいと言うか……巫女になる為に生まれてきたようなもの、と言うか……」

恥ずかしそうに両手をもじもじさせて、ジャスナはまた俺を見た。「なので、わたしだったらマリアド様を神様の近くまで運べるかもしれないんです」

「神の近くって……ちょっと待って、落ち着こう」

と、俺は彼女の肩に両手を置いた。びくつとしたジャスナに構わ

ず、俺は中央の椅子を指さす。

「座って」

「は、はい」

彼女を椅子に座らせて、俺もその向かいに腰を下ろした。

「それで、具体的にはどういうことなの？」

「あの、まず両手を出していただくんです。そしてわたしがその両手に手を重ねて、わたしの魔力を使って精神を神様の近く、遙か上空の世界へお連れするのです」

「でもそれを行ったら、君は寝込んでしまうんだろ？」

「はい……それだけで魔力を使い果たしてしまうので、三日は目を覚まさないと思います」

俺は溜め息をついた。何て良い子なのだろう、ジャスナは。

「ですが、マリアド様のお役に立てるなら」

「分かった。まずはネネルに相談しよう」

と、俺が席を立つとすると、ジャスナがそれを止めた。

「いけません！ 礼拝が終わってしまったら、わたしは巫女長に連れ戻されてしまいます」

そうだった。今は礼拝の時間、巫女が聖堂の外にいるなんてありえない。

「……でも、俺には判断が付かないことだし、ジャスナに無理はさせられないよ」

「良いんです、わたしは神に仕える身。神の使者であらせられるマリアド様のお役に立てるなら、どんなことだって出来ます」

ただの内気な少女かと思っただが、根は強い人らしい。その真剣なまなざしに、俺は折れた。

「そうだな……じゃあ、頼むよ」

「はい！」

俺は立ち上がると、両手をジャスナへ差し出した。立ち上がった彼女がその手を取り、言う。

「目を閉じていてください」

「うん」

両目を閉じると、扉の開く音がした。

「マリアド様！？ それにあなたは巫女の……っ」

フユエリの声だ。すぐにまた扉の開閉する音がして、彼が廊下を走って遠ざかる。まさか、ネネルを呼びに行ったんじゃないよな？

「行きます」

と、ジャスナが静かに告げた。

俺は気を引き締めて、徐々に不安定な状態へ引かれていく感覚を覚える。

それは頭痛のようで、呼吸したくても出来ない息苦しさに似ていた。

ふわっと急に身体が軽くなったかと思うと、空の上にいるような映像が目映る。

思わず周りを見渡すと、それはやはり空の上としか思えなかった。白い雲があって、間近に太陽の光が当たり、その反対方向に真っ白な双子の月が見える。

「良く来たな、マリアド」

唐突に声がして、俺ははっと前を見た。

そこにいたのは灰色の長髪を風になびかせている中年のおじさんだった。

「……まさか、あんたが神様？」

「そうだ。こうして顔を合わせるのは初めてだな」

と、神様。マジで来ちゃったよ、神の領域。

「あ、初めまして。えっと」

思わず挨拶をしてしまうと、神様が怒った。

「そんな悠長なことしてる場合じゃない。お前にはきちんと説明をせねばならんだ」

「うわ、ごめんなさいっ」

身体もないのに身を縮めた俺は、改めて神様の顔を見た。聖堂で

見た彫像より少し若く見えるが、気のせいかな。

「まず、お前には謝罪をする。本当に急なことで驚いただろう、悪かったな」

「……え、何が？」

何故謝罪をされたのか、よく分からなかった。

神様は少し目を丸くして、説明をする。

「ああ、そうだったな。お前は本来、別の世界へと転生するはずだったのだ。しかし、我の手違いであの世界へ送ってしまった」

手違い？

「意味が分かりません」

「そうか、ならそれでいい。幸いなことに、救世主としての能力もきちんと備わっているし、特に問題なく進められるだろう」

「ちよつと待てよ！ だから、何で俺はあの世界に行ったんだよ！？」

しつかり説明してもらわなければ気が済まなかった。

「うむ……我の手違いだ。いくつもの世界を同時に管理しているとたまにミスを犯してしまうのだが……お前はあの世界へ行く前、違う世界で一度死んでいたのだよ」

死んでいた？ 俺は一度、死んでいたっていうのか！？

「まさか！」

「魂は肉体から離れる、つまり死んでしまうと、それまでの記憶を失う仕組みになっている。その証拠に、お前は自分のことを全く覚えていないだろう？」

と、神様が俺を見据える。

「くっ……そんな、でも……じゃあ、何で俺は女になってるんだ？」

「その世界に見合った姿になるのは当然だろう。郷にいれば郷に従え、言葉が通じるのもそういうことだ」

「そんなこと言われて、素直に頷けるわけねえよ！」

「あまり文句するでない、これは紛れもない事実なのだ。お前が救世主として仕事を終えた時は、お前の望む世界へ転生させてやるか

ら耐えてくれ」

「やだ、絶対やだ！　つか、マジで意味分かんねえよ！」

俺がどんなに文句を言ったところで、神様が何もしてくれないことは明らかだった。俺は神の使者として世界を救うしかないのか……。

「くそ、神とかマジでありえねえ。このクソじじい、地獄に落ちろ！」

と、無駄なことを叫ぶ俺。すると、ふいに俺の意識が飛んだ。

「あーもう、勝手にやるなって巫女長にも言われてたはずなのに」
ネネルの声がして、俺ははっと目を覚ます。

「気づかれましたか、マリアド様」

「……あー、うん」

何故か俺は、フュエリに抱かれていた。嫌な目覚めだと思ったが、構わずに上半身を起こす。

見ると、ジャスナはネネルに抱かれて眠っていた。

「で、神様には会えたの？」

「うーん、会えたけど……不満が増えた」

「はあ？」

怪訝な顔をするネネルとフュエリ。俺は説明をしようともせず、ジャスナの寝顔を見つめた。

「彼女は大丈夫なのか？」

「ええ、すでに巫女長には連絡したから、その内に迎えが来るでしょう」

「そっか」

前よりも気分がすっきりしていた。俺が記憶喪失なのは、一度、別の世界で死んだからなんだ。それなら、記憶を無理に取り戻す必要はない。

「ジャスナには感謝しなきゃな」

俺のために魔力を使い果たしてくれて、本当に申し訳ない。それ

でも、俺に与えられた選択肢が一つしかないことがはっきりして良かった。

こんこんとノックされて、扉が開く。

「失礼いたします」

入って来たのは二人の巫女だった。白い服の上に紺色のコートを羽織っており、すぐにジャスナの元へ来て頭を下げる。

「ジャスナがご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした」

「次からはこんな事がないよう、厳重に注意しておきますので」

その内の一人がジャスナを抱きかかえると、もう一人がネネルへ言った。

「ネネル様、ご連絡、ありがとうございました」

「良いのよ、ジャスナは本当に何しでかすか分からない子だもの。気にしないで」

「はい。それでは、失礼いたします」

そして巫女たちがジャスナを連れて部屋から出て行った。

息をついてから立ち上がり、俺はネネルへ言う。

「俺、記憶がなくて当然だったみたいだ。だから、記憶を取り戻そうとしなくて良い」

「え？」

「その代わり、俺にもっとこの世界のこと、教えてくれないか？」

5 魔法の基礎

後ろを振り返っても俺には過去がない。それなら、前向きになるしかないよな。

「まず、魔法には三種類の属性があるの。炎と風と水よ」

黒板にそれらを表す文字を書いていくネネル。その初めて見るはずの言語は、何故だか普通に読めた。俺は前の世界で、それとは違う別の文字を使っていたような気がするのだけれど、これも神の言う『郷にいれば郷に従え』効果だろうか。

「炎は水で消えるし、水は炎で消える。基本的に相容れない二つの属性だけれど、生成することでその良いところだけを取り出して組み合わせることが可能になるわ」

「じゃあ、風は？」

ネネルの説明をノートに写す俺だが、これまた不思議なものですらすらと文字が書けた。

「風は中立。どちらの属性とも相性は良いけれど、炎で風を消すことは出来ないし、水で風を消すことも出来ない」

「すごいな」

「その分だけ、風は扱いにくいだよ。水は誰でも自由自在に操れるけど、炎を操るにはコツがいる。風を操るには技がいる、ってこと」
属性にはそれぞれ特性があるようだ、しかし三種類だけで良かった。

「ちなみに、あんたほどの実力者が風の最上級魔法を使って操作不能になったらどうなるか、分かる？」

と、ネネルが俺の正面へ立った。じつと睨まれて、俺は答えに戸惑う。

「えーっと、すごくやばいことになる」

「残念、答えは想像が付かない、のよ。建物どころか、街をまるごと荒らし回るかもしれないし、もっとひどい被害をもたらすかもしれ

れない」

「……だから、ローブか」

今まさに着させられている白いローブに、俺は目を落とした。

「そういうこと。それがあるおかげで、魔法が操りやすくなるの」

「じゃあ、しばらくはこれ着て、魔法の練習しなきゃいけない」

ネネルは黒板の前へ戻ると、今度は『大地』という文字を書いた。

「あたしたちが魔法を使えるのは、神の創った大地があるからよ。

この大地というのは、こうして立っているだけで力を与えてくれるのだけど、詳しいことは何年も前から調査中」

ぐるっと円を描き、その上に人らしき何かが立っている絵を描く。そのあまりの下手さに、俺は思わず笑いそうになった。

「……マリアド、あんた今、笑ったでしょう？」

「いいえ、笑ってませんっ」

と、とつさに答えたが、俺はにやける口元を隠しきれなかった。

ネネルが呆れた顔をして俺の頭を平手で叩く。

「魔女にも苦手の一つや二つ、あってもおかしくないでしょ」

あからさまに機嫌を悪くされてしまった。地味に叩かれたところが痛い。

「だからって殴ることないじゃん。……で？」

「大地に触れている部分が多いほど、その恩恵を受けることが出来るわ。逆に言うと、杖などの魔法道具はそうすることで暴発する可能性が高まるから、直接大地に置いてはいけない決まりなの」

「ふうん」

言われたことを真面目にノートへ書き留めっていると、ネネルが俺へ尋ねた。

「杖の持ち方、教えたわよね？」

「ああ、うん」

確か、両手で持つんだったよな。

「どうして両手で持つか、分かっているわね？」

「え……あー、そっか。暴発するから」

「その通り。だからあんたは昨日、危うく庭を破壊するところだったのよ」

杖は杖でも、地面へ置いてはいけないのだ。昨日の例で言っと、大地の力が水晶玉に作用して魔法を……魔法は、どうして暴発するんだ？

「どうして魔法は暴発するわけ？」

「良い質問ね」

ネネルは腰に下げていた自分の杖を取り出した。

「普通、杖の魔力は媒介となる石に集まっているの。他の部分はほとんど飾りで、近距離戦になった時に相手を殴れるよう、今の形になっただけ。それで、この石に大地の力が侵入することで、本来の魔力と術者の魔力が外へ押し出される形になり、暴発してしまうわけ」

「何だか難しいな」

「でしようね。理解するのは後で良いから、今は大地の力が良くも悪くも強力だつて覚えておけばいいわ。ちなみに、暴発する時はその術者の影響を受けた魔法が現われるから気をつけてね」

とにかく、杖は地面へ置いてはいけない。鈍器にもなり得るから、ネネルのように腰に下げて持ち歩かなければならないのだ。よし、覚えた。

「あとは……そうね、太陽と月についても説明しようかしら」

と、ネネルは黒板の文字と図を消し、新たに文字を書いていく。

「太陽は一つしかないのに、何故月が二つあるか」

「ああ、そういえばそうだな。何か理由があるのか？」

「現在調査中よ。でも、太陽は炎の魔法に作用すると言われているの。そして月は水と風に作用する」

再び図を書くこうとして、ネネルは手を止めた。

「向かって右側に見える月は、別名カストールと呼ばれ、左側に見えるのはポルクスと呼ばれているわ。水に作用するのがカストールで、ポルクスは風よ」

月と言われて、俺は昨夜のことを思い浮かべた。日が沈む頃は二つの月が同じ大きさに見えたが、寝る前は左側が小さく見えた。

「でも、ポルクスは大きさ変わるよな？」

「よく気がついたわね。これは天文学の話になるけど、ポルクスはカストールよりも遠くにあってそれぞれ動きが異なるの。日が昇る頃にはカストールと重なって見えるのがポルクスという月よ」

それで何か影響はないのだろうか？ いや、ポルクスは風に作用するのだから……。

「じゃあ、朝方に風の魔法を使うと、威力が上がったり？」

「するわね。月との距離や位置によっても効果は変わるらしいから、確かなことは言えないけれど」

「そうか、あまり考えない方が良さそうだな」

むしろ、俺にはあまり必要のないことのように思える。何故なら万が一、素晴らしく条件の整ったところで何かしらの強力な魔法を暴発させてしまったら、取り返しのつかないことになる可能性が高いだろう。

「それで良いと思うわ。あたしだってそんなこと、気にして魔法使っていないもの」

と、ネネル。すでに実力があるのだから、どう作用するかなんてどうでもいいわけだ。

「今はまだ良いけれど、その時になったらきちんと装備は揃えるのよ。魔法道具は杖だけじゃなくて、鎧や腕輪なんかにもあるから、よりの確な魔法を使えるようにそれで調子を整えるの」

「なるほど、ちょっと面白そうだな」

思ったことを口にしたら、何故かネネルに睨まれた。

「面白くはないわよ。アクセサリーに限るけど、中には魔法じやなくて、呪いと言われる悪い影響を及ぼす装備もあるんだから」

呪いの道具って、何だかすごく怖い感じがする。

「……悪い影響って？」

聞き返すと、ネネルがにやりと不敵な笑みを浮かべた。

「装備者に眩暈を起こさせたり、精神に影響を及ぼした場合は、望まない自死なんかもあるわ。もちろん、それは単純に相性が最悪に悪かった場合だけだけど」

「うわ……気をつけよう」

神の使者であるからには、そんなことはないと思いたかった。

ノートにそのことを一応書き留めて、俺は息をついた。

「そっぴや、ネネルの他にも宮廷魔女っているの？」

黒板を消していたネネルが振り返る。

「もちろんいるわよ、当たり前でしょ」

「だよな。何人くらい？」

「えー……っと」

ぶつぶつと名前を挙げて数を確認するネネル。

中途半端に消された黒板が妙にもどかしく、上の方があまりうまく消せていないことに気がついた。

「あたしを含めて八人ね。城に常駐しているのはその内の四人だけよ」

「みんな女？」

がたつと椅子を立ててネネルの隣へ立つ。

「男だっているわよ、魔女じゃなくて魔術士になるけど」

「そうか」

と、ネネルの手から黒板消しを取り上げて上の方を消してやる。

「あ、ちよっ……何、よけいなことしてんのよ!？」

ネネルが憤慨した様子で俺の背中を叩いた。

「何って、上の方が汚かったから消してやってるんだろ」

「だから、それがよけいだって言ってるの!」

と、黒板消しを取り返そうと伸ばす腕は短い。

子どもを相手にしている気分になって、俺は笑った。

「小さいんだから無理するなっつて」

「小さくないわよ! これが普通サイズ、みんなが大きいだけっ!」
劣等感を刺激された彼女が叫ぶのも気にせず、俺は黒板を綺麗に

してやった。

「あーもう」

と、らしくもなく口を尖らせるネネル。いつも上から目線で強気な印象の彼女だが、意外に可愛らしい一面もあるようだ。

6 意外なつながり

「では、私はマリアド様に最低限のことだけをお教えすればよろしいですね？」

と、ヴェルシが目をあげた。

「うん、それだけ覚えておけばあとは魔法でどうにかなるだろうし……ってゆーかさ、ヴェルシ」

「何でしょう？」

「あのー、そんなに礼儀正しくしないで良いよ？　つつか、言葉遣いも普通にしてくれるとありがたいな」

俺の前でひざまづいていたヴェルシが、遠慮がちに立ち上がる。

「マリアド様がそう望むのなら」

「あ、様って付けるのもやめてくれるか？」

ヴェルシが困惑した顔をした。隣にいたゼーシュも同じように困惑した表情で、俺を伺うように見る。

「ですが、マリアド様は陛下の客人です。呼び捨てにするなどと失礼な真似は」

「やめろ、ゼーシュ」

と、ヴェルシに止められてゼーシュがはっと口を閉じる。

「彼がやめると言っているんだ。言われたことに従うのも、私たち宮廷騎士の定め」

「……はい、分かりました」

そしてじつと俺を見るヴェルシとゼーシュ。何を言い出すのかと思っただけでいると、ヴェルシが一つ息をついてから口を開いた。

「それじゃあ、さっそく練習に入ろう」

良かった。ヴェルシはきちんと俺の気持ちをくみ取ってくれたようだ。

「おう、ありがとう」

と、笑って、俺は歩き出すヴェルシの後を追った。

まず最初にやらされたのは昨日と同じ、城の外を三周マラソンだった。

痛む脚を必死にあげてゼーシュと一緒に走っていく。

「やっぱ、きついな……」

と、速度を落としてしまふ俺に、ゼーシュが言う。

「今日は休憩無しですからね」

「マジかよ」

やってられない。体力作りが大事なのは分かっているが、わざと転んでサボりたいくらいだ。

「先に行っちゃいますよー?」

と、俺より前へ出て走り始めた。何だか悔しくて、無意識に速度を上げた。

三週目に入ろうとしたところで、ヴェルシが俺たちを呼び止めた。その近くには何故かフュエリの姿もあった。

「止まれ、二人とも。事情が変わった」

椅子に座って優雅にお茶を楽しんでいたネネルが俺を手招きする。

「こつち来て座りなさい」

何か大事な話があるようだ。それにしても助かった。

ネネルの向かいへ座ると、フュエリが俺に茶を入れてくれる。

「突然だけど、あんた明日、国民の前に出て」

「は?」

思わず眉をしかめてしまった。

「黒妖精たちのことは世間に知られているけれど、あんたの存在はまだ秘密にしてあったのよ」

かたんと俺の前へカップを渡すフュエリ。

「ですが、国民の多くが魔物の襲撃やその後のことを恐れています。どうやって回避するのか、国王陛下は具体策を示すことが出来ずにあります」

「そんな国王に人々は疑いの目を向け始めてる。国王が何もしないでいるから、みんな不安に思っているのよ」

「特に、情報の伝わりにくい地方ではそれが顕著に表れてきているらしい」

と、ヴェルシが息をつく。確かに、城下町では宮廷の騎士や魔女が身近に感じられるから良いけれど、地方はそうじゃない。

「だから明日、あんたは国民の前へ出てみんなを安心させるの」

「安心って……どうやって？」

カップを手にとって、一口すすった。身体が和らぐ感じがした。

「神の使者だと明言するだけです。あとは陛下たちが何とかしてくださいますので」

と、フュエリは言つてにこり笑う。

「それだけ？　じゃあ、意外と簡単かもな」

まあ、俺が国民の立場だったら救世主が現われてくれて嬉しいわけだし、やるしかないな。

しかし、何故かネネルはにやつとした顔で俺を見つめてきた。

「あんた、姫から衣装をもらったそうね？」

「え、うん」

「国民の前へ出るってことは、王家と顔を合わせることよ。さあ、もう分かるわよね？」

「……え？　分からないんだけど、何が言いたいんだよ？」

ネネルがわざとらしく溜め息をついた。

「鈍いわね。あんたは明日、姫からもらった衣装を着なきゃ駄目ってことよ」

嘘、何で？　いや、ちょっと待て、でもそうだよな、言われてみれば姫に会ったから、せっかくもらった服を着ないわけには……うっわ。

「最悪」

一気に気持ちが冷めてきた。すごく嫌だ、あんなふりふりでひらできらきらなドレス、誰が着るかよ！？

「はい、決定。姫に失礼の無いようにね」

「では話は終わったし、続きを始めようか」

と、ヴェルシが戸惑うばかりの俺を立ち上がらせた。

「一日だけですから、我慢なさってください」

「いや、ちょ、フエリい！」

「ほら、行くぞ。まだあと一周残っているだろう」

抵抗もむなしく、ずるずるとヴェルシに引きずられスタート地点へ戻る俺。その隣を歩いていたゼーシュがにこっと笑った。

「きつと似合いますよ、マリアドさんに可愛いドレス」

「やだ！ 絶対やだー！」

走る気力はすでにゼロになっていた。

ヴェルシたちと別れてから、俺は部屋に帰りづらくて城内をうろろろしていた。フエリは乗り気の様子だから、明日はどれを着るかと遊ばれるに違いない。

「部屋に帰りたくない」

「帰りなさいよ」

と、容赦なく返すネネル。もう少し優しくしてくれたら良いのに、なんて思っても無駄なので。

「……ジャスナ、大丈夫かな？」

話題を変えてみた。

「大丈夫よ。あの子は昔からちょっと特殊な能力を持ってるだけで、死にはしないわ」

「そっか」

俺のために自分を犠牲にしてくれたジャスナのことを思っていると、ネネルが言った。

「あたしが話すべきことではないけれど、あの子は街の外れにある施設で育ったのよ」

「……え？」

「赤ん坊の頃からね。あたしたちはその近くで生まれ育ったから、

あの子のことはだいたい知ってるわ」

「そうなんだ、意外だな」

知り合いだということは見て分かっていたけれど、そんな共通点があるとは思わなかった。

「もつとも、あたしは十二歳の時に宮廷魔女になっちゃったから、ジャスナを一番よく知るのは巫女長のセリンね」

と、どこか遠くを見つめる。

「え、まさか巫女長も？ いや、ちょっと待て……さっき、あたしたちって言ったよな？」

「言ったわ」

「たちつて、誰と誰のことをさしてるんだ？」

ネネルは俺の顔を見て、答えた。

「あたしとヴェルシとセリン、みんな幼なじみなの。セリンは一つ上だけど」

衝撃事実発覚。ヴェルシとネネルが同い年だなんて！

「マジかよ、すげーびっくりした」

「そんなに驚くことかしら？ 別にいいけど」

と、また前を見る。

三人が幼なじみであることは分かったが、その近くにジャスナのいた施設があったということは……四人とも、実は本当に知り合いだったわけだ。ヴェルシも、セリンやジャスナと仲良くするのか……ちよつと見てみたい。

頭の中でネネルを中心とした相関図を描いて、俺はふと気になることに突き当たる。

「じゃあ、ゼーシュは？」

「は？ あの子は知らないわよ」

何だ、残念。みんながみんな、つながりがあるわけないか。

「でも、ヴェルシが隊長に任命されてすぐ見習いになったわね。ちゃんと話したことないし、よく知らないけど」

「そうか、ありがとう」

機会があつたら尋ねてみよう、ゼーシュ本人に。

「……にしても、あんた、あの子と仲良いわよね？」

「え、そう？」

ちよつと目を丸くしてネネルを見ると、彼女はどこか怪しむ目をしていた。

「走つてる最中、よく無駄話してるじゃない」

「ああ、それは……だって、無言とかつまらねえじゃん」

「あら、それだけ？ でも彼、可愛いって一部で人気みたいよ？」
彼じゃねえ、と言いたかったが飲み込んだ。そんなことよりネネルがうざい。

「悪いけど、俺、まったくそーいうのねえから。つつか、俺はむしろ自分のことで精一杯だ」

意外そうな顔でネネルが目を丸くし、「あ、そう」と、呟いた。

7 国民の前にて

「国民の皆様にしつかり印象づけるためには、やはり派手な方が良いかもしれませんか」

と、いたるところに宝石のちりばめられたドレスをクローゼットから取り出してきて、俺へ合わせる。

「うーん、さすがにこれは派手すぎますね……」

それを机の上へそつと置いて、また別のドレスを取り出し、同じ事を繰り返す。真剣に衣装を選ぶフュエリに、俺は呆れていた。

「ちよつと地味ですね……いえ、知的な部分も演出しておきたいですし」

「なあ、フュエリ」

クローゼットへ向かおうとしていた彼が振り返った。

「はい、何でしょう？」

俺は山と積まれたドレスの数々を横目に、言う。

「確かに選んで欲しいとは言ったが、さっさと終わらせてくれないかな？」

うんざりだ、という表情を彼に向けると、フュエリがはつと背筋を正した。

「申し訳ありません、マリアド様！ ですが、どれもこれも似合いすぎて……」

「じゃあ、一番似合わない奴にして」

「えっ、そんな……」

わたわたとクローゼット内を探しては、すぐにこちらへ戻ってきてドレスの山を漁り出す。

「えっと、それではですね……これなんかいかがでしょう？」

と、取り出されたのは目に痛い真っ赤なドレスだった。花の飾りがあしらわれているものの、何となくダサイ。

「うん、ごめん。やっぱ似合うのにして」

「かしこまりました！」

慌てた様子でドレスを探すフュエリ。

自分がわがままを言っている自覚はあったが、かれこれ一時間以上もドレス選びをしている彼も同罪だ。さつさと、この退屈な時間を終わらせてくれ。

「では、こちらかこちら……どちらがよろしいですか？」

と、右手に青を基調としたふりふりレースのドレスと、左手にはリボンのあしらわれた黄色のドレスを持って、俺へ尋ねた。

正直、どっちが良いかなんて分からなかった。自分に合うかどうかなんて、さらに判断が付かない。

「姫の好きな方は？」

「こちらだと思われます」

フュエリは黄色のドレスを高く持ち上げた。

「じゃあ、それで」

「はいっ！」

やっと終わった。近くの椅子に座って溜め息をつき、これからのことを考える。

大勢の前で「神の使者です」と、言うだけらしいが、信じてもらえるのだろうか？ 万が一、石を投げられたらどうするのだろうか？ 杞憂に終わるであろうことは分かっていたが、溜め息をつかずにはいられなかった。

「……ぶ、くくつ、似合ってる似合ってる」

と、ネネルがにやけた顔で俺をまじまじと見た。

「笑ってるんじゃないよ」

「だって、すごく良い感じじゃない。可愛いわよ、マリアド」
くくつと、笑いをこらえるネネル。

これまでなるべく考えないようにしていたが、俺もそれなりに胸が大きかった。自分の両手で掴んでもはみ出るほどだ。ドレスを着た今だとなおさらそうなのだが、俺って実は女性っぽかった。

「じゃあ、行きましょう。国王たちが待ってるわ」

「ああ、そうだな」

と、彼女の後を追って廊下へ。

普段と違って城内はざわざわしているように思えた。

「あー、脚がすーすーする」

「慣れなさい」

「つつーか、靴も歩きづらいんだけど」

元々用意されていたものなのか、フユエリが棚から取り出した靴はぴかぴかのヒール靴だった。

「それも慣れよ」

「……ちえっ」

軽く舌打ちをして、窓の外に目を向ける。ざわついているのは中だけではなかったらしく、城の外にはたくさんの人々がひしめきあっていた。

「あんな大勢の前でやるのか？」

「当たり前でしょ」

急に緊張してきた。何百どころか、何千、何万もの人々に向けて俺は喋らなければいけないのだ。

「腹痛くなってきた」

「あ、そう」

相変わらずつれないネネルを憎く思いながら歩いていくと、とある部屋に着いた。そこには城下の広場に面したバルコニーがあり、国王たちの姿が見えた。

「とってもお似合いですわ、マリアド」

と、いち早く俺を見つけたフィアンシーナ姫が歩み寄ってくる。

「あ、ありがとうございます」

にこにこしている姫に俺も作り笑いを返し、国王とそのそばにいた側近たちが俺を振り返る。

「わざわざ申し訳ない、マリアド。では、さっそく始めるとするか」「はい」

国王がバルコニーへ出た途端、外からわつと声があがった。すぐにそれは静まって、人々は国王の言葉を待つ。

「待たせてしまって申し訳ない。今日は我々の希望の光、救世主となるであろうお方を皆へ紹介する」

ざわざわ、ひそひそ話をする声がある。

国王が振り返って俺を見る。姫がにこつと笑って俺の腕を取り、歩き出した。

民衆の前へ出た姫がお辞儀をし、俺もそれに倣う。

「こちらが、神の使者であらせられるマリアド殿である！」

「……え、えと、えーと」

頭の中が真っ白になって、何を喋ったらいいか分からなくなっていた。数え切れないほどの目が俺をじっと見つめているのだ。

「落ち着いて、マリアド」

と、姫が小さな声で言う。

俺ははつとして、深く息を吸った。

「神の使者、マリアドです」

もう一度、今度はしっかりとお辞儀をした。上出来だ。

俺が満足して顔を上げると、人々が騒ぎ出した。

「そんな嬢ちゃんに何が出来ると言うんだ！」

「本当にこの世界を救ってくれるのか!？」

「神の使者なら、それが本物だって証拠を示してよ！」

ああ、やっぱり……。

苦笑いを浮かべてしまう俺に、国王の目が向けられた。

「信じられない気持ちは分かる。しかし、この方は唯一、黒妖精たちに対抗する手段をお持ちなのだ！」

「ネネルから話は聞いていますわ。マリアドは、魔法がお得意なんですってね？」

と、姫。

つまり、俺は今ここで、その実力を示さなければいけない状況に追い込まれていた。

不安で後ろを振り返ると、ネネルは無言で頷いた。やれ、ということのようだ。

「……」

仕方がない、やるしかないか。

国王と姫から距離を取るように前へ出た。両手を前へ出して重ね、意識を集中させる。

「ヴェントス！」

手のひらから強風が生まれ出て、人々の間を勢いよく吹き抜けていく。様々なものを巻き込んで、城下町の端まで続いたその風は、最後に大きな轟音を残して消えた。

呆然としていた人々が俺の顔を見て、やがて声を上げ始めた。

「ほ、本物だっ！」

「世界を救うに相応しいお方だ！」

「マリアド様！」

わーわーと盛り上がる国民に、俺は複雑な気持ちを抱きつつ、微笑んだ。

「素晴らしかったですわ、マリアド」

と、姫がにこにこした顔で俺の腕に巻き付いてきた。

「さすがは神の使者、あれほど強力な魔法を間近で目にしたのは初めてですよ」

「あは……自分でも、ちょっとびっくりしました」

と、苦笑い。

「それにしても、何故風の魔法を？」

「え……えっと、何となく？」

「姫様、マリアドは風の魔法がお好きなんです。どうやら、性に合っているようで」

急にネネルが口を挟んできてびっくりした。

「あら、そうでしたの？ フィアンシーナは水の方が好きなのに」
「ちよっとがっかりした様子の姫を見て、俺はどうしたらいいか迷

った。魔法の好みなんて考えたことなかっただけに、俺には姫の言わんとすることが分からない。

「ところで、明日のお話は聞いてらっしゃる？」

「え、明日？ 何かあるんですか？」

俺が首を傾げると、姫は楽しそうにつこり笑った。

「最初の期限が近づいているので、騎士たちのためにパーティを開く予定です。マリアドは強制参加ですわ」

さらりと黒いことを言われた気がするのは気のせいだろうか。

「それは初耳です、姫。そのパーティには私も？」

「もちろんですわ。ネネルはマリアドの世話係ですもの」

どうやら、俺は明日もまた、こんな衣装を着なければならぬらしい。それも今度はパーティ、他人との距離が当たり前だが近い。

「明日は貴族の方々も招待していますし、きっと素敵な出逢いがあるはずですわ」

と、フィアンシーナ姫は俺へウィンクをした。素敵な出逢いも何も、俺はそんなのちつとも望んでいないわけだが……きっとまた、フユエリは俺の衣装選びにわくわくするのだろう。

「ありがとうございます、楽しみにしています」

無難な言葉で返事をした。

8 初めてのパーティー

「そうだよな。あと三日経ったら、魔物が出てくるんだよな」

夕方、何事もなかったようにヴェルシの訓練を受けた俺は、ふと
呟いた。

「詳しくは分かりませんし、魔物がどういった物かも分かりません。
戦いで、いつ命を落とすかも」

「うん……ゼーシュも、前線に出るんだろ？」

ゼーシュは先ほどの訓練で使用した武器を指示された場所へ置く。
そして何も言わず、振り向きざまに俺へ短剣を突きつけた。

はっとして身体を硬くすると、ゼーシュは笑った。

「もちろんです。見習いの身ではありますが、民間人の助けにはな
れるでしょう」

「……そうだな」

短剣を握っている手を優しく下へ降ろさせて、俺は思う。

「今はあまりにも平和すぎるんだな、実態が見えないから」

「そうですね」

ゼーシュは短剣を鞘へ収め、それを所定の場所へしまった。

「その時になつてみないと、何もできないものです」

ヴェルシは俺に短剣の使い方を教えてくれた。ゼーシュ相手に動
き方をみっちりたたき込まれ、その後でネネルから「魔法使いの武
器は杖だけよ」と、言われて落ちこんだ。

しかし、そんな俺を見てヴェルシが杖の扱いだつて似たようなも
のだと言って、杖での戦い方をきちんと教えてくれた。

これで、いざという時に魔法に頼らず戦うことが出来る……はず。

「明日が楽しみですね」

「そうか？ 俺はむしろ、不安しかないよ」

「ははっ、そんなに心配しなくて良いですよ」

ゼーシュが陽気に笑って、俺も釣られて笑った。確かに不満はあ

るけれど、今の生活は楽しかった。

翌朝。

「今日はとても忙しいのです」

「うん、何で？」

きつぱり言い切ったフュエリに理由を聞くと、彼は目を輝かせた。
「今日はパーティです、それも貴族の方々がいらっしゃるパーティなんですよ！ 私もちろん、その手伝いをさせていただくことになっております」

というわけで、と、彼が差し出したのは昨日俺が選ばなかった青のドレスだった。

「マリアド様はこちらをお召しになられて下さい」

ふりふりの青いドレス。昨日の物よりも胸元が開いていて、袖や裾のレースといい、女性らしさを引き立てるようなデザインだ。

可愛い女の子が着れば良いのだろうが、俺……男のはずなんだけどな。

「文句はなしです！ 今日はあの公爵様もいらすそうですから、気が抜けませんよ」

と、フュエリがいそいそと着替えの支度を始める。

俺は昨日にも増してドレスを着るのが嫌だったが、姫の笑顔のために我慢することにした。

その噂の公爵とやらにも会えるようだし、それならそいつがどんな顔なのか見に行くのだって悪くない。フュエリの趣味を理解するつもりはなかったが、そんな好奇心だけは持っていた。

広間は華やかだった。

着飾った人々で溢れかえり、テーブルには豪華な料理がたくさん用意されている。心なしか、行き交うメイドたちも普段よりきちっとしているように見える。

「あ、化粧してる」

広間の前で待っていたネネルは、俺の顔を見てそう言った。

「無理矢理されたんだよ」

と、不機嫌に返した俺だが、ふとネネルが普段と違うことに気づいた。

色の濃いマゼンタ色のドレスはタイトで、ギリギリまで入ったスリットは誘っているようにしか見えない。

「娼婦か、お前」

「わざと動きやすい服を着てるの。何かあった時、すぐあんたを守れるようにね」

と、ネネルは胸の谷間から折り畳み式の杖を取り出して見せた。

それは普通の物より小さかったが、頭部に着いた石がそれを杖だと分からせた。納得だ。

「そういうわけだから、あんたも一応、警戒しておきなさい」

「おう」

それにしても、色っぽい。これでもう少し身長が高ければ完璧なのに、何だか惜しいな、なんて。

「で、俺は今日、何をすれば良いんだ？」

「あたしの目が届かないところへ行かなければ、それだけで良いわ」
「何だよ、それ」

「何って、今日の主役は騎士たちなのよ？ まあ、あんたの所にもいろんな人たちが挨拶に来るでしょうけど」

そういえばそうだった。今日は魔物を退治してくれる騎士達のために開かれたパーティーだ。

「……ヴェルシとゼーシュは？」

「さあ、まだ来てないみたいだけど……」

と、二人して広間を見回す。

意識してみると、参加者の多くは体格が良い男女で、そのほとんどがパーティー慣れしていない様子だった。

貴族らしい人々の姿も見かけるが、何となく空気が違う。

「お前、こういった場所には慣れてるのか？」

「そうね、参加者の多いパーティーには、よく警備ついでに参加させられるわ」

「なるほどな」

そういえば、壁際に立っている参加者はネネルと同じように動きやすい衣装を着ている。本当に、万が一の事態に備えているのだろう。

ふいに城内がざわめいて、国王と王妃、そして姫が現われた。

「今日は城までお越しいただき、誠にありがとうございます。今宵は心ゆくまでお楽しみ下さい、騎士たちの勝利を祈って！」

「マリアド、あんたも楽しんで良いのよ」

と、ネネルが俺に耳打ちした。

それは分かったけれど、パーティーなんて生まれて初めてだから緊張する。あ、一度死んでるから当たり前か。

「その内にダンスタイムに入るでしょうから、気になる相手を誘うのも有りよ」

と、ネネル。どうやら、彼女は何か誤解をしているようだ。俺には気になる相手なんていないっていうのに。

少し機嫌を悪くしながら、俺は改めて城内の様子に目を向けた。すると、一組の夫婦らしき男女が俺に歩み寄ってきた。

「お初にお目にかかります、マリアド様」

と、恭しく俺の前で礼をして、一方的に自己紹介をする。

俺が戸惑っている内に男女は別の人の元へ向かって行ったが、俺はかなりの人数から視線を注がれていた。

そう、主役は騎士たちであるはずなのに、俺の方が人気を集めていたのだ。

我先にと俺の前へ来ては、人々が自己紹介をしては去っていく。まるで嵐のような時間が訪れを告げていた。

「早くもお疲れの様子だな、マリアド」

ようやく嵐が過ぎ去った頃、ドレス姿のヴェルシが俺の前へ来た。

「ああ、ヴェルシ。もう人、人で顔も名前も　　っつーか……」
「ん？」

不思議そうにするヴェルシだが、俺は彼女の意外な一面に驚きを隠せなかった。

というのも、いつもは男にも負けないラフな格好か鎧姿の彼女が、淡い桃色のドレスを着ているのだ。それも、超ふりふりでひらひらで、俺なんかよりも遙かに女の子らしい。

「か、可愛いな、今日は」

思わず恥ずかしくなって目を逸らす。

ヴェルシは俺の考えを感じ取ったのか、ネネルに共感を求めた。

「私だつて女だ、別に珍しいことはないだろう。なあ、ネネル？」

「そうね、騎士団の第一隊長が乙女趣味っていうのは、確かに想像つかないけれど」

「ネネル！」

ヴェルシが顔を赤くしてネネルを小突いた。その後ろ姿もすごく乙女だ。

まあ、確かにヴェルシだつて女の子なんだから良いだろう。というか、そんなふりふりドレスが似合っているところがまたすごい。

「あー……で、ゼーシュは？」

はっとして俺の顔を見るヴェルシ。

「先ほどまで第三部隊の奴らに捕まっていたが……」

と、周囲に目をやる。

俺もヴェルシと同じように彼女の姿を目で探したが、あまりにも人が多すぎてよく分からなかった。ゼーシュのことだから、いつかは俺に挨拶くらいしに来るだろうが……。

すると、見知らぬ美青年が俺へ声をかけてきた。

「どなたかお探しですか？　マリアド様」

9 噂の公爵

「まったく、来るのが遅いんじゃない？ ソールハロツシュ」

まるで人の手で作られた彫像のように目鼻立ちの整った顔に見惚れていた俺は、ネネルの言葉で我に返った。

「そうかい？ タイミングを計っていたら、遅れてしまったようだ」と、下品にならない程度に声を上げて笑う。

びつくりした。この世にこれほど綺麗な男性がいるなんて。いや、別に他意はないのだけれど。

「お久しぶりです、セカレ公爵」

と、ヴェルシが彼へ挨拶をした。長身の美青年は彼女の姿を見ると、にっこり微笑んで挨拶を返す。

「こちらこそお久しぶりです、ヴェルシさん」
とても愛想が良い。

ネネルは何やら彼のことか気に食わない様子だったが、ふいに俺の腕を掴んだ。

「こちらが神の使者のマリアドよ。さあ、挨拶して」

「え、あ……マリアド、です」

彼が再び俺に顔を向け、にっこり。

「申し遅れました、私はソールハロツシュ・マシユア・フォン・セカレです」

名前の長さについていけない。

「ソールとお呼び下さい」

と、美青年が言ってくれて助かった。

「あ、ああ、はい」

後ろで一つに結わえられた金色の長髪はゆるく波打ち、鋭さを思わせる目の中にはエメラルドグリーン。優しい笑みは見ているだけでドキッとするのに、色っぽい声がまた優しくくて。

「……触らせないわよ？」

と、何故か俺の前に立つネネル。

何してるんだと彼女の肩を掴む前に、ソルが俺の横へ素早く移動した。

「失礼」

と、俺の股間に手を伸ばす公爵。一瞬ではあったけど、ぎゅっと握られて飛び上がった。

「うわっ、な、ナニを……!？」

「合格です」

と、わけの分らないことを俺の耳元に囁いてから、優雅に逃走していく公爵。

「待ちなさい、ソル!!」

「……さ、さわ、さわられ、触られ、た……」

まさか男に握られる日が来るとは思っても見なかった。それも、合格って何だ……!？

溜め息をついたネネルが、混乱している俺へ言う。

「初めて会う人には必ずやるのよ、あいつ。ちなみに、何て言われた？」

「え、っと……合格、って」

「はぁ、お眼鏡に適ったってわけね。あいつ、下の大きさを人を見るから」

見ると、ヴェルシはどこか苦い顔をしていた。彼女もまた、彼に触られたことがあるらしい。

合格と言われても嬉しい気持ちはわかず、俺は息について気分を落ち着かせた。それからネネルへ尋ねる。

「あの人はいったい、何者なんだ？」

「公爵よ。王家の親戚でお金持ち。彼に関して言うなら、あれで宮廷魔術士なの。つまり、あたしの同僚よ」

「魔術師……公爵なのにな？」

「ムカツクくらいに才能豊かで、魔力をもてあますのはもったいないって自ら希望したの」

貴族の考える事はまったく分からない。

「あんまり深く関わらない方が身の為よ。くれぐれも、外見に騙されないでね」

「う、うん」

彼の顔を思い起こしながら、俺はフユエリの言っていた公爵が彼で間違いないと確信した。

宮廷楽士たちが演奏を始めると、広間の中央はダンスする人々で賑わうようになった。

一通り腹ごしらえを済ませた俺は、ただネネルの隣でぼーっとしていた。

すると、一人の騎士らしき精悍な顔つきの青年が来て言う。

「一曲、願えますか？」

「ええ」

楽しそうに中央へ手を引かれていくネネルを横目に見て、何だか嫌な気分になった。神の使者として人気を集めていたのが遠い昔のように、俺は一人きりだったのだ。

気づけばどこもかしこもカップルばかり。煌々と輝く月たちが城内にロマンチックな雰囲気を出している。

ヴェルシさえもどこかの誰かとダンスしているし、姫は用意された椅子に座って高いところから俺たちを眺めている。

俺にも誘いがかからないかな、とか、柄にもなく思ってしまった。いやいや、俺はダンスなんてしたことないから踊れないんだ。それなら、何もせずにいたって良いだろう。

と、勝手に一人で結論づけても寂しくて。

「マリアドさん」

名前を呼ばれてドキツとした。

「ああ、ゼーシュ」

よく知る相手であることが、俺をまた嬉しくさせた。

俺の正面へ立ったゼーシュは、ドレスを着ていなかった。

「あれ、何でそんな格好？」

尋ねると、彼女が少し寂しそうに笑う。

「胸がないので、こっちの方が楽なんです」

「……そっか」

いわゆる男性用の正装だ。俺と取り替えることが出来たら良いのに、と思う。

「それより、お相手して下さいませんか？」

「え？」

ゼーシュが俺へ腕を差し出す。

「無理だよ。俺、ダンスなんて知らないし」

と、誘いを断ろうとしたら、ゼーシュが笑った。

「僕に合わせて下されば大丈夫ですよ」

「……でも」

みんなに溶け込めるだろうか。俺だけ、浮いてしまわないだろうか？

しかし、ゼーシュを待たせているのも悪い気がして、俺は彼女の腕を取った。

そのまま中央へ引かれていき、男みたいな女の子が俺の手を自分の肩に置かせ、俺の腰に手を回す。反対側の手は、ぎゅっと繋ぎ合っていた。

「そんなに緊張してると、転んじゃいますよ」

「え、ああ、うん」

ヒールのせいで普段にも増して小さく見える彼女が、間近で笑う。

「大丈夫、僕を信じて」

「う、うん……」

恥ずかしくなってくるのは何故だろう？ 俺が女みたいだから？
ゼーシュがいつもよりも素敵に笑うから？

違う。

いつの間にか席を立ったフィアンシーナ姫が、俺の方をじっと見つめているからだ！

「うふふ、あの美少年騎士見習いとマリアド、なんて素敵な組み合わせでしょう」

距離はあったが、丸聞こえである。

動揺を隠すように、俺はステップに意識を集中させた。

ゼーシュも姫の視線には気がついていない様子だが、何も言わず無視している。

こうして、パーティの夜は更けていくのだった。

「おかえりなさいませ、マリアド様」

「何でそんなに残念そうなんだ？」

部屋へ戻るなり、俺はフュエリへそう言った。

「何故って、今夜はパーティだったんですよ？ 一人くらい、お持ち帰りになられてもよろしいですよに」

お持ち帰りって何だ。

姫にしつこく観察され続けた俺は、すっかり疲れ果てていた。

「楽しかったですか？」

「んー、まあまあ」

フュエリに手伝ってもらい、ドレスを脱いで寝間着へと着替える。シャワーを浴びる気力すら残っていなかった。

「ダンスも楽しまれたとか？」

「うん」

「お相手は？」

「……ゼーシュだけだ」

と、俺はフュエリを睨み付けてやる。

「そうですね、あの見習い騎士と……」

ドレスを片付けながら、彼はまた尋ねた。

「セカレ公爵には会われましたか？」

「会ったよ、大事なところ握られた」

無意識にあの時のことを思い出し、沸々と怒りのような恥ずかしさがこみ上げてくる。

「そうでしたか。素敵な方だったでしょう?」

「どうだかな……まあ、お前のことがよく分かった気がするよ」
と、フュエリの顔を見てにやっと笑った。

彼は少し反応に困った様子だったが、すぐに俺へ言う。

「確かに男遊びの噂が絶えない方ですが、根はとても真面目な方ですよ」

俺は言葉を返さずにベッドへ向かった。さっさと中へ潜り込んで、フュエリへ聞こえるように呟く。

「おやすみ」

「……おやすみなさいませ、マリアド様」

10 俺に出来ること

最初の期限は明後日。

明日はそのための準備で騎士団は一日を費やす予定らしい。

これが最後になるであろう訓練の前に、俺は言った。

「けどさ、俺、ちょっと考えたんだ」

「考えたって、何を？」

と、ヴェルシ。

「俺はさ、すげー魔法が使えるわけじゃん？ それなら、その魔法をいかに使いこなすかの方が、大事なんじゃないかって」

「それはつまり……」

「そう、俺は武術じゃなくて魔法の練習をするべきだと思う」

俺たちの様子を見ていたネネルが頷いた。

「確かにその通りだわ。だけどマリアド、あんたはいざという時に力を発揮するだけで良いのよ」

何故だかイラッと来て、俺は言い返す。

「それは分かってるけど、その時しか戦わないなんて何様だよ!？」

「神の使者様」

「救世主様」

二人にそう返されて、俺は口を閉じざるを得なかった。

「だいたいね、今から焦ってどうするのよ？ まだ何も始まってないわ」

と、ネネルが相変わらず冷たい態度で言う。

「そりゃ、そうだけど……」

「マリアドが共に戦ってくれるのは心強いが、万が一怪我などされてはいけないしな」

ヴェルシまでそんなことを言うものだから、俺はますます言葉を見失う。

「この前やったように、ああやって適当な魔法を使っただけでもすこ

い威力なんだから、放っておいたって強力な魔法が使えるわ」

思わず溜め息が出た。

俺は自分から何か、誰かの役に立つことをしたいだけなのに、それが許されないなんてもどかしい。

「……分かったよ」

と、俺は機嫌を悪くしてヴェルシに背を向けた。

「ちよつと、どこ行くつもり？」

声をかけるネネルを無視し、さっさとその場を離れて行く。

途中、道具を持ってきたゼーシュとすれ違ったが、それすらも無視した。

嫌だった。

自分が自分じゃないような、自分という存在の素晴らしさが、何故かとても憎らしかった。

「……マリアド様？」

はっと顔を上げると、目の前にいたのはジャスナだった。彼女の手には箒が握られており、そのすぐ後ろには聖堂がそびえ立っている。

「ああ、ジャスナ……元気になったんだね」

「はい。今朝、目覚めたばかりです。ご心配をおかけして、すみませんでした」

と、礼儀正しく礼をするジャスナ。

ふと後ろを振り向いたが、そこには誰もいなかった。俺はあれからずっと一人で、こんなところまで来てしまったようだ。自分がそう望んでやったことなのに、寂しかった。

その一方で、無意識なのか、意識してのことなのか……俺はジャスナの顔を見て安心感を覚えていた。

「どうかなされましたか？」

と、首を傾げるジャスナへ、俺は笑顔を返した。

「いや、別に何でもないさ。それより、ジャスナが元気そうで良か

った」

彼女もにっこり微笑んで、再び頭を下げた。

前に来た時は気づかなかったけれど、聖堂の裏庭には小さな花畑があった。

「そりゃ、俺がそーいう存在だっていう自覚はあるさ。でも、だからって何もしないなんておかしいだろ」

愚痴る俺の横顔をじっと見つめて、ジャスナが相槌を打つ。

「その気持ちは分かります。わたしも、自分に出来ることがあるならやらずにはいられません」

「だろ？」

と、俺が思わず彼女に顔を向けると、ジャスナは「ですが」と、切り出した。

「マリアド様はとても大事な存在です。危険には晒せません」

「……そうか」

目を逸らして、足元の地面を蹴る。

どいつもこいつも、俺が一人の人間だって事、忘れてるんじゃないのか？ 無性に腹が立つ。

「あ、あの……っ」

察したジャスナが俺へ呼びかけたが、俺は無意識に彼女から距離を取っていた。

仕方なく足を止めて、振り返る。風に乗って花の香りがした。

「戦うだけが、出来ることではないと思います。その……わたし、見ちゃいましたから」

と、ジャスナは気まずそうに箸をもてあそんだ。

「見たって、何を？」

「……未来、です。正しく言うと、実現しうるひとつの可能性」「可能性？」

俺の力を使えば魔物も黒妖精も敵じゃないのに、その他にやれることがあるっていうのか？

「はい。マリアド様には、古の時代に存在したと言われている、超高度魔法を蘇らせることが出来るんじゃないかと」

よく分からなかったけれど、希望が見えた気がした。

「それって？」

「いわゆる、身体蘇生魔法です。傷や病を癒すと言われていますが、そんな都合の良い魔法は今の時代には存在しません」

「……それを、俺が？」

「はい、きつと出来ると思います」

と、ジャスナが強く言った。

もしも、その身体蘇生魔法とやらを俺が習得できたなら、俺は誰かの役に立てる？

「詳しいことは分かりませんが、王室の図書館に資料があるはずですよ。あ、でも、ネネルさんに知られたら怒られるかも」

と、ジャスナは俯いた。どうやら、俺に出来る事というのは、ネネルからしたら大変なことらしい。

「それでも、やるだけやってみるよ」

毎日何もせず、ぐうたら過ごすよりはマシだ。

彼女の方へ歩み寄り、その手をとった。

「ありがとう、ジャスナ」

「マリアド様……わたしで良ければ、いつでもお力になりますから！」

向けられた真剣なまなざしに、俺は頷き返した。

古の超高度魔法。

それがどういったものであるか、どんな属性に類するのかは分からない。けれども、古の魔法ということは、この世界の歴史を紐解いていけば自然と関連してくる事柄なのでは無かろうか。

「あんた、今までどこいったのよ？」

俺の部屋で帰りを待っていたらしいネネルに問いかけられたが、俺は答えなかった。

彼女の横を通って窓際へ立ち、遠くの地平線を見つめる。

「俺、あの後さらに考えたんだ」

「はあ？」

「俺……この世界のこと、一から勉強するよ。魔法だけじゃなく、歴史もな」

と、振り返る。

ネネルは疑わしげな目で俺を見ていたが、呆れたように言い捨てた。

「勝手にしなさい」

と、席を立って扉へ向かう。

「何するつもりか分からないけど、あたしたちを困らせたり、心配させるようなことだけはしないでね」

ばたんと扉の閉まる音が、やけに大きく聞こえた。

息をついて、再び窓外に目を向ける。

今はまだ平和そのものだけど、明後日には魔物が世界に現われて人々を襲うだろう。

ヴェルシやゼーシュがその魔物退治をしている最中、俺は部屋でじっとしているなんてごめんだ。

ネネルには呆れられてしまったけれど、俺はやるぞ。身体蘇生魔法とやらを、必ず習得してみせる！

……でも、それを本当に習得してしまったら、俺って無敵じゃね？ やべ、何この存在感。これなら、黒妖精になんて絶対に負けないな。俺は思わず、にやついた。

11 チャンスは紙一重

いつもなら、朝食が終わってのんびりしている時にネネルが部屋へやってくる。

しかし、今日はどうだろう。昨日のあれ以来、彼女とは顔も合わせていないだけに、何だか気まずかった。

いつもどおりに部屋へ来てくれるなら良いのだけれど、それが怪しいのだからもやもやする。

部屋で待っているのも変な気がして、俺は朝食の片付けから戻ったフュエリへ声をかけた。

「なあ、フュエリ」

彼が俺の顔を見て首を傾げた。

「何でしょうか？」

「あのー……その、図書館ってどこにあるか知ってる？」
と、俺が尋ねると、フュエリはにっこり頷いた。

「ええ、もちろん存じております。何か調べ物ですか？」

「うん……ちよつとな」

言葉を濁す俺に構わず、フュエリは言う。

「分かりました、すぐにご案内させていただきますましょう」

「あ、ありがとう」

フュエリが仕事のひとつとして、仕事の中として俺に接してくれることが嬉しかった。彼は本当に良い奴だ。

「こちらがその図書館になります」

そこは城の中でも外れの方にあった。聖堂の方向とは真逆で、メイドの姿すら見えないような人気のない所だ。

年代を感じさせる物々しい扉が入り口らしく、俺はその取っ手に手をかけた。

「何時頃お部屋に戻られますか？」

「え？」

突然フュエリに聞かれて、俺は目を丸くした。

「付いてきてくれるんじゃないのか？」

フュエリはフュエリで、俺の言葉に目を丸くする。

「私にも仕事がありますので……マリアド様の用が済んだ頃、お迎えに上がるうかと思っておりました」

「……そっか、そうだよな」

彼は俺の世話をしてくれるけれど、主は俺じゃない。

諦めてフュエリから視線を逸らした。彼もまた、俺の意をくみ取って言う。

「それでは、昼食の前にお迎えに上がります」

「うん」

深々と頭を下げてから俺に背を向けて歩き出すフュエリ。

俺は扉を開けることもせず、言った。

「さみしいな」

フュエリの足が止まる。

「別に一人でも良いけど、図書館入るの初めてだし、心細いな」

そのまま待っていたら、フュエリがすたすたとこちらへ戻ってきた。

そしてにつこり笑う。

「分かりました。お供させていただきます」

「そう来なくっちゃ」

にこつと俺も笑って、扉を開けた。

室内は本の匂いでむわつとしていた。

俺たち以外に訪問者はいないのか、とても静かだ。いるのは、入り口近くの扉の先に見える司書の女性だけ。

「静かだな」

「図書館ですから」

そういえば、図書館では静かにするのが決まりだった。どうしてかは分からないけれど。

ずらつと並んだ棚を一つ一つ見ていく。

まず俺が立ち止まったのは歴史の棚だ。分厚い本から薄っぺらな本まで、種類が豊富に揃っている。

「歴史についてお調べですか？」

「うん、まあな」

目に付いた一冊を取り出してぱらぱらとめくってみた。

この国が成立した頃の事が書かれていたが、どうやら俺の欲しい情報はなさそうだ。

すぐにそれを棚へ戻して、俺はふとフュエリへ尋ねる。

「お前さ、秘密って守れる？」

「秘密、ですか？」

何を期待しているのか、どこか嬉しそうにして彼は返答する。

「場合に寄りますね」

「じゃあ教えない」

と、俺は言ったが、元から教えるつもりなんて無かった。

別の本を手にとって、先ほどのようにぱらぱらと中身を確認する。今度は広く、世界の歴史が書かれていた。これなら使えそうだ。

「……あの、マリアド様」

「何？」

「その……ネネル様と、何かあったのですか？」

急にネネルの名前を出されてびっくりした。思わず本を閉じ、俺は彼の顔を見る。

「何かって……ちょっと、意見のすれ違いはあったけど」

「そうでしたか。ケンカというわけでは？」

「……ないよ、ケンカじゃない。でも、怒らせたかもしれないとは思う」

と、手にした本の表紙に目を落とす。

フュエリは納得したように頷くと、いつもみたいに優しい声で言った。

「あの方は少し、心配性な所がありますから」

「うん……」

確かにあいつは俺のことを心配しすぎだと思う。俺だって自分に出来ることはやっていきたいのに、あいつはそれを駄目だと言う。勝手にしろと吐き捨てて、自分勝手に俺に背を向けた。

「我が儘だしな、あいつ。でも俺は怒ってないから、大丈夫だぜ」
「ええ、そのようですね」

フユエリがそう言つて、ほっとしたように息をついた。

気を取り直し、俺はまた柵に手を伸ばし始めた。古の超高度魔法について、さりげなく調べなければならないのだ。

それからいくつかの本を手にとり、椅子と机のある方へ歩き出す。すると、扉の開く音がした。無意識にそちらへ顔を向けた俺は、思わず苦い顔を浮かべてしまう。

「おや、マリアド嬢ではありませんか」

今現在、俺が最も苦手とする人物……ソールハロツシュだった。

「こんなところで会えるとは、なんて喜ばしい」
と、俺の方へ歩み寄ってくる。

無視して机の上に本をどさつと置き、椅子へ座った。その場で立ち尽くしているフユエリは、公爵の登場にただただ驚くばかりだ。しかし、ソールハロツシュは俺しか見えていない様子で俺へ言うのだった。

「こんなところに何の用です？ これは……世界史に興味が？」

と、俺が読もうとしていた本を取り上げる。いちいちムカツク野郎だ。

俺は彼から本を取り返して言った。

「悪いんだけど、邪魔しないでくれない？」

「邪魔だなんてとんでもない。あなたのお役に立てたらと思ってお声をおかけしたのに」

何を言っても無駄に思えて、俺は無視することにした。

すると、ソールハロツシュはどこかの柵へと消えていく。俺はすぐに本を開いた。

そして一冊の本を手に戻ってきたソールハロツシュは、何故か俺の隣へ腰を下ろした。

フュエリはその向かいにそっと腰を下ろし、公爵の顔をあからさまに見つめている。

……この状況、耐えられない。

顔を上げて席を移動しようと本をまとめた時、ソールハロツシュの読んでいる本に目がいった。そのタイトルは『超高度魔法について』。

「……そ、ソル、それって」

声をかけずにはいらなかった。

「ああ、超高度魔法についての論文ですよ。以前から研究を続けているのですが、なかなか成功しなくて」

と、どこか誇らしげに返すソールハロツシュ。

「……研究、って？」

「超高度魔法を成立させるための研究です」

呆然としている俺を見て、彼が不思議そうに首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「あ、えつと……超高度っていうくらいだから、やっぱり、すごいんだよね？」

「簡単に言つと、傷や病気を癒す回復魔法ですよ。その昔、神よりその力を与えられた魔術士にのみ使う事を許された、最高の魔法です」

息をついて、椅子に座り直した。まさか、身近に超高度魔法を研究している人がいるなんて。

さりげなく情報を集めるつもりでいたけれど、こうなったら彼に教えてもらった方が良くはないだろうか。幸いなことに、俺は彼に気に入られている。しかし、ソールハロツシュは最悪な変人野郎だ。果たしてどうする、俺？

「もし興味をお持ちなら、研究室へご案内しますが……どうです、マリアド嬢？」

はっとして我に返る。彼の方から誘ってきた！　これはチャンスだ！　って、何かおかしくないか？

「え？」

「ですから、マリアド嬢には特別に研究室へお招きして、詳しい内容をお教えすると言っているんです」

につこり笑うソールハロツシュの顔には、下心がありありと浮かんでいる。

初めに会った時はそこまで気づかなかったが、彼は俺のことを女だと思い込んでいるらしい。つまり、俺は女として彼に気に入られていたわけで……じゃあ、恋仲になってもおかしくないんじゃないかね？　だってほら、そうしたら相手の研究成果は全て俺のものだし、そうしたら手間が省けてジャスナの手を借りることもなく……と、そこまで考えて躊躇った。

相手は初対面でいきなりあそこを触ってきた奴だ。すげー美青年で公爵で魔術士。ネネルには近づくなと言われた、その人。

「大丈夫ですって、この前みたいなことはしませんから」と、うさんくさく笑う。

俺は少し悩んで、フユエリを見た。

「メイドも連れて行って良いなら」

ソールハロツシュはメイドをちらっと見やっってから、俺へ苦笑した。

「仕方ない方ですね。分かりました、良いでしょう」

彼が俺を気に入っていることを、フユエリは一体どう思っているのだろう？　気になったが、聞く気にはなれなかった。

12 推測の話

その部屋には窓が一つしかなかった。壁は見た目にも頑丈で、奥にある机の上には書物が散乱している。

「宮廷魔術士の部屋は、どこも防音になっているんですよ」

と、ソールハロツシュは言って、机の上を片付け始めた。

フユエリはメイドらしく扉の前で待機していた。それ以上先へ入ろうとせず、俺たちの方を見守るばかりだ。

「へえ、何で？」

「三十年ほど前のことです。この国は今ほどの世界的権力もなく、長きにわたって他国と戦争をしていました」

「……戦争」

そういえば、この国って実は大きいんだよな。今ではこの国こそが世界を動かすと言われてるくらいで……昔の戦争があつての、今の平和だ。

ソールハロツシュは本を棚へしまいながら語った。

「その当時は、魔法こそが主な戦力とされていたそうです。その為に、魔術士に与えられた部屋は王族のそれよりも頑丈に造られ、中の音が外へ漏れない設計にされたんです。つまり、この部屋はその名残というわけですね」

「そうか……」

言われてみれば、初めに俺が出てきた部屋もこんなところだった。きっと、あれはネネルの部屋だったのだろう。

片付けを済ませると、ソールハロツシュが俺を手招きした。

「遠慮しないでこちらへどうぞ、マリアド嬢」

「あ、ああ」

歩みを進めて奥へ向かう。

ソールハロツシュの引いてくれた椅子に腰かけて、俺は窓から差し込む外光を眩しく思った。

「一説には、次元の扉のように魔方陣を必要とするとか」

と、彼が俺の前へ一枚の紙を差し出した。丸い円の中にいくつもの線が描かれた不思議な図形だ。

「これが、その？」

「ええ。ですが、デマでした」

と、紙を取り上げるソールハロツシュ。

「超高度魔法は身体蘇生魔法ですからね。やはり、何かの属性を使用するはずなんですが、水でも炎でも、風でもない」

「じゃあ、何なんだよ？」

俺の前に立ち止まり、ソールハロツシュが言う。

「『大地』です」

「それって属性じゃねえじゃん」

思わず俺がそう返すと、魔術士は笑った。

「そうなんですよ。それが問題なのです」
よく分からない。

「では、何故古代には存在した魔法が、今の時代になって存在しなくなってしまったのか？ マリアド嬢、あなたはどう考えます？」

と、今度は真摯な表情を俺へ向ける。

問われたことはつまり、こうだ。昔はあったものが今、ないのは何故か？ 普通なら、残っていてもおかしくないはずだが……。

「……あ、誰かが意図的にその存在を消した！」

「残念、違います」

自信があつた答えだけに、すぐ否定されてムカツときた。

「変わったんですよ、この世界が」

と、ソールハロツシュ。

俺は口をとがらせて続きを待った。

「人々が魔法を取得し、それによって文化が成長するにつれ、『大地』は本来の魔力を失ってしまったのです」

「ふうん？」

「魔法に限らず、あらゆる方法で人々が生活を豊かにしていくほど

に、その魔力は弱まっています。それによって、昔は存在していた属性が消滅しました」

属性が消滅？

「それは光です」

と、ソールハロツシュ。

「その光属性こそが、超高度魔法に必要とされる属性なのです。：

…まあ、全部私の推測ですけどね」

にこつと茶目っぽく笑う。

俺はこみ上げてくる怒りに肩を震わせたが、彼の推測が正しいように思えて諦めた。いずれにせよ、俺にはその推測を裏返すだけの知識を持っていない。

「で、その推測は証明できないのかよ？」

と、彼を睨む。

すると、ソールハロツシュは笑うのをやめて言った。

「出来ませんよ。何故ならすでに消滅した属性なのです。それを蘇らせる方法が分からない限り、何も出来ないじゃないですか」

ムカつく。口ではすごいことを言っていたくせに、実際はありもしない妄想に逃げただけじゃないか！

「ですが、その痕跡を確かめに行くことは出来ないこともありません」

「は？」

あからさまに俺が疑うと、魔術士はまた真剣な顔をする。

「ただ、一人で行くには少し遠いところでして……費用も馬鹿にならないので、保留していたところなんです」

「……で？」

その先の言葉は、予想が付いた。

「マリアド嬢に協力していただけるのなら、国からの支援だって受けられるでしょう。どうです、賛同していただだけませんか？」

「嫌だ」

「……そうですか」

ちよつとがっかりした様子でソールハロツシュは口を閉ざした。それから向かいの椅子に腰を下ろし、溜め息をついてみせる。わざとらしい。

「他には？」

何もないのなら、さっさと部屋を後にしようと思って問うた。ソールハロツシュは口を開かない。

何を企んでいるのか分からないだけに、長居は危険だと俺の直感がささやきだす。俺が期待しすぎたのか、あまり良い情報は得られなかった。やはり、自分の力で探した方が良さうだ。

「……何もないならもう帰る」

と、俺が椅子を立つと、彼がふいに言った。

「宗教の中の話ですが、光は神の属性とされています。実際には存在しないから、今の人々は光を空想の物だと思い込んでいる」

「……へえ」

佇む俺に、彼が席を立つて行く手を阻む。

「もしかすると、神の使者であるあなたにも、その光属性が宿っていたりして？」

にやりと怪しく微笑んで、そつと俺の髪に手を伸ばす。

「……まさか」

強気な口調で否定し、相手の様子をうかがう。

ゆつくりと近づいてくる整った顔……思わず後ずさる俺の左足。

「本当にそう思いますか？ あなたは神の使者なんですよ。この世界で最も、神に近い者……」

彼が俺の唇にキスする直前、俺はソールハロツシュの腹に拳を入れてやった。

「っ！？」

「気が向いたらまた来る」

と、言い残してフュエリに目を向けた。

「帰るぞ、フュエリ」

「は、はいっ」

腹を抱えてうずくまるソールハロツシュを一度も振り返らず、俺はさっさと部屋を後にした。

廊下の途中だった。

「どこ行つてたのよ、マリアド」

「……変態魔術士に誘われて付いてっただけだ」と、俺はネネルとすれ違う。

「あいつには近づくなつて言つたでしょう」

「ああ、言われた」

無性に苛々していた。

「まさかあんた、あいつに惚れたの？」

と、ネネルに言われて足を止める。

振り返つてすぐに否定した。

「は？　んなわけねえだろ」

ネネルは半信半疑な様子で言う。

「じゃあ、どうしてあいつに付いていったのよ？　答えなさい」

「……それは」

彼の研究に興味があるからだなんて言えない。

二人の様子をうかがっていたフユエリが、ふいに口を開いた。

「廊下で偶然、出逢つたんです。マリアド様は私を連れて行って良いなら、と、誘いに応じただけです。何もおかしいことは」

「フユエリは黙つてて」

「……すみません」

と、縮こまるフユエリ。

じつと俺を睨んでいるネネルへ、考えた末に言葉を返した。

「暇だから付いていっただけだ」

「それだけ？」

「ああ、それだけの理由だ」

呆れたようにネネルが息をつく。

「まったく、魔法ならあたしが教えてやるのに……」

どうやら、彼女はありがたい勘違いをしてくれたようだった。それなら、それに乗らない手はない。

「しょ、しょーがねえだろ、俺が知ってる魔術士はお前とあいつの二人だけなんだから」

「それもそうだったわね。とりあえずお昼にしましょう、続きはその後よ」

と、ネネルが俺の横を通り過ぎて行く。

安心して、俺もすぐに彼女の隣へ並んだ。

「心配かけたみたいで、悪かったな」

「はっ！？ 心配なんてしてないわよっ、あたしはあんたの世話係なだけで」

まだまだ、彼女に俺の企みがばれる日は来そうにない。

1 最初の期限

一瞬、悪夢を見ていたのかと思った。しかし違った。瞬きを何回かして、上半身を起こす。

けたたましい鳴き声が聞こえ、窓の外を見たことのない巨大な鳥が飛んでいった。

「……」

静かな室内に、街の喧噪が響く。悲鳴や鳴き声、何かの壊れる音。ついにこの日が来てしまった。

「ヴェルシとゼーシュは？」

「城下町の南方を守っているわ。……守り切れてないようだけど」昨日まで存在したはずの平和は、今や欠片もない。

「どうするんだよ、これ」

と、俺は紅茶のカップを手にとった。いつものように持ち上げようとして、やめた。

「世界の状況を確認次第、対策を取るそうよ。今は騎士団に任せるしかないわ」

「……魔物にやられたら？」

赤い紅茶に映る俺は、情けない顔をしていた。居ても立ってもいられないくせに、何も出来ないもどかしさで板挟みになっている。

「近くの医院や救護室に運ばれて治療を受ける。また戦えるようになったら」

「戦うのか？」

向かいに座ったネネルはじつと俺を見て、息をついた。

「それが騎士団の仕事よ。騎士見習いも戦場に出てるから、そう簡単に数が減ると思えないけれど？」

確かに彼女の言う通りだった。

この日のために地方配属された騎士団員を含めると、総数は軽く

万を越す。街によつては有志による自警団などもあるから、実際に魔物と対峙しているのはその何十倍だ。

分かつていながら、俺はやりきれない気分でした。カップを口元へ運び、紅茶をぐつと一気に飲み干す。

「何か出来ることはないのかよ」

がたつと席を立つて、室内をあてもなく歩き始めた。

ネネルはそんな俺を見て、相変わらず冷めたことを言う。

「勉強することね。それとも、そのあんたの力で魔物たちをやっつけに行く？」

行つたところで、民間人を巻き込まない保証はない。それに加えて……。

「仮に魔物を倒したとして、その後、人々が騎士団ではなく、あんたに助けを求めて群がるのは当然よね」

それでは俺の身が持たないことも、容易に想像が付いた。

せめて魔物たちの様子や現在の状況を隅々まで把握するくらいしか、俺には出来ないのか。

「なあ、ひとつ気になることがあるんだけど」

「何？」

ネネルへ顔を向け、問う。

「魔物つて、どこから出てきてるの？」

「……地下から」

「そうじゃなくて、その地下からどんな風に地上に来てるのかわつてことだよ」

そのことについては知らないらしく、ネネルは口を閉じた。

俺は溜め息をついて、窓外に目を向けた。今朝から変わらずに大きな鳥が空を旋回しているのが見えた。

「せめて、それくらいの知識は持っていたいな」

呟く俺。

ネネルは小さく頷くと、立ち上がった。

「付いてきなさい」

そこは王家専用の会議室だった。向かって一番奥に国王がいて、左右を宰相らが囲んでいた。

久しぶりに国王と顔を合わせ、何も心の準備をしていなかった俺は緊張してしまった。

「失礼します、陛下。マリアド様が現在の状況を確認したいというので、お連れしました」

と、ひざまづくネネル。

国王は俺を見ると、手招きをした。

「ご苦労であった。情報がまとまり次第、マリアド殿には話をするつもりでした。どうぞ、こちらへ」

「あ、はいっ」

ネネルを置いて国王の方へ向かう。

人々が脇へと避け、俺は国王のすぐそばで立ち止まった。

国王の前にある机には、大きな世界地図が置かれていた。そのあちこちに印が付けられていて、何かを示すものと分かる。

「さて、現在の状況だが……国内では、宮廷騎士団の第一部隊から第十七部隊まで、見習いも含めて全員がそれぞれの持ち場について守っております。先ほど入った報告によると、負傷者は十四名」

世界地図の大半を占めるのは、この国の土地だ。大陸続きの隣国はどれも大きく、海を隔てた向こうには島々が浮かんでいるだけ。

「順調に魔物を退治してはいるようですが、町や村への被害も何件か報告され始めています」

そう言うってから、国王は低く唸った。

何だか嫌な予感がする……いや、きつとこれから先に良いことなんて一つもなく、状況は悪化していくのだろう。

「騎士たちも人間です、早ければ今日の夕刻には負傷者が数多く出ることでしょう。国民の安全のため、どこか一カ所に全員を避難させる案を検討中です」

「避難させることで、魔物の脅威から守れると？」

「……分かりません」

それは可能かもしれないが、魔物の数が増え続けるのであれば、それは一時的にしか機能しないだろう。

「現実的に考えるのであれば、宮廷魔術士たちに各地域をまわってもらい、防御結界を張る方が良いのですが……騎士団と違い、魔術士は数が圧倒的に少ないものでして」

ネネルがはつと顔を上げたのが分かった。

国王は彼女に構わず、咳払いをして話題を変える。

「世界の状況についてですが」

難しい問題だと思った。一人でも多くの国民を守るには、その分だけの時間と、犠牲が必要だ。

「どこも魔物の対策に追われており、発展途上国ではすでに多くの死傷者が出ているようです。このままでは、黒妖精たちの思いつぽです」

でも、俺の魔力があれば……考えて、やめた。どうせまた、ネネルに止められるのがオチだろう。

気を取り直し、国王の話に集中しようとそちらを見る。

「そして、魔物の出現場所についてですが……それが、どうやらテリウス山脈が根源らしいのです。大陸のほぼ中心に位置し、二つに分けるような大きな山脈です」

「その山脈の、どこら辺なんですか？」

国王が微妙な顔をした。

「まだ分かっておりません。目撃情報によると、山脈の最も高いところから降りてきている、と、言いますが……」

なるほど。いずれにせよ、そのテリウス山脈が地下の世界と繋がっているのは確実そうだ。

「詳しいことが分かったら、また教えてください」

国王にそう声をかけて、俺は待機していたネネルを振り返った。

会議室を出ると、これまた久しぶりに姫に会った。

「あら、マリアドではございませんの。ごきげんよう」

と、にっこり笑うフィアンシーナ姫。相変わらず可愛い。

「おはようございます、姫様」

と、俺もつられて微笑むが、姫の隣にソールハロツシュがいるのに気づいてはつとする。

「ごきげんよう、マリアド嬢」

「お、おう……」

昨日のことが思い出され、俺は無意識に一步後ずさった。

ネネルはネネルで、やはり彼を嫌っている様子で言う。

「昨日はマリアドが世話になったわね。一応聞くけど、何もしてないでしょうね？ ソールハロツシュ」

「おやおや、失敬な。私はむしろ、マリアド嬢には特別優しくしているのに」

その『特別』が余計なわけだが。

ネネルとソールハロツシュが睨み合う中、姫が俺へ尋ねた。

「ところで、父上に何かご用事でしたの？」

「ああ、はい。ちょっと、現在の状況について教えてもらったところです」

姫はすると、ソールハロツシュの袖をくいと引いた。

ネネルから視線を逸らしたソールハロツシュに、姫が何事かを耳元で囁く。

すると、ソールハロツシュがにこつと微笑んだ。

「そうでしたか。では、話が早い。私たちはこれから、陛下へある提案をしに行くところだったのです」

「提案？」

怪しむネネルを無視し、ソールハロツシュは続けた。

「魔物の根源であるテリュス山脈を訪れ、出現場所の確定をし、そこを魔力により封じるというものです」

「上手く行くかどうかは分かりませんが、それが一番手っ取り早いですわ」

と、姫。

確かに、それが出来るならそうした方が良さだろう。しかし、それは一体誰が行って誰がやると言うのだろうか？

疑問ではあったが、まだ決まったわけではないので尋ねようとはしなかった。

「陛下との話し合いが終わり次第、報告させていただきますから、マリアド嬢は部屋でゆっくりしてらしてください」

と、ソールハロツシュは頭を下げた。

その隣で姫がまた言う。

「ご希望でしたら、このフィアンシーナが直接話し相手になりますわ」

さすがにそれは遠慮したかった。

「あ、ありがとうございます。おい、ネネル」

と、姫の視線を無視してネネルの名を呼んだ。

「それでは、私たちはこれで」

空気を読んだネネルが二人に恭しく頭を下げ、俺の腕を引いて歩き出す。

そうして姫たちと別れると、俺は尋ねた。

「あの二人、仲良いのか？」

すっかり機嫌を悪くしたネネルは言う。

「従兄弟なだけよ」

「ああ、なるほど」

そういえばそうだった。何となく雰囲気似ているし、髪の色や変人なところなんかも共通している。

しかしふいに、俺は心配になった。この国の将来が彼女たちにかかっているわけだが、それって大丈夫なのか？ 王家の血筋だからとか、そんな理由で二人が一般人と違うようには思えないぞ。言ってしまうと、どちらもただの変人だ。

「あー、まあいいや」

と、俺は独り言を呟いた。

2 民を守るために

しかし、どんなに待ってもソールハロツシユは俺の部屋に現われなかった。

あの提案が却下されたのかと思って、夜になる頃には諦めていた。

翌朝、俺は窓外から送られる視線で目が覚めた。

「うわっ」

覗いているのは大きな鳥だ。昨日からずっと城の周りを飛んでいる魔物。

「……」

じつと見つめられ、俺は一度合わせた目がそらせなくなる。窓ガラスが割られることはないだろうけど、すっかり俺は恐怖していた。なるべく音を立てないよう、慎重に毛布をつかむ。そっと、そっと毛布に隠れるようにして視線を逸らした。

そして沈黙。

鳥が空へ羽ばたいていくまで、俺はずっと毛布の中でうずくまっていた。

魔物にはいろいろな種類がいるらしく、大きさも様々だ。しかし、あれほど大きな魔物と戦うには勇気が要る。少なくとも、俺一人では出来そうにない。

情けないことだが、そう思わずにはいられなかった。

「おはようございます、マリアド様」

と、部屋へ入ってきたフュエリは、落ち込んでいる俺を見て首を傾げた。

「どうなされました？ もしや身体の調子が悪いとか」

「いや……ちょっとびびっただけだ」

気分転換に深呼吸をして、顔を上げた。

ベッドからそっと降りてフュエリの顔を見る。

「おはよう、フュエリ」

「あ、はい」

と、俺を心配そうな目で見る俺のメイド。

さすがに、さっきまでの俺は俺らしくなかったようだ。でも、広い部屋に一人きりで、あんなでかい鳥に見つめられるのは恐怖だ。食われるかと思った。

無意識に溜め息をついてしまうと、クローゼットを開けていたフユエリが振り返った。

「どうやら、お疲れのようですね」

「ん、うん……」

彼から視線を逸らしつつ、椅子へ腰かける。

「魔物たちに動揺させられているのは皆同じです。あまり気になさらない方が良くと思いますよ」

「うん……分かってる」

俺一人が怖い思いをしているわけではなく、魔物に襲われて怪我をしている人だってたくさんいるのだ。

「それにマリアド様には救世主としての力が備わっております。もつと堂々としてくだらないと」

そういつて彼は微笑んだ。

そう、フユエリの言う通りだ。俺はこの世界で一番強いし、世界を救える力がある。そんな俺が魔物に怯えてどうするんだ。

……よし、頑張ろう。

朝食が済む頃にはだいぶ気持ちも落ち着いて、いつもの調子が戻ってきた。

そしてまた、いつものようにやって来たネネルへ言う。

「おはよう、ネネル」

しかし、小さな魔術士は挨拶を返さなかった。

「行くわよ」

「は？」

俺を無視して腕を引っ張るネネル。彼女がいつもと違うロープを着ていることから、何かあったことが分かる。

相変わらず抵抗を許さないネネルに引かれ、俺は部屋を出た。そして、初めて聖堂へ行った時のように、足早に廊下に行く。

「どうしたんだよ、何かあったのか？」

「未明に騎士たちが大勢運び込まれたの。昨日と比べて魔物たちが勢力を増してきている」

「はあ!？」

やばい事態になろうとしていた、否、なりかけている。

「国王は今朝、宮廷魔術士たちに国内を回らせることを決断したわ」「やっぱり」

のんびり食後の紅茶なんて楽しんでいる場合じゃなかった。無性に苛立ちを覚えながら、俺は少し足を速めた。

深刻な顔をして、国王は俺の到着を待っていた。

「マリアド様を連れて参りました」

と、ひざまづくネネル。

「ご苦労であつた」

国王は玉座を降りると、俺へ歩み寄ってきた。

「事情は聞きましたかな？」

「はい、おおまかにではありますが」

「そうですか」

国王が右を向き、俺もそちらに目を向ける。

そこに並んでいたのは、紋章の入った紺色のロープをまとった人々だった。玉座に最も近いところにソールハロツシュがいて、数人後ろにネネルが並ぶ。

「彼ら宮廷魔術士を、こちらの定めた地域へ派遣します。もちろん、この国は広いのでそう簡単に終わりはしません」

その彼ら一人一人の顔を、国王は愛おしそうに見つめる。

「他国にも、魔法を使って民を守るようにと伝達しました。しかし、

それも上手く行くかどうか。そこでマリアド殿に頼みがあるのです」
真剣なまなざしを俺へ向け、王は言った。

「テリユス山脈へ行つて、魔物の根源を封じてきてくださいませんか？」

「……え？」

目を丸くして、無意識に苦笑いをしてしまう。

「俺が、ですか？」

「ええ、神の使者であるあなたこそ適任です」

ソールハロツシュの提案は見事に受け入れられた様子だが、まさか俺がそれをやるはめになるなんて！

「もちろん、お一人で行かせるわけにはいきません。魔術に最も詳しいソールハロツシュをお供させます」

うわ。

「世話役としてメイドにはフュエリを。そしてマリアド殿に何かあつては困りますから、好きな騎士を一人、お選びください」

「いや、あの、ちょっと待って。ネネルは？」

国王が答える前に、ネネルが口を開く。

「今回は残念ながら、それぞれに任された地域があるのです。私は民を守るために北へ行かなければなりません」

「う、嘘だろ？」

ソールハロツシュと一緒になんて嫌だ！

しかし、国王はそんな俺の気持ちも知らずに説明をしてくれた。

「慣れ親しんだ者と離れるのは辛いでしょう。ですが、これも効率を考えてのことなのです。テリユス山脈のある山岳地域にソールハロツシュが防御結界を張りながら、マリアド殿の供をし、魔物の根源を封じる、という計画になっております」

にこつとソールハロツシュが俺へ微笑んだ。

やばい、絶対に俺、あのでかい鳥よりも先にあいつに食われる！ 危険だ、いくら何でもこの計画は俺にとって危険すぎる！！
パニック状態の脳内を冷静な俺が制止して、俺は国王へ聞き返す。

「世話役にメイドのフユエリを？」

「ええ」

「騎士は、好きな奴を選んで良いって？」

「もちろんです。とはいえ、この城にいる騎士はどれも怪我を負っている者ばかりですので、選ぶほどのこともないでしょうが」

「どうしよう。だって、俺の知ってる女騎士はヴェルシしかないぞ。いや、ゼーシュもそうだが見た目が……男四人で、行くのか？」

「ソールハロツシュからしたら、俺紅一点だぞ？ 襲われるぞ？」

「……わ、分かりました。それで、出発はいつですか？」

「何かしら対策を練って無事に城へ戻ってこよう。一番いいのは、ネネルがいてくれることなのだが、しょうがない。」

「明日の明朝です。交通手段はこちらで手配いたします」

「そうですか」

「ああ、先が思いやられる。」

「装備品や荷物に関しては、ご希望に添ったものを用意させますので何なりと仰ってください」

「ええ、分かりました」

「それでは、よろしく頼みますぞ」

「と、国王が俺に頭を下げた。」

すっかり嫌な気分だったけれど、俺は顔に出さないようにして返事をした。

「はい……！」

「ああ、どうしよう。マジで俺、どうしよう。」

部屋へ戻る前に、ネネルの案内で医務室へ向かった。

運び込まれた騎士たちが治療を受けていたり、休養を取っているのだという。その中から良さそうな人を一人選ぶわけだが……。

「……なあ、ネネル」

「何よ」

医務室は血の臭いでいっぱいだった。身体中に包帯を巻いた者や、

ベッドで呻き声を上げている者など、どう見ても尋常ではない。

「ヴェルシは？」

ネネルは周囲を見回すと、俺の袖を引っ張った。

それから並んだ椅子のひとつにヴェルシの姿を見つけ、その前で立ち止まる。

「あの第一隊長が怪我するなんて、予想外もいいところね」

俯いていたヴェルシがはっと顔を上げた。

「ネネル、マリアド……自分でも情けなく思うよ。ちょっと子どもを庇った隙にやられるなんて、な」

と、力なく笑う。

ヴェルシの左脚には包帯がぐるぐると巻かれていた。噛みつかれたのだろうか、ところどころに血がにじんで見える。しかも怪我はそれだけではないらしく、右ふくらはぎにも包帯が巻かれていた。

「あんたらしいわね。けど、それだと戦線復帰は難しそうね……」

「ああ、両足をやられたからな。まともに歩けるまで、仕事はお預けだ」

お供にしようと思っていたのに、あっさりとそれは破られた。歩けないヴェルシを連れて行くななんて、無理だ。

他の騎士たちも皆、彼女のように意気消沈している様子だった。

「あたしたちね、旅へ出ることになったの」

「旅？」

「ええ、魔物の被害から守るために、各市町村に防御結界を張って回るの。マリアドはテリュス山脈へ行つて、魔物の根源を突き止め、封じてくるわ」

と、ネネルが俺を見た。先ほどから何も言えずにいる俺を気遣ってくれたらしい。

「そ、そうなんだ。俺の力じゃないと出来ないからって、国王に言われてさ」

ヴェルシはにこっと微笑んだ。

「そうか。山脈近くには手強い魔物が多いと聞く。気をつけていけ、

マリアド」

「……ああ」

俺もにこつと笑みを返す。

すると、ネネルがきよろきよろと周囲を見回した。

「それで、マリアドがお供に連れて行ける騎士を探しているところ
なんだけど」

ヴェルシも周囲を見回して、ふと俺の顔を見た。

「ゼーシュには会ったか？」

「いや、まだ会ってないけど」

「それなら、ぜひあいつを連れて行ってくれ」

ネネルが俺の脇腹を肘で突いた。どうやら、彼女はまだ俺とゼー
シュの間を誤解しているらしい。

無視して俺は聞き返す。

「いいけど、何で？」

ヴェルシは言いにくそうに苦笑いをした。

「何故だか分らんが、魔物に懷かれてしまったようなんだ」

3 ニゲル

「そのせいで、どこにも居場所がなくな……人々は魔物を見るとそれだけで怯えてしまう」

と、憂鬱な溜め息をつくヴェルシ。

確かに、魔物イコール怖いという図式が、俺含む大勢の人々の中に、無意識に出来上がってしまっている。しかし、ゼーシュに懐いている魔物が悪い奴でないのなら、それを理由もなく怖がるのは可哀相だ。

「そうか、分かった。ぜひそうさせてもらおうよ」

と、俺は言うのと、ネネルを置いて歩き出した。きっとゼーシュは、人気のない場所にいるはずだ。

予想は当たっていた。

城の裏にあたる庭の隅で、ゼーシュは座り込んでいた。その隣には小さな魔物らしき動物の姿。

「見つけたぞ、ゼーシュ」

声をかけると、はっとしたようにゼーシュが顔を上げた。

「マリアドさん……」

彼女の前にしゃがみこみ、俺はこちらを睨んでいる魔物を観察する。

「そいつが、お前に懐いた魔物か」

「あ、はい……そうです」

と、そいつの頭を優しく撫でるゼーシュ。

子犬より少し大きいくらいのそいつは、言葉で例えるなら馬だった。黒々とした毛に覆われた身体は引き締まり、四本の脚はたくましい。耳はうさぎのように長くぴんとして、頭に生えた毛だけが灰色だ。

「もしかして、子どもか？」

ぱちくりと瞬きをする目は青く丸く、じっと見ていると愛らしく思えてきた。

「いえ……これでも、成獣です」

と、ゼーシュは答えた。それにしても小さな魔物だ。

そつと俺が腕を伸ばすと、そいつががばつと大きく口を開けた。

「おっと」

危うく噛みつかれそうになって腕を引っ込める。

ゼーシュは笑うと、そいつへ語りかけた。

「駄目でしょ、ニゲル。この人は悪い人じゃないよ」

早くも魔物に名前を付けたようだ。ということは、ゼーシュも懷かれて困っているわけではないのか。

ニゲルは伺うようにゼーシュを見ていたが、やがて小さく鳴いた。
「きゅうう」

一歩前へ出て、俺の方へ頭を突き出す。

「分かってくれたみたいです」

と、ゼーシュ。

おそろおそろ手を伸ばし、その頭を軽く撫でた。ふさふさだ。

「よろしくな、ニゲル」

「きゅうう」

なかなか賢いやつだ。思ったよりも魔物って、すごい生き物なのかもしれない。

ニゲルがゼーシュの元へ戻り、その膝にすりよった。彼女もその頭や背中を撫で、互いに嬉しそうにしている。

俺はその場に腰を下ろしてあぐらをかくと、本題を切り出した。

「ところでゼーシュ、お前はまた戦えるのか？」

顔を上げたゼーシュが頷く。

「はい。僕も怪我はしましたが、軽傷でしたから」

その手はニゲルをしっかりと抱きしめていた。

「そうか。じゃあ、俺と一緒に来ないか？ テリユス山脈へ行つて魔物の出現場所を見つけ、封じるんだ」

「……僕、ですか？」

「ああ、ヴェルシに話したら、お前を連れて行ってほしいって言われてさ」

にこつと俺が笑うと、彼女はニゲルを見つめた。

考える様子でじつと口を閉じ、しばらくしてから顔を上げる。

「そうですね、僕もニゲルのおかげで仕事に戻れないですし……マリアドさんの、頼みなら」

と、笑ってくれた。

よし、これで決まりだ。

「出発は明日の明朝、お前は俺の護衛騎士つてところだな」

口に出してからはつとした。

「ああ、ニゲルも……番犬的な？」

「番犬よりも頼もしいと思いますよ」

と、ゼーシュが笑う。

だから俺も、つられて笑った。

昼食後、フュエリがてきばきと荷物をまとめているのを見て、俺は立ち上がった。

「ちよつと行ってくるから、あとは頼んだ」

「かしこまりました……って、どちらへ!？」

「すぐ帰ってくるよ」

と、俺は無視して部屋を出る。

今日中に会っておきたい人がいた。ジャスナだ。

彼女には世話になっているし、これからしばらく会えないのだから、会いに行くのは当然のことだろう。

階段を下りていくと、後ろから誰かが俺を呼んだ。

「マリアド嬢!」

ソールハロッシュだ。

聞こえなかったふりをして聖堂の方へ足を向けると、彼がぱつと俺の前に立ちふさがった。

「マリアド嬢、無視するなんてひどいですよ」

「え、いや……悪い」

見抜かれていたようだ。俺が素直に謝ると、ソールハロッシュは笑った。

「そんなことより、あなたに話があるのです。お時間、よろしいでしょうか？」

二人きりで話するのはごめんだった。

「悪い、急いでるんだ」

と、俺があからさまに彼を避けて歩き出すと、魔術士が言った。

「超高度魔法のことです」

ぴたつと足が止まった。意識していないのに、俺は彼へ顔を向けてしまう。

満足そうににやりと笑って、ソールハロッシュは俺を外へ連れ出した。

「この前お話しした光属性の痕跡ですが、テリユス山脈にそれはあるのです」

「へえ……」

魔物の出現で騒々しくしている城外を、彼と並んで散歩する。

「遺跡があるんですよ、あそこには。そこへ行ければ、きっと光属性について何か得られる物があるはずですよ」

「なるほど……つまり、本当の狙いはそれだと？」

と、俺が睨むと、ソールハロッシュはにっこり頷いた。

「その通りです。さすがはマリアド嬢、よく分かっていらつしやる」

言葉がいちいちムカつく。これから長いというのに、そんな風に喋られては我慢も限界だ。

「悪いんだけど、ソール？ もっと普通に喋ってくれねえかな」

「え、普通ですか？」

と、首を傾げるソールハロッシュ。

「名前も呼び捨てでいいからさ、とにかく普通にして」

「そうですね……ようやくオレに、心を開いてくれたわけですね」

と、嬉しそうに微笑む彼に、突っ込まずにはいらなかった。

「違えよ！」

するとソールハロッシュはちょっと驚いた顔をして、すぐに話へ戻った。

「まあ、いいでしょう。それで……話の続きだけど、光の痕跡を確かめられれば、あとはマリアド、あなたがそれを使えるかどうか、試すだけだ」

「やっぱ俺なのか」

「もちろん。あなたは神の使者。オレの考えが正しければ、この世で光属性を使えるのはあなただけなんだ」

少しは話しやすくなったけれど、どうもムカつく。

「分かるだろう？ マリアド。この提案を国王にしたのも、全てこのためだ。全ては超高度魔法を復活させるため！」

と、力む変態魔術士。

結局、俺は彼の策略にまんまとはまったわけだ。国王もだけど。

「で？ 話はそれだけか？」

と、俺は溜め息をついて見せた。

ソールハロッシュははっとして、俺の前へ立つ。

「このことについては内密にしておきたいのだけれど、どの騎士を連れて行くつもりだい？」

「ゼーシュだ」

「……それは、どこの誰かな？」

と、ソールハロッシュ。

俺はぶっきらぼうに言った。

「ヴェルシに付いてる見習い騎士だ」

「ああ、彼女の……その子は、秘密を守れるのかい？」

答えに詰まった。それは分からない。分からないが、俺は言う。

「信頼は出来るやつだ。少なくとも、裏切りはしないさ」

安心した様子でソールハロッシュが息をつく。

「それなら良いんだ。本当は、オレとマリアドだけの秘密にしてお

きたいところなんだけどね」

「つつーか、メイドのフュエリにはどう言うつもりだよ?」

「ああ、それならすでに了解を得ているから心配しないで」

にこにこ笑う美青年……可哀相なフュエリ、お前はきつとこの顔に騙されたんだな。

息をついて、さつさと歩き出す。

「じゃあ、また明日な」

「え、待ってマリアド、まだ話したいことが　　っ!」

彼を無視して俺は聖堂へ向かった。

本来の目的はそっちなのだ。それに、早くしないと日が暮れてしまっ……まったく、これだからソールハロツシュの相手はしたくない。

4 旅立ち

ジャスナは聖堂の前で子どもたちに取り囲まれていた。
近くへ寄りながら声をかける。

「ジャスナ！」

顔を上げた彼女は、すぐににこっと笑みを浮かべ立ち上がった。

「マリアド様！ お久しぶりです」

「うん、久しぶり」

と、彼女の前で立ち止まれば、子どもたちの視線が俺を見る。
どうしようか迷っていると、ジャスナが彼らへ言った。

「今日はこれでおしまいです。みなさん、気をつけてお家に帰って下さいね」

「はい」

と、散り散りになっていく子どもたち。

その様子を何気なく見ていたら、ジャスナが呟いた。

「いつもなら、倍以上の子たちが集まるんですよ」

魔物の影響はこんなところにも現われていたようだ。

ようやく場が静まったところで、俺は口を開いた。

「ちよつと話があるんだ。時間とか、平気かな？」

「ええ、大丈夫です」

その返答に満足し、俺は近くの尻の高さにあつた塀に腰を下ろした。

「もしかしたら、もう誰かから聞いたかもしれないけど……俺、明日から旅に出るんだ」

ジャスナは隣で俺の話を聞いていた。

「テリユス山脈に行つて、魔物の根源を封じてくるんだって」

「そうでしたか……どうかお気をつけて、マリアド様」

と、彼女が心配そうに俺を見る。

俺は笑った。

「大丈夫だよ、ジャスナ。宮廷魔術士のソールハロッシュに騎士見習いのゼーシュも一緒だから」

ジャスナはにこつと口だけで笑った。

何か、嫌な予感でも感じているのだろうか……ふとそんなことを考えたけど、それが本当だったら嫌なのでやめる。

「それと、超高度魔法のことだけど……どうやら、テリユス山脈にそのヒントがあるらしいんだ」

「そうなんですか」

「ああ。だから、そのためにも俺は行ってくるよ」
ぎゅつと手にした本を両腕で抱えるジャスナ。

「でも正直、俺、城下町の外に出たことって無いから、ちょっと不安なんだよな」

自嘲するように苦笑いをする俺。

彼女がふと俺の隣へ腰を下ろし、本を脇に置いた。

「私もマリアド様の立場なら、同じことを思うと思います」

「……うん」

彼女は本当に優しい人だ。巫女だからとか、そんなことだけではなく、心からそうなんだと思える。

「私には何も出来ませんが、毎日、マリアド様のご無事を祈っていますね」

「うん、それだけでも充分にありがたいよ」

そんな彼女に何か返したくて、俺はまた笑顔を作った。

「いえ、そんな……私には、それしか出来ませんから」

と、ジャスナは俯いた。両足を少しぶらつかせて、正面で揃える。

「あ、あの……」

「何？」

ちらちらつと俺の顔を見て、ジャスナは立ち上がった。

それから一歩近づき、真っ直ぐに俺を見る。

「子ども騙しですけど、マリアド様が無事に戻られますように……」
と、俺の右手をとり、甲にそつと口づけた。それから何か呪文の

ような言葉を囁く。

「ルクス、ロレムクアナム、シグニフィシャント、アリウス」

「……」

彼女が手を放す。

それが何のおまじないかは分からなかった。

俺は半ば呆然としながら、ジャスナへ感謝を述べた。

「ありがとう、ジャスナ」

それにしても、子ども騙しと彼女は言ったが、ジャスナがやると効果がありそうに思えるから不思議だ。

「いえ、大したことじゃないので気にしないで下さい」

そうして彼女は本を手にとると、俺へ頭を下げた。

「それでは、そろそろ仕事に戻りますね。どうかご無事で」

「ああ、本当にありがとな」

嬉しそうに彼女が聖堂の扉を開けて、中へと消えていく。

それを俺は、しばらく見送っていた。

「はい、これ」

と、ネネルに差し出されたのは、おなじみの白いロープ。

「……着ろつて？」

「もちろんよ。必要最低限の魔法しか使っちゃ駄目って言っても、道中何が起こるか分からないでしょ」

仕方なく受け取って羽織る俺。相変わらず、ずしっと来る重さだ。

「それと……ちょっと気になるんだけど」

と、ネネルが俺の様子をうかがうようにする。

「何？」

聞き返す俺だが、あまりにも眠くて欠伸が出た。

「あんだ、その格好で良いの？」

「……え？」

睡魔と戦いながらベッドを出て、朝から元気なフュエリに無理矢理着替えさせられたのだが……ふと、鏡に映った自分を見て彼女の

意図を察した。

「……うわ」

裾にレースのあしらわれた薄桃色のワンピース姿だった。丈は長めで、胸元がやけに空いている。

どうしたものかと思って、とりあえずフュエリを探した。

「おい、フュエリ」

「荷物運びに出てったわよ」

おかしいな。ここは睡魔をどうにかして吹き飛ばし、頭を覚まさなければ。

首を振って姿勢を正し、両腕を上へ上げて伸びをした。

「どおりで脚がすーすーすると思った」

クローゼットへ向かい、中から普段履いているズボンを探す。すっかり俺が女扱いされているのに納得は行かなかったが、出発までもう時間がないのだ。

見つけた白いズボンにすぐさま脚を通した。

「うん、これで……良くないか」

ワンピースのスカートが邪魔だ。

別にこのままでも悪くはないのだが、やはり動きやすくしたい。俺が一人で考え込んでいると、ネネルが近づいてきて俺のスカートをめくった。

「切っちゃえばいいじゃない。どうせ、また姫の趣味でしょう」

「ああ、その手があったか」

と、周囲を見回すが、はさみもナイフも見当たらなかった。そういえば昨日の夜、フュエリがあらゆる道具を鞆に詰め込んでいたな。めんどくさいから、正面の部分を手にとって両手で引き裂いてみた。

「おはようございます、マリアド嬢」

と、変わらず笑顔で俺を迎えるソールハロッシュ。しかし、すぐにその視線は下へ下がった。

「……これは一体？」

「気にするな」

と、即答する。

「どうやら、マリアド様のお気に召さなかったようで」

後ろでフュエリが申し訳なさそうにしていた。自分的には気に入っているのだが、彼らからしたらひどい出来らしい。

スカート部分を引き裂いて前を開け、長くてうざったい丈をベルトで締めることで膝上まで上げたただけだ。中にはズボンを履いているだけで、あとは白いローブ。

「こっちのが動きやすいんだから良いだろ」

と、俺は二人に言い残して馬車へ向かった。

「おはよう、ゼーシュ」

馬車のすぐそばでは軽装備をしたゼーシュが待っていた。

「おはようございます」

彼女の腰には少し大きめの剣が携えられている。

「きゅっ」

と、鳴くのは彼女の足元をうろろろしていたニゲルだ。

「ニゲルも、おはよう」

しゃがみこんで頭を撫でてやると、ニゲルはまた嬉しそうに鳴いた。

これで準備は整ったはずなのだが……立ち上がって後ろを振り返ると、ソールハロツシュとフュエリが微妙な顔をしていた。

「何してんだよ、お前ら」

声をかけると、はっとした様子でフュエリがこちらへ歩き出す。

「申し訳ありません、まさか……その……」

と、ゼーシュの足元をちらちらと見やる。どうやら、ニゲルが怖いらしい。

仕方のないことだけれど、慣れてもらうしかない。

「大丈夫だよ、悪い魔物じゃないから」

と、俺はニゲルを抱き上げてフュエリに差し出した。

「……きゅ？」

「ひゃあっ」

ちよつと鳴いただけなのにびっくりするフュエリ。

呆れて、俺はようやくこちらへ来たソールハロツシュにも同じことをしてみた。

「ほら、可愛いだろ？」

「……う、うん、そうだね」

と、苦い顔で微笑むソールハロツシュ。

まったく、二人ともしようがないやつだ。

ニゲルをゼーシュに返して馬車へ乗り込む。

「気をつけなさいよ、マリアド！」

と、一足先に駆け出した馬車の窓から、ネネルがそう声をかけるのが見えた。

「お前もな！」

と、俺は手を振り返し、ようやく馬車の中へ入った。

ゼーシュとニゲルが後に続いて乗り込み、俺の隣へ座る。その様子を見ていたソールハロツシュが俺の正面、フュエリはその隣だ。

そして、フュエリが御者に声をかけると、馬が走り始めた。

5 防御結界

「きゅう、きゅうつ」

どう見ても気まずい空気の中、ニゲルだけが上機嫌に鳴いている。フュエリはずっと隅に寄って縮こまっているし、ソールハロッシユもニゲルと目を合わせようとしない。

退屈に耐えかねて俺がニゲルの頭や背を撫で始めると、状況がちょつと変わった。

「なあ、その魔物のことなんだけど……」

と、ソールハロッシユが口を開いたのだ。

ゼーシュが顔を上げ、俺は彼へ聞き返した。

「ニゲルがどうしたって？」

「うん……その、どうして騎士見習いが魔物といえるんだい？」

ゼーシュはニゲルを守るように抱きかかえ、答えた。

「何故か懷かれてしまったのです。人に危害は加えませんし、野性に返したら殺されてしまうでしょう？」

「……ああ、なるほど？ でも、それはやはり魔物だし」

と、ニゲルを見るソールハロッシユ。未だに抵抗があるようだ。

その内に慣れてくれるだろうとは思うが、ニゲルとゼーシュのことを思うと溜め息をつきたくなった。

「ちょつと貸して」

と、俺はゼーシュからニゲルを取り上げ、膝の上へ載せた。

「きゅうー？」

小首を傾げて俺を見上げるニゲル。魔物は魔物でも、ペットとして飼うのに何ら問題のない可愛い奴だ。

俺にはすっかり懷いた様子だから、あの二人に懷くのも時間の問題だろう。

「で、最初はどこへ向かうんだ？」

と、俺はソールハロツシュを見た。

「ああ、とりあえず西へ……確実にオリア地方には入りたいところだ」

フュエリがごそごと鞆から地図を取り出し、広げて見せた。

「オリア地方というと、この辺りですね」

城から少し西へ行つた先に荒野があり、そこを抜けた先に街がある。

膝の上で丸くなったニゲルを撫でながら、俺は言った。

「そこに着いたら、どうするんだ？」

ソールハロツシュが微妙な表情を浮かべる。

「昨日話すつもりだったんだけど……オレの担当は、オリア地方からテリユス山脈のあるホルデウム地方までの、合計百二十七の村や町なんだ」

「うわ、そんなに？」

思わず嫌な顔をしてしまうと、魔術士に笑われた。

「ははっ、これでも少ない方だよ。とはいえ、その全てを回るのは無理だから、いくつかの範囲に分けて防御結界を張っていく予定だ」ムツとしたので、ニゲルを抱き上げて彼を睨む。

すると、怯えた様子をわずかに見せたくらいで、ソールハロツシュは俺に問うた。

「マリアド、防御結界がどんなものかは知っているかい？」

「魔方陣を端と端に置いて、その中にある全ての物を外敵から守る」

「そうだ。つまり、オレの仕事はその魔方陣を、あらかじめ決めておいた場所に描いていくことだ」

そう聞くと簡単そうに思えるが、実際はどうだろう？

ふいに、ソールハロツシュはフュエリの地図を指さした。

「まずは起点となる魔方陣を、オリアのメタルムという街に描き、その後は少し南下してクブルムへ向かう」

地図で見ると近いように思えたが、その間には森があつて一本道というわけにも行かなさそうだった。

「その後は、出来たらそのまま南下して隣の村へ行きたいが、無理なら明日だな」

「ふうん……分かった、ありがとう」

と、俺は話をやめさせた。予定は飽くまでも予定なのだから、今からどうこう言ったって無駄だ。それに、俺は彼らに付いて行くだけで平気そうだ。

俺がニゲルおよびゼーシュと遊んでいる間に、馬車は荒野へと突入していた。

がたがたと馬車が揺れ、時折魔物らしき姿が窓外に映る。

そのたびにソールハロッシュは警戒し、ゼーシュはいつでも剣を抜けるよう構えていた。

一方のフユエリは退屈そうにしていたかと思うと、いつの間にか両目を閉じて眠ってしまっている。誰もそれをとがめないから良かったが、それではメイド失格だ。

……まあ、昨日からよく働いてたもんな。ちょっとくらい許してやろう。

最初の目的地に着く頃には、とつくに昼になっていた。

「腹減った」

「その前に仕事をしなければ。すぐに終わらせるから待っててくれ」
馬車から降りたソールハロッシュは、周囲の様子を確認した。

そして鞆から白い石を取り出して、今度は地面に目を落とす。その様子を見て、ゼーシュが馬車を降りて護衛に回る。

「おや、そんなことしてくれなくても良いのに……」

「念のためです」

「そうか、悪いね」

何となくではあるが、彼らが互いに心を開いていないのだと思った。

しゃがみこんだソールハロッシュが石を使って線を描き始めると、

その背を守るようにゼーシュが立つ。

ぐるっと描かれた円は大きく、その中にも書き込んでいくソールハロツシュ。

窓から顔と手を出して眺める。これはなかなか時間が掛かりそう
だ。

数分前に目覚めたフユエリは何やら財布を取り出して、御者とこ
れからのことを話していた。

「……よし」

と、立ち上がるソールハロツシュ。

魔方阵の中心へ移動して、今度は別の石を取り出した。杖によく
付いている球状の水晶だ。

それを手に、彼が何事か呟いた。よく聞こえなかったが、防御結
界の呪文だ。

すると、魔方阵が一瞬だけ緑色に発光した。ぶわっと吹きすさぶ
風に目を見張ると、魔方阵が正常に機能を始めたらしいと分かる。

「さあ、これで終わりだ。早く街へ行つて昼食にしよう」

と、俺へにつこり笑いかけてくる。

「……あ、ああ」

やはりこの旅は危険だ。彼とだけは二人きりにならないよう、気
をつけよう。

溜め息で誤魔化しつつ、俺は席に座り直した。

「ホルデウム地方と言いましたが、それは、その、ホルデウム全て
ということですよ？」

と、ゼーシュが唐突にソールハロツシュへ尋ねた。

「ああ、そうだが……何か？」

「いえ、別に何でもないんです。ありがとうございます」

早口にそう言って、ゼーシュはソーダ水のグラスに口を付けた。

街の中に魔物を連れて歩くのは良くないと判断した彼女は、ニゲ
ルを馬車に置いてきていた。

「あの、私からもお尋ねしてよろしいでしょうか？」

と、フュエリ。

「ああ、どうぞ」

ソールハロツシュは質問されるのが嫌なのか、うんざり顔だ。

「ホルデウム地方は国内で最も広い地方ですが、どのように回られる予定でしょうか？」

ちらつと俺の顔を見て、宮廷魔術士は答えを返す。

「まずフルクトウスへ行き、そこからヘルバ、フニス、その後にはテリウス山脈へ行く予定だが、それはヌーベス村から入ろうと思っているよ」

ゼーシュがちらりと彼の口元を見た。しかし何か言うことはせず、黙々と食事を続ける。

フュエリは聞いた答えを紙にメモすると、頭を下げた。

「ありがとうございます、公爵」

「普通に名前で呼んでくれ、どうせ長い旅になる」

と、どこか機嫌悪く言うソールハロツシュ。どうやらお疲れの様子だ。

フュエリはぱつと顔を明るくさせると、言い直した。

「かしこまりました。ありがとうございます、ソールハロツシュ様」

お近づきになったことがよほど嬉しいのか、それからのフュエリは元気だった……クプルの宿へ着くまでは。

6 二日目

俺たち四人の關係に難があるのは分かっていたつもりだが、甘かった。

「マリアド様、どちらのベッドでお休みにられますか？」

「俺は端が良いな」

並んだベッドの内、俺は壁際のベッドを指さしたはずだった。

「僕は護衛騎士ですので、マリアドさんの隣が良いかと」

「宮廷魔術士のオレはマリアドの隣にいた方が良いだろう」

ほぼ同時に口走るゼーシュとソールハロツシュ。

「俺、端が良いんだけど」

今度は二人の顔を見て言うが、ゼーシュとソールハロツシュはそれとなく睨み合って俺を見ていなかった。

「えっと、どうしましょう……か？」

空気の不味さにフュエリが気を落とし始める。ただでさえ、憧れの公爵は俺に下心があるだけに、落ち込むのかもしれない。

「だから俺、このベッドで」

「じゃあ、こうしよう。君があつちで、オレはこつちだ」

と、勝手に決めるソールハロツシュ。

「分かりました、それで良いでしょう」

と、何故か納得するゼーシュ。

「……」

呆然とする俺に構わず、二人はそれぞれの決められたベッドへ荷物を下ろし始めてしまう。

フュエリを見やると、彼は苦笑していた。

「明日からは、一人部屋をご用意させていただきますね」

「うん、頼んだ」

仕方なく、俺は二人の間にあるベッドへ歩み寄った。

フュエリがソールハロツシュの隣のベッドへ行き、てきぱきと荷

ほどきを始める。

「ニゲル、部屋から出ちゃ駄目だからね」

と、鞆に隠していたニゲルを枕元へ置くゼーシュ。ニゲルは「きゅっ」と、鳴いて、彼女に答えていた。

その様子を横目に見るのはソールハロツシュ。どうも、二人は相性が合わないらしい。いや、ソールハロツシュと相性の良い人がどういう人物か、知りたいくらいだけれど。

空気を変えたくて、俺はフュエリへ声をかけた。

「なあ、風呂つてどうなつて」

「ありませんよ」

すぱつと即答されてしまった。

「宿の主人によりますと、裏に小川が流れているので、そちらの方で身体を洗ってくれということですよ」

「……そうか」

残念だ。でも、よく考えるとそうだよな。ここは小さな街の宿で、城とはわけが違う。今までの俺の生活が普通じゃなかったのだ。

一つ息をついて、とりあえずローブを脱いだ。心なしか、肩がだるい。

「明日はもう少し発展した街へ泊まるから、大丈夫だと思うよ」

と、ソールハロツシュが口を開いたが、俺はあまり嬉しく思えなかった。

さすがにその夜は何もなかったけれど、立場的に二人に挟まれた俺がゆっくり休めるはずもなく。

「今朝、街の南外れで魔物が出たそうです。自警団が退治に当たりましたが、負傷者が多数出たとか」

と、宿を出たところでフュエリが言った。

「それなら、警戒していかなきゃならないね」

「その他の情報は？」

「今のところ、それだけになります」

三人の会話を右から左へ聞き流しながら、欠伸をする。

今日も白いローブを羽織った俺は、彼らに付いて行くだけで良い。そして、馬車へ乗って街の南へ。

今日は俺の隣にソールハロッシュが座っていた。ゼーシュはしぶしぶ俺の正面へ着いている。

「マリアド、眠たいならオレの肩にもたれてもいいよ」と、優しく微笑む。

俺は欠伸しながら断った。

「いや、いい」

魔物が出て大変なときに、俺だけ眠ってられるかつーの。ましてや、変態魔術士の肩にもたれるなんて危険過ぎる。

ゼーシュはニゲルに遅めの朝食を与えており、フュエリは相変わらず隅によって距離を取っていた。

窓外の景色から人氣が減り出すと、壊れた民家がふいに目に付く。「そうとう強力な魔物が出たらしいな」

と、呟くソールハロッシュ。

まだ近くに魔物がいるかもしれない……姿勢を正して周囲の様子をうかがう。

草すら生えないむき出しの地面をしばらく進む。どこかで何かの鳴き声が聞こえ、一同がはっとした。

それぞれの武器を手取るゼーシュとソールハロッシュ、フュエリは救急箱を膝に乗せて待機だ。

俺は自分の両手を見下ろした。これが俺の武器だけど、むやみに魔法を使っではいけないとネネルに何度も注意された。

がたつと馬車が急停止、御者が慌てて馬を宥めるとほぼ同時にソールハロッシュが外へ飛び出した。

「ウィリデイス！」

と、前方を塞ぐ虎のような魔物へ風の魔法を放つ。いくつもの細かい風刃に押され、後ずさる魔物。

ゼーシュが後に続いて飛び出し、勢いよく剣を振りかざす。

「きゅきゅうつ」

何を思ったか、ニゲルまで馬車から出てしまい、とっさに俺は腕を伸ばしたが空振った。主の元へ駆けていくニゲルを追って、仕方なく外へ出る。

「待て、ニゲル！」

「マリアド様！？」

と、背後からフエリが叫ぶが、それよりもニゲルを捕まえなければ。

魔物の前足をゼーシュが斬りつけ、ソールハロツシュが灼熱の炎でその身体に火を灯す。

地響きのような轟音で泣き喚く魔物、痛々しくもおぞましく、ニゲルがびくつとして足を止めた。

「捕まえたっ」

と、ニゲルを抱きあげると、魔物が身震いで炎をかき消した。そして 感じる視線。

「マリアド！」

魔物が俺に向かって駆け出す。ソールハロツシュも駆け出す。ゼーシュが何か言おうとして、剣を持ち直して駆けてくる。

「え？」

足がすくんでいた。

「きゅうつ！」

腕の中でニゲルが暴れ、ソールハロツシュが叫ぶ。

「モンス・イグニフェル！」

俺の目の前が真っ暗になって、思わず尻もちをついた。魔物がまた鳴き声を上げるのが分かる。

気づくと、大きな岩の塊が溶岩と一緒に魔物の身体を灼いていた。そして俺の前に立つ、宮廷魔術士。

「早く馬車へ！」

杖で応戦する彼が、何故だかつこよく思えた。

「う、うんっ」

慌てて立ち上がり、馬車へ向かう。フエリが中から手を伸ばし、俺はそれを頼りに車内へ避難した。

そして窓外を見ると、ゼーシュが魔物の頭を切り落とすところだった。どさつとその場に落ちる魔物の頭と身体……毒々しい色の血の海。

ああ、助かった。

ぎゅつとニゲルを抱きしめて、無意識に震える身体を落ち着かせようと努める。けれども落ち着くどころか、俺は恐怖の余韻から抜け出せずにいた。

今でも目を閉じると、あの魔物の視線が浮かんで怖くなる……。

「きゅー……」

ぺろぺろと俺の頬を舐めるニゲル。

「マリアド」

「マリアドさん」

帰ってきた二人が俺を見て、顔を見合わせたような気がした。

フエリがそつと俺の肩に手を置いて、優しい声で言う。

「マリアド様、もう大丈夫ですよ」

「……うん」

たぶん俺は、ここへ来る前の世界では、こんなことを一度も経験しなかったのだと思う。魔物も、恐い敵も、生々しい戦闘も、何も知らない平和な世界に生まれ育ち、死んだのだと思う。

「ごめん、みんな」

顔を上げて、ゼーシュへニゲルを返す。

元の位置に座り直すと、二人が中へ乗り込んできた。

そしてソールハロツシュがにこつと笑う。

「間に合って良かったよ」

「……うん」

彼がいなければ、俺は確実に攻撃を受けていただろう。

これまでの彼に対する見方を変えなければいけないと思った。

怪しいし変態だし、俺に気があってゼーシュに嫉妬するような嫌

な奴だけど、彼はやはり宮廷魔術士なのだ。その実力は確かで、信
頼するに足りえる。

7 変わりだす状況

二つ目の防御結界を張り、その日はオリア地方で最も栄えた街に泊まった。風呂付の個室をフュエリが用意してくれて、ソールハロツシユとゼーシユが時間差で部屋に來ただけ、どちらも中に入れずに朝を迎えた。変な誤解は招きたくなかったからだ。

その翌日は西北へ向かって進み、本来ならのどかな田園地帯の広がる村に三つ目の防御結界を張った。そこから西へ進んだ町で一泊する頃には、ゼーシユとソールハロツシユの仲も少しは良くなってきた。

四日目、ついにオリア地方最後の防御結界を張って、ホルデウム地方へ。その間に五つ目の防御結界を張り、また先を目指した。

ホルデウム地方、最初の目的地であるフルクトウスで、それは待っていた。

「もしや、あなたが宮廷魔術士のソールハロツシユ様で？」

宿の前で馬車を降りると、飛脚と思しき男が声をかけてきた。

「ああ、そうだが」

と、ソールハロツシユが返すと、男は一通の封筒を取り出し、彼へ手渡した。

「お手紙、ちゃんとお渡ししましたぜ。それじゃ、これで」

と、去っていく男。

宿でフュエリが受付を済ませている間に、ソールハロツシユは受け取った手紙を開けていた。

「何かあったらしいね」

と、俺へ聞こえるように言う。

封筒の裏には『ネネル』の文字が並んでいた。彼女からの手紙だ。しかし、何があったと言っのだろう？

受付を終えたフュエリが戻ってくると、ソールハロツシユが深刻

な顔で口を開いた。

「どうやら、この世界へ来ているのは魔物だけではないみたいだ」
「は？」

目を丸くする俺たちを順に見ていくソールハロツシュ。

「二日ほど前に、ネネルが黒妖精らしき人物に出くわしたそうだ。惜しくも逃がしてしまったため、国内に散っているオレたちへ連絡をよこした次第だと」

黒妖精に出会ったということは、戦闘になったのだろうか？ 彼女は今、どうしているのだろうか？ 怪我などはしていないのか？

不安に思う俺に、ソールハロツシュが言う。

「ここには、彼女は無事だとある。一日でも早く仕事を終わらせて城へ帰ると書かれているよ」

それなら良かった。いや、黒妖精が現われているのなら状況は違ってくる。ましてや、ネネルはそいつに会っているのだから、互いに顔も知っているはず。

「オレたちも、出来るだけ早く済ませよう」

「ええ、そうですね」

「はい、かしこまりました」

そのためにも、今夜はしっかり眠って明日からに備えなければ。その思いはみんな同じはずなのだが、今夜も個室を取ってもらった俺の部屋に、いつものようにソールハロツシュが訪ねてきた。

「中には入れないぞ」

と、警戒する俺に、ソールハロツシュが苦笑を浮かべる。

「違うんだ、今夜はちょっと話をしたくて」

「何の話だよ？」

「これからのことさ」

どうやら今夜は下心がない様子だ。

それなら良いかと、俺は扉を開けた。

「終わったらすぐに戻れよ」

「そんなに警戒することないのに……まったく」

と、呆れたように笑うソールハロツシュ。

俺は彼のために椅子を引いてやってから、ベッドに腰を下ろした。

「で？」

「ああ、えっと」

椅子へ座って、少しの間考え込む。

じーっと眺めていたら、顔を上げたソールハロツシュと目が合ってしまった。

「少し、予定を変えようと思うんだ。明日はヘルバに寄るつもりだったが、それをやめて一気にフニスまで向かう」

と、ソールハロツシュ。

「それで不都合はないのかよ？」

「なくはないけれど……オレたちは一刻も早く、テリユス山脈へ行くべきだと思わないかい？」

聞き返されて言葉に詰まる。

確かに、テリユス山脈から魔物が出てきているのであれば、黒妖精もきつとそこから来ているはずだ。ネネルからの情報を考えると俺たちはそれを止めなければならない。

「だから、明日はフニスに一つ防御結界を張って、夜までにヌーベスへ行くよ。そこで一泊し、翌朝に山へ入る」

「……そうだな」

と、無意識に俯く俺。

彼が小さく息をつき、「それから……」と、付け加える。

「ヌーベスから入るのは、途中まで馬車が使えるからだ。しかし、あの一帯に魔物が潜んでいる可能性は今までよりも高い」

「うん」

「だから、マリアドは何があっても馬車から出ないようにして欲しいんだ」

「……え？」

ソールハロツシュが困ったように笑う。

「だって、この前のように襲われたら危険だろう？ 魔物退治はオ

レたちに任せて、マリアドは自分の身の安全を優先してほしい」

そう、俺はいまだにこの旅で魔法を使っていなかった。ネネルからの忠告もそうだが、いつだってゼーシュとソールハロツシュが俺を守ってくれてしまう。

「……分かった」

ここでも俺は、大事な時にしか人の役に立てない。この大変な時に、俺は城にいた頃と変わらず守られて、閉じこもるしかなかった。「それじゃあ、オレはこれで」

と、立ち上がるソールハロツシュ。

彼が扉へ向かう途中、俺は思いきって尋ねた。

「お前は、俺のことどう思ってるの？」

振り返った彼は目を丸くしていた。

「答えるまで帰さないぜ」

「……マリアド」

理解しかねる様子で、ソールハロツシュはそこに立ち尽くした。

それから、ゆっくりと俺の方へ歩み寄ってくる。

「とても大切な人だと思っているよ」

「どういう意味で？」

ぎこちなく俺の隣に腰を下ろして、彼が言う。

「救世主としてはもちろん、それだけじゃなくて……分かるだろう？」

じつと俺を見つめる視線は真剣だった。

応えるつもりはなかったため、俺は言う。

「じゃあ聞くが、フユエリのことはどう思ってる？」

「彼は……よく働くし、気の利くメイドだと思うよ」

「あいつ、お前のこと好きなんだぜ？」

彼がまた困ったように笑った。

「それは分かってるさ。でも、今のオレにはマリアドしか見えない」
結局こいつは、俺に本気で惚れているらしい。

「そりゃあ、少し前までなら、彼に付き合ってたかもしれないけれど、

理想の人が目の前に現われたら、そうはいかないだろう?」

「は?」

横目に睨むと、彼がにつこり笑った。

「オレの理想なんだよ、マリアドは」

意味が分からない。

「だってほら、身体のバランスが、他の誰よりも素晴らしく整っているじゃないか」

「はあ?」

ますます意味が分からない。

ソールハロツシュは息をつく、俺の身体を舐めまわすように見た。

「足の先から頭の上まで、全てが理想通りなんだよ。普通、これだけの胸があれば下は小さいのに、そうじゃない」

……そっち?

「まさにオレの求めた身体だ。君は完璧なんだよ、マリアド」

「……えーと」

嫌な予感がしたので横へずれると、勢い込んだソールハロツシュが俺を押し倒した。

「ちよ、やめ　っ!」

抵抗する俺の両手を押さえつけて、彼が真面目な顔で言う。

「君さえよければ、すぐにでもその身体を堪能させてほしい」
「やっぱりこいつは変態だ。」

膝で彼の腹を蹴り、一瞬の隙を突いてベッドから抜け出した。

「ああ、マリアド　!」

「お前なんて嫌いだ!　頼まれたって惚れてやんねえ!!」
そのまま部屋を出て、俺はゼーシュの部屋へ逃げ込むのだった。

8 ヌーベス村にて

五日目ともなると、身体が旅に慣れてきて起床時間も自然と早くなる。

しかし俺は個室なので、起きても誰もいないし静かだった。

そんな中で服を着替え、靴を履き、荷物を整理し、白いローブを羽織る。

その後、誰よりも早く目覚めるフュエリが俺の部屋へ上がってくるのが、この旅の日課だった。

「おはようございます、マリアド様」

「おはよう、フュエリ」

そして、フュエリの後について朝食を食べに食堂へ。

だいたい同じ頃に、ゼーシュとソールハロッシュが微妙な距離をとりながら食堂へ到着する。

あとは四人席へ座って朝食を食べるのだ。

「おはよう、マリアド」

と、朝から爽やかな笑顔を向けるソールハロッシュ。

「うん、おはよう」

ゼーシュはゼーシュで、部屋に置いてきたニゲルのことを考えて何か与えられそうなものを物色しながら言う。

「おはようございます、マリアドさん」

「おはよう、ゼーシュ」

そしてパンをひとつ、ポケットへ潜り込ませるゼーシュ。

さすがにこのやりとりも慣れてきたもので、もうすぐで折り返し地点だと思うと、少し寂しくも感じる。

食事を終わると一度部屋へ戻って荷物を取り、すぐに出発する。

昨日のこともあって、のんびりする時間はまったくなかった。

昼前にヘルバへ着いたが、ソールハロッシュの指示で早めの昼食

を買っただけに留まった。

それからすぐにフニスへ向かって走り出し、地図を見たフュエリが言う。

「この調子なら、夕刻にはヌーベスへ着けそうですね」

「そうだな」

と、窓外に目を向ける魔術士。

ニゲルと遊んでいたゼーシュも、ふと目をあげて外の景色を見つめた。

オリア地方と違って、自然が多い場所だ。遠くには森も見えるし、その先には目指す山脈と思しき山々。

「こんなところでも、魔物が出るんだな」

ふと呟く俺に、三人がそれぞれに目を向けてきた。

「世界的なことだから仕方ないよ」

と、ソールハロツシュ。

馬車が行く道には魔物の足跡が見て取れるし、草の影には死体があるころと転がっている。

「それに、テリユス山脈には確実に近づいているからね」

「……うん」

魔物はあの山々のどこから出てきているのだ。

一体どんな仕組みになっているのか分からないけれど、考え出すと溜め息をつきたくなる。

そんなことを考えていたら、ゼーシュが長いまつげを伏せて、珍しく重い溜め息をついた。

フニスに着くと、ソールハロツシュが六つ目の防御結界を街の入り口に張った。

緑色に発光するそれは相変わらず綺麗で、今までに張ってきた結界と繋がってその力を発揮する。

そうしてまた、俺たちは次の目的地ヌーベス村へ向けて走り出すのだが、どうも気乗りしない様子の奴がいた。ゼーシュだ。

その理由は、夕刻のヌーベス村で明らかになった。

「……もしや、ゼーシュ様？」

馬車からのぞいた顔を見て、一人の男性が声をかけてきた。

「ああ、やっぱりそうだ！ すっかりご成長なされて！」

とつさに愛想笑いを浮かべるゼーシュ。どうやら、彼女はこの村では有名人らしい。

先ほどの男性の声を聞きつけた人々は、口々に彼女を見て声を上げた。

「おかえりなさい、ゼーシュ様！」

「おかえりなさい！」

ゼーシュはただ馬車の中から愛想を振りまいていたが、歓迎されている割に嬉しそうではなかった。

「どうなってるんだ、ゼーシュ」

と、俺が彼女へ尋ねると、見習い騎士は溜め息をついた。

「ごめんなさい、隠していたつもりはないのですが……この村は、僕の故郷なんです」

ソールハロツシュとフュエリが納得した顔を浮かべる。

「それと、僕は……この村の、領主の子でして」

そう言って苦笑いを浮かべるゼーシュ。

なるほど、それなら歓迎されるのも無理はない。つつか、領主つつまりは地方貴族だから、ゼーシュも一応は貴族の生まれだったんだな……ソールハロツシュとは比べものにならないだろうけど。「それでしたら、今夜はゼーシュ様のお屋敷に泊めていただけたりは……？」

と、フュエリが財布を握りしめながら問う。どうやら、俺の個室のおかげでメイドは節約を考え出したようだ。

「……そうですね」

と、再び溜め息をつくゼーシュ。

馬車の周りにはたくさんの人たちが集まりだしていた。その為、

自然と馬の歩みが遅くなる。

何か決心した様子のゼーシュは、御者へ屋敷の場所を伝えた。

「おかえり、ゼーシュ」

と、領主は勢いよくゼーシュを抱きしめた。

「よく帰ってきたな、仕事の方はどうなってる？」

「それは後で話すから、とりあえず皆さんに部屋を」

と、ゼーシュは冷静に返す。

「おお、そうでしたな。すぐに用意させますので、広間の方でお待ち下さい」

屋敷は城にくらべると劣るが、なかなか立派だった。

通された広間のソファは手入れが行き届いていたし、配置された装飾品も見応えがある。

ゼーシュは父親と話をしながら自室へと向かって行き、残された俺たちはメイドが来るのを待つしかなかった。

ふいに隣にいたソールハロッシュが口を開いた。

「ヌーベス村の領主が、こんな屋敷に住んでいたなんてね」

やはり彼も驚いているらしい。

しかし、この屋敷に一人ずつ泊まれるような客室があるのだろうか。あつたとしても、そうしたらフュエリが落ち着かなくなるだろう。

そんなどうでもいいことを考えていたら、メイドがやって来て俺たちを客室へ案内した。

廊下にも数々の芸術品が飾られており、中でも目を引いたのは一枚の絵画だった。

「彼の母親だろうか、綺麗な人だ」

と、呟くソールハロッシュ。

ゼーシュと同じ黒い髪に、どこか人間離れた空気を思わせる顔立ち。年の頃は若そうだが、彼女とよく似ていると思った。

用意されたのは個室だった。ソールハロツシュとフュエリが同室ということらしい。

「食事の用意ができましたら、お呼びいたします」

と、メイドが頭を下げてから出て行く。

俺は適当な場所に荷物を降ろすと、ベッドにどさつと寝転んだ。

それからどれくらい経っただろうか、誰かが扉をノックする音ではつとした。

起き上がったから、「どうぞ」と、声を出す。

「くつろいでいるところを悪いね」

と、入ってくるソールハロツシュ。またお前か。

「いや、別に。つつーか、何の用だよ？」

彼は扉を閉めると、俺の向かいへ椅子を持ってきて座った。

「少し、気になることがあって」

「気になるって？」

俺が聞き返すと、ソールハロツシュは心なし声を潜めた。

「この村は少し、平和すぎやしないか？」

「え、そうか？」

平和なのは良いことだと思うが……それだけ、強い守りがあるのだろうし。

「人々が彼を歓迎するのは分かるとしても、何となく違和感があるように思えてならないんだ」

俺は首を傾げた。

「まあ、言われてみればそんな気もするけど、よく分かんねえな」

確かに、この村は他と比べて平和かもしれない。領主も魔物のことで困っているようには見えないし、村の人たちもごく普通だ。

彼の言う違和感の正体がそういうことかは分からないが、テリュス山脈の麓にあるにしては平和だ。

「フュエリに情報を集めさせてはいるが、この村は何かがおかしい」
そう言っただけを悩ませるソールハロツシュに、俺は言った。

「そんなこと言っただけで、はっきりしない内はどうしようもないだ

る」

「確かにそうなんだが……」

と、言葉を濁す。

「おい、言いたいことがあるならはっきり言えよ」

と、俺は彼を睨んだ。ソールハロツシュに妙な気を遣われている気がして嫌だったのだ。

すると、ソールハロツシュは息をついてから尋ねた。

「彼……ゼーシュについても、何か怪しいとは思わないかい？」

「え？」

ゼーシュはヌーベス村の出身で、見習い騎士で、見た目は男だけど中身は女で、何故か魔物に懷かれていて……その、ヌーベス村の人々は、魔物の脅威を感じない様子で暮らしている？

頭が混乱してぐちゃぐちゃになってくる。

何だ、何でこんな嫌な気持ちになるんだ。彼女はそんな奴じゃないって、信用できる人だって、そう思っていたのに。

「嘘だ、まだそんなこと、分かんねえだろ。そうだよ、まだ何にも分かってないんだから、疑うのはよせよ！」

「……そうだね、悪かった」

ソールハロツシュがまた溜め息をつく。

「でも、人を信じすぎると、いざという時に辛くなるのは自分だ。もう少し、よく考えてみてくれ」

静かに椅子を立って、部屋から出て行く。

その背中を見送って、俺は彼を改めて嫌な奴だと、思い込もうとしていた。

9 テリユス山脈入山

食事は美味かった。ベッドも悪くなかった。フュエリの聞き込みから魔物の出現場所もだいたい特定できた。

問題は、ゼーシュがいつもと変わらないでいることだ。

疑いたくないのに、ソールハロツシュの言葉がどうしても頭から離れなかった。

翌朝、屋敷で朝食をとってからすぐに出発した。

山道だからか、ごとごとと馬車は揺れながら進む。

「近いところから見ていこう」

と、ソールハロツシュ。

彼は昨日の話などなかったかのように、普段通りに振る舞っていた。俺と違って大人だ。

「予定だと、昼過ぎにはルクス遺跡に着けるだろう」

「遺跡ですか？ そこにも、何か？」

ゼーシュがニゲルを撫でながら尋ねた。

「ああ、君には話していなかったね。オレは超高度魔法について研究していて、それに必要なんだ」

ゼーシュは分かったのか、分かっているのか、曖昧に頷く。

「そうでしたか」

「それにルクス遺跡は、その昔に神が降り立ったとされる貴重な場所でもある。それだけでも行ってみる価値はあるだろう？」

と、ソールハロツシュは俺を見た。

「……うん」

どうも気乗りしなくて、俺は無意識に溜め息をついてしまう。

呆れたようにソールハロツシュが息をつき、ゼーシュが心配する様子で俺を見た。

「どうかしましたか？」

彼女の目は汚れがなく綺麗で、俺はそんな彼女を見ることが出来ずに返す。

「いや、大丈夫だ」

「……そうですか」

もう少し上手くやれると思ったのに、俺は本当に駄目な奴だった。

馬車が停止し、フユエリがさっさと外へ出た。

「ここから先は徒歩になります」

と、いつもと変わらない笑みを浮かべて、鞆から地図を取り出す。それじゃあ、道案内を頼むよ」

と、降りていくソールハロツシュ。

ゼーシュはニゲルを抱き上げて言いつけた。

「ニゲル、僕から離れちゃ駄目だからね」

「きゅっ」

機嫌良く鳴くニゲルに満足し、馬車を降りるゼーシュ。そして彼女は、俺へ手を差し出す。

「マリアドさんも、どうか気をつけて下さいね」

「お、おう」

その手を取って俺も外へ出た。

「だいたい、魔物ってどんな風に出てきてるんだよ」

ソールハロツシュの隣を歩きながら問う。

「オレは魔方阵を使った方法だと思ってるよ。次元の扉と似たように、地下の世界と地上の世界を繋いでいるんじゃないかな」

「そういうものなのか？」

と、思わず首を傾げる俺だが、確かなことはまだ分からない。

「で、それを俺はどうやって？」

「さあね。こればかりは、実際に見てみないと分からない。だが、黒妖精が来ているということは、確実に二つの世界は何かの方法で繋がれているはずだ」

「……そうか」

地面はでこぼこで歩きづらかった。こんな不安定な場所で魔物に襲われたら危険だ。

なるべく、何もないよう祈りながら進む。俺の後ろを歩くゼーシユについても、何もないことを祈って。

しかし、無駄だった。

「っ、魔物です！」

叫んだフユエリが俺たちを振り返り、すかさずソールハロツシユが杖を手に持つ。

行く手を塞ぐのは、野犬にも似た凶暴な目つきの魔物たちだ。

「すぐに倒します！」

と、剣を構えて駆け出すゼーシユ。

俺はフユエリと二人で立ち尽くすしかなかった。

「カエルレウス！」

青い水が魔物たちに降り注ぎ、動きを鈍らせる。その隙にゼーシユが一体目の首を落とした。

「きゅ、きゅっ」

俺の足元ではニゲルが彼らを見つめていた。

はっとして、俺はニゲルを抱き上げる。ぎゅっと胸の中に抱きしめて、戦いが終わるのを待った。

「っ！」

仲間を失った魔物たちがゼーシユを取り囲む。今にも襲いかかるうとしたところで、ソールハロツシユがそれを阻止した。

「プレッシオ！」

目に見えない圧力に魔物たちは押し返されて、魔術士が騎士の背を守る。

「ありがとうございます」

「気にするな。今回は数が多い、本気で行こう」

向かってくる魔物たちを一体ずつなぎ倒していくゼーシユ。

一方のソールハロツシユは杖を構えなおすと、呪文を唱え始めた。

「ヴェントス・エ・イグニス、スファエラ！」

湧き出た炎が風を受けてぐるぐると球状に回り始める。生成魔法だった。

それはやがて大きな丸となり、魔物たちへと放たれた。

悲鳴のような鳴き声が響く。炎に灼かれて鳴いている。吹きすさぶ風に抗うことも出来ず、魔物たちはそれから解放された瞬間に、鋭い刃で真つ二つに裂かれ、次々に息絶えていった……。

「……きゆうう」

ニゲルの声で我に返る。

戦闘を終えた二人がそれぞれの武器をしまい、息をついていた。

「ありがとうございます」

と、彼らに近づいていくフュエリ。その後をゆっくり追いながら、俺はニゲルの温かさを両手に感じていた。

「おや、あれはもしか……」

と、ソールハロツシュが地面に何かを見つけて歩み寄っていく。

その場にしゃがみこみ、観察しながら俺たちを手招くソールハロツシュ。

「やはりオレの推測は当たっていたらしい」

魔方阵だった。しかし、その図は見たことがないもので、円の中に大小様々な円が描かれていた。

この魔方阵が地下の世界に繋がっていて、ここから魔物たちが出てきているのか……どうすればそれを止められるだろう？

「それにしても、これは初めて見るな……魔物が出てくる前に何とかしたいけれど」

と、ソールハロツシュは魔方阵に手を触れた。小さな円を指先でなぞるようにして、ふと俺の顔を見る。

「マリアド」

「おう」

歩み寄って、彼の隣にしゃがみ込んだ。

するとソールハロツシュは、魔方陣から手を離してしゃべり始めた。

「普通、魔方陣というのは、その図形に魔力を宿すことで機能するものなんだ。だから、少し形を変えるだけで無効にすることが出来るのだけれど、どうやら、この魔方陣には防御が張られているようだ」

「防御？」

ソールハロツシュは俺の手を取り、魔方陣に触れさせた。

「分かるだろう？ まったくびくもしないんだ」

「……ああ、なるほど」

どれほど強くこすっても、魔方陣は形を変えなかった。

「まあ、これくらいならオレにだって出来ることだが……」

と、ソールハロツシュ。意外と負けず嫌いらしい。

ということは、まず防御を破らないと魔方陣は壊せないわけだ。

なら、その防御をどう破るか。

「しかし、あまり時間は使いたくないな。マリアド、炎の魔法は使えるかい？」

「え、使えるけど」

と、俺が返すと、彼は立ち上がって傍観している二人へ振り向いた。

「少し離れていてくれないか」

はっとした様子でフエリとゼーシュが距離を取り、ソールハロツシュも俺から離れた。

「マリアド、地下の世界を燃やすつもりでそこに魔法をぶつけてくれ！」

「え、燃やすって……」

あちらの世界に繋がっているのだから、出来ないことはないだろうが、何だか恐ろしいな。しかし、これは俺でなければ出来ないことだ。

俺は白いローブを脱ぐと、気持ちを切り替えた。

意識的に呼吸をして、両手を前へ突きだし重ねる。それを魔方阵の方へ向け、ネネルから習った魔法を唱える。

「インテルダム・イグニス！」

熱気をまとって現われた炎が魔方阵を包んだ。防御されているその壁を炎が溶かす感覚がした。

その内に炎は魔方阵に飲み込まれるようにして消えていったが、その跡はすっかり黒くなり、焦げ付いていた。先ほどと違ってあっさり形が壊れた。

「……これでいいのか？」

「ああ、上出来だ」

と、満足げに笑うソールハロツシュ。

「早く次へ行こう」

そう言って歩き出す彼を見て、フユエリが慌てて地図を手に追いかけた。

魔方阵を無効化することには成功したものの、俺は何となく後味が悪い気がしてその場に立ち尽くしていた。

すると、ニゲルを連れたゼーシュがそばへ来て言う。

「これなら、もう魔物は出てこられませんね」

「……ああ、そうだな」

俺の表情を伺いながら、ゼーシュがそそくさと歩き出す。

どんなに考えても、やってしまったものは取り返しが付かない。

半ば無理矢理思考を切り替えて、俺も彼らの後を追った。

二つ目の魔方阵も同じようにやれと言われたが、炎は性に合わないと言っただけで、今度は水の魔法を使った。先ほどよりも時間はかかったが、魔方阵の形を歪ませることに成功した。

そして三つ目も水で壊し、太陽が真上を過ぎた頃、目的のルクス遺跡が見えてきた。

「あちらへ着いたら、休憩にしましょう。ちょうど、お腹も空きましたし」

と、フュエリ。メイドの割に体力があるようで、すっかりへばっている俺と違い、彼はまだ元気だった。

足の痛みを我慢して進み、ようやく遺跡の入り口へとたどり着く。
「なかなか面白そうだ」

と、ソールハロツシュが早くも周囲を観察し始める。

ゼーシュはニゲルを抱き上げ、休めるところを探しているフュエリの後を付いて行った。

俺は超高度魔法のこともあり、とりあえず魔術士の後を追った。

10 ルクス遺跡の奥

旅の非常食で昼食を済ませると、俺はソールハロッシュと呼ばれて遺跡の奥を目指していた。

「一番奥の部屋に祭壇があり、そこに神が降りたとされているんだ。伝聞で聞いたことしかないだけに、楽しみだよ」

と、ソールハロッシュ。

俺は適当に相槌を打ちながら彼の話を聞き流していた。

魔物の出現していた魔方阵は、おそらく黒妖精がこの世界へ来て描いたものだろう。つまり、ネネルの情報は確かであり、その黒妖精とやらがこのテリユス山脈に魔方阵を描いた張本人ということになる。

「それにしても、遺跡が魔物にやられていなくて良かった」

と、ソールハロッシュがふいに呟いた。

「魔物の巣窟になっている可能性もあるとオレは考えていたんだが、今のところ心配はいらないね」

「うん、そうだな」

古い遺跡ということもあり、魔物に占拠されていたら大変なことになっていただろう。確かに何もなくて良かった。

ソールハロッシュがまた何か語り始めて、俺は先ほどのように適当な相槌を打つ。

石が積み上げられて出来た壁に声が跳ね返されて、静かに響く。

その他に聞こえるのは俺たちの足音だけだ。

たまに足元に転がった小石を無意識に蹴ったが、魔物の気配などどこにもなかった。

そして薄暗い廊下を突き当たりまで進むと、左側に何かが見えた。心なし、ソールハロッシュが足を速める。

石でできた祭壇に、天井から外光が当たっていた。

壁際にはいくつもの石像が並んでおり、少し薄気味悪い。

「なるほど、光はつまり太陽……そして、陰、か」

と、呟きながら前進するソールハロツシュ。

きらきらと光を受けて輝く祭壇に近づく彼だが、手前で立ち止まると足元を見た。

「マリアド、こっちへ来てごらん」

歩み寄ると、彼の指し示すものが何か、すぐに分かった。

「これって、まさか……」

「ああ、魔方陣だね」

一歩後ずさり、しゃがみこんで地面を覆った砂を手で払う。

同じように腰を落とし、俺は魔方陣を見つめた。ところどころ線がすり切れて見え、形が曖昧になっている。

「これも見たことがないな。使われた形跡は見られるが……今でも使えるかどうか」

鞆からあの白い石を取り出して、ソールハロツシュが魔方陣をなぞろうとした。

こつつと石が地面に触れたところで、何者かの足音が聞こえてはつと後ろを振り返る。

「あ、すみません……お二人がどこに行ったのかと、フユエリさんが心配していたもので」

ゼーシュだった。ニゲルは連れていないらしく、一人きりだ。

ソールハロツシュは笑みを浮かべると、彼女へ言った。

「それよりも、この魔方陣を見てくれ。実に興味深い」

戸惑った様子でゼーシュはこちらへ来ると、魔方陣を見下ろした。「ルクス遺跡の奥にこんなものが……」

と、呟く。

その言葉にソールハロツシュは何か感じたらしく、彼女をじっと見据えた。

「麓の村の生まれでも、ここへ来たことはないみたいだね？」

「……はい、父が過保護なものですから」

と、冷静に返すゼーシュ。

そう言われると、それで納得しそうになる。しかし、ソールハロツシュはまた言った。

「騎士団に入ることの方が、よっぽど危ないように思えるけどね」

一瞬、ゼーシュがびくつとした気がした。

「それは僕自身が望んだことです。それとこれとは、別の話です」
彼女の返答には棘があった。どうやら、かんに障ったらしい。

ソールハロツシュは笑いながら誤魔化した。

「ああ、悪かった。そんなつもりはないんだ」

「……いえ、僕の方こそむきになってしまい、すみません」

俺はただ、魔方阵を見つめていた。

「もしかすると、オレたち人間と黒妖精は本当の意味で敵対していたのかもしれないね」

行きとは違う道を通って山を下っている途中、ソールハロツシュが声をかけてきた。

「さっきの祭壇、光の当たらない部分があっただろう？」

「え…… あったような、気がするけど」

と、俺は先ほどの景色を頭に思い浮かべる。

「天井から差す光は神を表しているが、光の当たらない部分には地下へ続く道があるんだ」

「は？」

「たぶん、それは地下世界への入り口であり、黒妖精のことを暗に表していた」

しかし、その光の当たらない部分にあるのは魔方阵だけだったよ
うな……。

首を傾げる俺にソールハロツシュが言う。

「だから、あの魔方阵が地下世界に繋がっていたんだよ。まあ、オレの勝手な推測だけだね」

「……ふうん」

何だ、そういうことか。

ということとは、あの魔方陣を使って黒妖精がこっちへ来ることも可能なのか？

「なあ、ソル」

問いかけようとして、ゼーシュに抱かれていたはずのニゲルが足を駆けていくのが見えた。

「あ、ニゲル……っ」

「きゅう！」

いつもより高く鳴いて、ニゲルは見知らぬ誰かの元へ向かう。

見知らぬ誰か？

フュエリが警戒心を露わに立ち止まり、ソールハロツシュも杖を構える。

「おや、ニゲルじゃないか。こんなところにいたなんて……」

と、慣れた様子でニゲルを抱き上げる青年。漆黒の髪に真っ黒なローブを身に纏っている姿は、どこか人間らしくない。

青年はこちらを見て、にやりと笑った。

「ああ、もしかして君がゼーシュか。ルアンザから話は聞いてるよ」
一步一步、大地を踏みつけるように進んでくる青年。

フュエリがさりげなくソールハロツシュの後ろへ隠れ、ソールハロツシュが彼を睨む。

「そう恐い顔するなって。おれはただ、そっちの少年に用があるだけだ」

ゼーシュがびくつとした。

「知ってるだろ？ おれはユヴァイン、お前の姉であるルアンザの従兄だよ」

「……に、ニゲルを返して下さいっ」

前へ踏み出したゼーシュは、剣の柄に触れていた。

「分かってるよ、ニゲルはお前たち姉弟のペットだからな」

と、ユヴァインはニゲルをゼーシュへ返した。

それまで様子をうかがっていたソールハロツシュが口を開く。

「君は、黒妖精か？」

「ご名答。で、キミたちはあれだろ？ 宮廷魔術士のソールハロツシュとメイドのフュエリ、あと救世主のマリアドちゃん」

何で知ってるんだ！？ と、目を丸くすると同時に腹が立つ。

俺は男だ！

ユヴァインは不敵に笑うと、からかうように言った。

「キミたちは知らないだろうけど、おれたちって魔物の考えが読めるんだよね。ニゲルはただでさえ人懐こいから、すぐに分かったよ」
ははは、と、おかしそくに笑う。

ゼーシュはニゲルをぎゅっと抱きしめ、彼を睨んだ。

「あなただったんですね、魔物を出現させていたのは」

「当たり前だろ？ むしろ、おれじゃなきゃ出来ない技だよ。まあ、そこのお嬢ちゃんには勝てなかったようだけど」

と、俺を見るユヴァイン。どうやら彼も、嫌な意味で俺に気があ
るらしい。

「それなら、今ここで君を倒せば、連絡役はいなくなるわけだ」

と、ソールハロツシュが言くと、ユヴァインはまたおかしそくに
笑った。

「くくつ、何て気が短い人だ。おれには戦う気なんてないっていう
のに」

「なら、何故オレたちの前に現われた？」

と、相手を見据える。

「偶然に決まってるだろ？ おれはただ家に帰ろうとしてただけさ。
遺跡の奥にある、あの魔方陣でね」

「！」

ゼーシュが泣き出しそうな顔をした。

思わず前へ出そうになる俺をフュエリが止める。

「お前は一体何なんだ！？ ゼーシュと、どんな関係があるってい
うんだよ！」

フエリに掴まれた右腕が痛い。そう叫ぶのが精一杯で、もどかなかった。

「だから、おれはゼーシュの従兄だってば。 あれ、まさかお前、何も話してないの？」

「……っ」

ゼーシュはただ俯いて、肩を震わせていた。

「あー、そっか。じゃあ、おれが伝えちゃおうかなあ？」

にやにやと意地悪にゼーシュの周りをうるついては、俺の顔を見て立ち止まる。

「ゼーシュ君はね、おれたち黒妖精とお前ら人間のハーフなんだよ」
落ち葉を巻き込んで風が吹き抜ける。

声が出なかった。何か叫びたいのに、叫ぶ言葉が見つからない。

「おやおや？ もしかしてゼーシュ君、泣いちゃった？ ニゲルが心配してるよー？」

意地悪な笑みは、まるで俺たち人間を見下すかのようだった。

殴りたかった、わけの分らないことをいうユヴァインを殴りたかった。そんな心と裏腹に、俺の足はただ地面を踏むしか出来ない。

その時、ゼーシュが声を上げた。

「……もう、やめてっ」

11 大変な事実

彼女の言葉がユヴァインの目を丸くさせた。

「おや？」

「もう、何も言わないで！ 早く僕の前からいなくなって!!」
悲鳴まじりの声だった。

その少女のような叫びに、ユヴァインはからかうのをやめて笑みを消す。

「じゃあ、おれはさっさと家に帰るよ」

と、歩き出す。

その彼を注意深く見つめる俺たちだが、ふとユヴァインは俺の前で立ち止まった。

そして俺の頬に手を添えると、一瞬だけ口づける。

「!？」

「救世主が現われようと、誰もおれたちを止められないよ」

囁きの後に嫌な笑顔を浮かべて、足早にその場を去っていく……。

「大丈夫かい、マリアド!？」

驚きを隠せない様子で問うソールハロツシュ。

「何なんだ、あいつは……出会って早々、キスなど……!」

俺は唇に手を当てつつ、今起きたことを整理していた。

ゼーシュは黒妖精の血を引いていて、ユヴァインは俺に気があって、誰も止められないと……。

「そうだ、ゼーシュ！ だからつまり、どういうことなんだよ？」

と、ソールハロツシュを無視してゼーシュに駆け寄った。

彼女は顔を上げずに、ただ謝った。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい」

「……ゼーシュ」

俺もフュエリも、ソールハロツシュでさえ、そんな彼女へかける言葉を見つけれずにいた。

馬車へ着くまで、誰も口を開かなかった。

ソールハロツシュが淡々と魔方陣を見つけては、俺がそれを魔法で封じる。

それを四つほどやり終えて、ようやく馬車へたどり着いた。すっかり日が沈んでいた。

馬車に乗り込み、ソールハロツシュが御者へ言う。

「このまま村を出て北東へ、行ける所まで行ってくれ」

その意図に気づいた俺が彼を見ると、宮廷魔術士は冷ややかに言う。

「一刻も早く城へ戻ろう」

ゼーシュは何も言わなかった。ただ、その頬をニゲルが心配そうに舐めていた。

馬車が走り出したところで、ソールハロツシュはゼーシュへ問う。

「全て、話してくれるね？」

「……はい」

頷いて、そつと顔を上げる。

「僕は……僕の母は、黒妖精なんです。だから僕は、ハーフで……双子の姉がいます。それがルアンザ、黒妖精の血を濃く受け継いでいるため、母が生まれて間もなく、あちらの世界へ連れて帰ったと聞いています」

窓の外には暗雲が立ちこめていた。雨が降り出しそうだ。

「僕がまだ幼かった頃に、父がルクス遺跡の魔方陣を通じて、地下の世界へ通っているのを知りました。時々、母がこちらへやってきていたようです」

ゼーシュはあの魔方陣を知っていたが、やはり嘘について知らない振りをしていた。

「それからしばらくして、僕はあの魔方陣を通して姉と再会しました。互いの世界を行き来して、よく一緒に遊びました。ですが、僕

の母は黒妖精の中でも頂点に立つ一族の一人であり、ルアンザもゆくゆくはそうなると思いました」

「それなら、あのユヴァインとかいう男もそうなのかい？」

「はい……彼は、一族の中でも特別強い力を持つそうです。……だから僕は、魔法に負けない力が欲しくて、騎士見習いになりました」
それだけは嘘ではなかったようだ。

「そしてユヴァインが一族の長になり、二つの世界を支配すると言いだした……それに反対した母は彼の怒りを買って、一族を追われて行方不明だと……」

ニゲルがふいに俺の足元へ来て、抱っこをせがむ。仕方なく抱き上げてやると、ゼーシュが悲しそうに言った。

「そのせいで、ルアンザはこちらに逃げ出すことも出来ない……ニゲルから、聞きました」

はっとする俺とフエリ、ソールハロツシュ。

「ニゲルは、ルアンザがあちらの世界で拾ったのを、僕が協力する形で飼っていた魔物です。僕にも黒妖精の血が流れているので、分かるんです」

「……だから懷いていたわけだ」

と、どこか冷めたようにソールハロツシュが言う。

ゼーシュは口を閉じると、しばらく考え込む様子だった。

そして、言う。

「ヌーベス村には、僕のように黒妖精の血を引く人たちが大勢います。だから魔物も、あまりあの村を襲わなかったみたいです」

俺にはニゲルの言葉は分からないし、黒妖精がどういうものかもよく分かっていない。けれども、ゼーシュが悪い奴ではないことだけは分かった。

それなのに、ソールハロツシュは厳しい現実を突きつけた。

「城へ帰ったら、君の知っていること全て、国王たちに話してもらうよ。場合によっては、騎士団からの除名も覚悟するべきだろう」

「……っ、はい」

ゼーシュはぎゅつと唇を噛んだ。

彼女に何かしてやりたいと俺は思ったが、ニゲルがそれを許してくれなかった。急に腕の中でもがき始めたのだ。

仕方なく両手を放してやると、ニゲルは俺の膝の上で丸くなった。「いずれにせよ、君は大変な事実を隠していたんだ。ヌーベス村の領主に責任が問われたって、おかしくはないよ」

二つの世界が完全に分かれたれていたというのは間違いだった。昔からこの世界は、地下の世界と繋がっていたんだ。

車内に強い風が吹き込み、慌ててフュエリが左右の窓を閉めた。

「黒妖精の使う魔法については知っているのかい？」

と、心なし口調を変えるソールハロツシュ。

「……なんとなくしか。ですが、ルアンザなら詳しい内容を知っているかもしれません」

「そうか……しかし、ユヴァインは今、あちらの世界にいるんだっ
たな」

あの魔方阵を使って地下世界へ行くことを考えたらしいが、すぐにソールハロツシュは首を横に振った。

「残念ながら、お姉さんに会いに行くのは無理そうだ。彼についても、どれほどの術者がまだ分らないしね」

宮廷魔術士はゼーシュのことを理解している風だった。必要以上に責めるつもりはなく、俺と同じで敵だとは思っていない様子だ。

ただ、それを阻むのが事実という壁で……どうしたら、黒妖精との戦闘を、世界の終末を避けられるだろうか。

……いや、待てよ。

「その、ユヴァインが黒妖精たちのトップなんだよな？」

「はい、そうですか……」

と、ゼーシュが少し驚いたように俺を見た。

「じゃあさ、あいつを倒したら全て丸く収まるんじゃないの？」

「……マリアド、まだ黒妖精たちがどういった組織かも分からない

のに、そんな」

と、ソールハロツシュが言いかけ、ゼーシュが遮る。

「可能性はあると思います。でも、彼がどうやって、この世界を滅ぼそうとしているのか分かりませんし、もう二度と姿を現さないかもしれません」

「ああ、そつか……」

もし、また会えるのなら、その時は問答無用で倒してしまおう。会えないのなら……俺たちには、為す術がない。その時に、俺が力を発揮するしか。

「……このことについては、城へ戻ってから話そう」と、ソールハロツシュが話をまとめた。

その夜は街の宿に泊まり、予定を練り直した。

そして迎えた七日目、ソールハロツシュが以前のように防御結界を張りながら、あとは帰路をひたすらに進んだ。どの場所にも長居はせず、ただただ進んだ。

夜も更けた頃に宿を取り、明朝には馬車へ乗り込んだ。

そうして、ようやく見慣れた城が見えてきたのは、八日目の夕刻だった。

1 報告とそれから

「 謹慎を命ずる」

国王は苦い顔をしていた。

隣の玉座に座っていたフィアンシーナ姫が、気の毒だと言わんばかりの視線を彼女へ寄越す。

「期間やその後の処分については、落ち着いてから決める。知らせを受けるまで、決して部屋から出るでないぞ」

「……はい」

この国だけでなく、この世界からしたら黒妖精は敵なのだ。それをすんなり受け入れることは無理だった。

「連れて行け」

兵士たちがゼーシュの腕を乱暴に掴んで立ち上がらせた。

そうして謁見の間から出される彼女を見送って、俺は自分の提げた鞆に目をやった。

「それで、あの子があんなことになったってわけ？」

と、俺たちよりも先に帰っていたネネルが問う。

「うん、でも除名じゃなくて良かったよ」

「まあ、確かにねえ……」

と、足元をうろつろしているニゲルをじっと見つめるネネル。

「で、この魔物は？」

「逃がす」

「何よそれ、どういうこと？」

俺はニゲルを抱き上げると、テーブルの上に座らせた。

「逃がしたと見せかけて、助けを呼ぶんだよ」

ニゲルの首に革紐を通し、その紐に手紙をくくりつける。

「ニゲルがユヴァインにさえ会わなければ、ゼーシュの姉であるルアンザと連絡が取れる。で、ニゲルはルアンザをこの城まで連れて

くる。出来るよな？」

「きゅっ」

鳴いて理解を示すニゲル。

その頭を撫でてやって、俺はネネルに顔を向けた。

「信じろって。運が悪ければ台無しになるけど、今はルアンザに会わなきゃ何も出来ないんだ。少なくとも、やらないよりはマシだろ？」

ネネルは呆れたように溜め息をつき、適当に頷いた。

「ええ、そうね。上手く行けばいいわね」

と、椅子を立てて扉へ向かう。

「おい、どこ行くんだよ」

思わず声をかけると、魔女は振り返って言った。

「報告書を書かなきゃいけないのよ。あと、この旅で得た情報を同僚と共有してくるわ」

そしてさっさと廊下へ消えていく。

そういえばソールハロツシュもそんなことを言っていたな。フュエリは早くもメイドの仕事に戻ってしまったし、ヴェルシはまだ療養中だった。やはり今、身動きが取れるのは俺くらいなわけだ。

「……じゃ、俺たちも行くか」

と、ニゲルを見下ろす。

「きゅっ！」

前足をきつちり揃えて、ニゲルが頼もしく鳴いた。

部屋を出て庭へ向かう。

相変わらず城の周囲をあの大きな鳥が飛んでいたが、構わずに俺は人気のない場所を探した。

防御結界のおかげで城下町に魔物が侵入してくることはなくなっていた。しかし、その内部にいる魔物は敵意があるために外へ出られない。つまり、あの大きな鳥も倒されない限りは城を周回し続けるのだ。敵意さえなければ、誰でも通り抜けられるのが防御結界の

すごいところだった。

普段の日常を取り戻しつつあるメイドたちを横目に、俺は地面にそっとしゃがみこむ。

すっかり日が暮れて、夜空には双子の月が浮かんでいた。

「ごめんな、ニゲル」

と、ニゲルを手放す。

ニゲルは少し歩いてから、俺の方を振り返った。

「……きゅっ」

そして、走り出す。

あつという間に遠ざかっていくニゲルを、俺はいつまでも見送っていた。

どうか、ルアンザと連絡が付きますように。そしてルアンザが、ゼーシュみたいな良い奴でありますように！

部屋へ戻ると、テーブルの上に夕食が並んでいた。久しぶりの豪華な食事だ。しかし、そこにあるのはどう見ても二人前で。

「おかえりなさい、マリアド。今夜はフィアンシーナが一緒にさせていただきますわ」

と、にっこり微笑むお姫様。

「え、あ……はい」

俺は妙な不安を覚えつつ、彼女の向かいへ腰を下ろした。

フユエリの姿はなく、部屋には俺と彼女の二人きり。

その内に戻ってくるだろうが、それまでどうしたら良いのだろう。「そんなに緊張なさらなくて良いんですよ。フィアンシーナはただ、旅のお話を伺いたいただけですわ」

「ああ、そうでしたか」

言われてみれば、さっきはあまり話をしなかった。ゼーシュとソールハロツシュばかり話をして、俺はほとんど聞き役に回っていたのだ。

「それに、マリアドときちんとお話をしたこともなかったでしょう

？」

「あー、確かにそうかもしれません」

俺の名付け親でありながら、こうして面と向かって話をするのは初めてだ。

彼女が満足げに頷いたところで、フユエリが戻ってきた。

そしてそれぞれの前へ置かれるのは、いわゆるワイングラス。

「お疲れでしょう？　今夜はゆっくりしましょう」

注がれるのは、とっても高そうな香りの立ちこめるアルコール。

「……え、えっと、あ、ありがとうございます」

今までお酒を飲みながら食事をしたことがなかったもので、思わず戸惑ってしまった。

姫はそんな俺を見てくすつと笑い、グラスを手に取った。

「では、乾杯」

「か、乾杯」

慌ててグラスを取り、少し上に持ち上げた。

姫は慣れた様子で一口飲み、俺も真似して口を付ける。

「それで、あの騎士見習いとは、一体どこまで進みましたの？」

急な問いかけに、風味を楽しむはずが一気に飲み込んでしまった。しかも、ちよつとだけ気管に詰まらせた。

口元に手をやりつつ、咳をする俺。

「あら、大丈夫ですよ？」

「え、ええ……」

もう一度ワインを飲んでから、俺は姫の顔を見た。

「申し訳ないんだけど、俺は、その……あいつとは、ただの友達なんだ」

姫は少し目を丸くして、フォークを手に取った。

「そうでしたの。ちよつと期待してましたのに」

期待って何だ。というか、俺とゼーシュって、そういう風に見えるのか？

「はい。ですので、何もありません。マジで、本当に」

言葉を強調しつつ、俺もフォークに手を伸ばす。

彼女が黙々と食事を始めるのを見て、俺は一つ息をついてから食事にとりかかった。

そうして皿の上が残り半分ほどになり、姫が再び唐突に問う。

「マリアドは、どんな方が好みですか？」

「は！？」

口の中が空で良かった。

動揺する俺に構わず、もう一度尋ねるフィアンシーナ姫。

「ですから、どんな方が好みなのですか？ 年齢は上か下か、外見なども聞かせていただきたいですわね」

「いや、えっと」

急に好みのタイプを聞かれるとは思っていなかった。ましてや、この場で、この人に。

どう答えたらいいか思考しながら、食事を続けた。

「あまり、考えたことはないっすね。っていうか、俺、まだこの世界に来て二十日も経ってないし」

毎日が慌ただしくて忘れそうになるが、実はまだ日が浅い。それなのに、特定の誰かとそんな関係になるなんて考えられないだろう。それに俺は、自分が男なのか女なのか、よく分からなくなっているのだ。最初は男だと思ったけれどそれは昔の話で、ソールハロツシュには完全に女扱いされているし、姫だって俺を女だと思い込んでいる。……だから、こんな質問を浴びせてくるわけだが。

「確かにそうですね。でも、殿方に囲まれた中で旅をしていたのですから、何かありませんでしたの？」

と、心なし目をきらきらさせる姫。

俺は苦笑いを浮かべて返した。

「ありませんって、そんなこと」

ソールハロツシュには常に狙われていたが、それで落ちる俺じゃない。

「見習い騎士とも？」

「ありません」

「フユエリとも？」

「絶対にないです」

見守っていたフユエリが気まずそうに視線を逸らす。

「では、ソールハロツシユとも？」

「ありませんってば。むしろ、彼にはうんざりしているところです」

そうはつきり言ってやると、姫は落胆した様子で溜め息をついた。

「つまらないですわ」

そう言われたって、どうしようもない。

適当に笑いで誤魔化して、俺はまた黙々と食事を始めた。

それにしても、俺が女だと思われていたら女の子に恋するのは微妙だよな。悪くはないだろうが、俺の中の常識が納得しない。だからといって、男に恋するのも嫌だ。俺の周りにいる男には、ろくな奴がいないしな。

つつーか、恋愛って何だ？ 俺、死ぬ前は恋愛したことあるのかな？ どんな人が好きで、どんな人とどんな風に生きていたんだろうか。

今となっては何も分からないし、思い出せそうにもない。ただ一つだけ言えるのは……今の俺は、マリアドだってことだ。

そんなとりとめのないことを考える一方で、俺は城の料理の美味さに懐かしさを覚えていた。

2 その先のこと

翌朝、俺はいつものように早く目を覚ました。すっかり旅に慣れてしまつて、以前のようにフュエリが来るまで眠つていらなかったのだ。

ベッドを出て窓の外を見る。相変わらず飛んでいる大きな鳥。今日は睨んでくることがないようで、安心して俺はぼーっとそいつを見ていた。

ニゲルは今、どこを走っているだろう？ 無事に、ルアンザに会えているだろうか？

朝食を済ませても、ネネルはやってこなかった。

「暇だなー」

呟くと、部屋の片付けをしていたフュエリが答える。

「仕方ないですよ。ネネル様もソールハロッシュ様も、仕事で忙しいのですから」

「それは分かつてるけどさあ……」

急に退屈な日常に戻されて、不満にならない方がおかしい。

「ゼーシュは部屋で謹慎だし、マジで退屈。暇だ」

と、無意味に呟いて溜め息をつく。

フュエリが呆れたように少し笑って、片付けを再開した。

俺にも何か仕事があればいいのに、どうしてこつも退屈なのだろう。やることがなさすぎて、逆にストレスが溜まってしまふ。

せめてヴェルシが来てくれたら良いのに……無理か。

だったらフィアンシーナ姫でも良いが……でも、昨夜の続きはしたくないな。ガールズトークは苦手だ。

それなら……そうだ、ジャスナに会いに行こう。

久しぶりに見る聖堂は、心なし大きく見えた。

礼拝の時間がとうに過ぎているために、周囲に人気はない。

裏へ回ると、何人かの巫女が庭を掃除していた。その中の一人とふいに目が合い、どきっとする。

「おかえりなさいませ、マリアド様！」

ジャスナだ。

「おう、ただいま」

と、片手をあげて彼女へ近づいていく。

ジャスナもまたこちらへ向かってきていたが、その他の巫女たちが俺たちを見ていた。

「あなたたち、何をばーつとしているの」

と、建物から出てくる巫女長。彼女はすぐに俺の姿に気づいた。

「まあ、お久しぶりです。マリアド様」

「お久しぶりです、巫女長」

そして歩み寄ってきては、ジャスナへ言う。

「ジャスナ、お話しするのは良いけれど、あまり長いと駄目ですからね」

「あ、はい……すみません」

と、頭を下げるジャスナ。

どうやら巫女長は俺たちの間柄をよくご存じらしい。

「じゃあ、ちよつと借りていきますね」

と、俺は言つて、ジャスナに目で合図した。

街の中は平和そのもので、以前のような悲鳴や破壊音は聞こえない。

「それで、どうでしたか？」

と、広場へ続く階段を下りながらジャスナが問う。

「一応、収穫はあったかな。黒妖精にも会ったし」

「え、黒妖精に……？」

目を丸くして驚く彼女。

「ああ、ちよつと話をしただけで別れたけどな」

と、俺は返した。

「そうでしたか……他には何か、ありませんでした？ 魔物とか」

「魔物には会ったよ、何度もね」

「大丈夫でしたか？」

「うん、大丈夫っつーか……ソールハロッシュとゼーシュが守ってくれたから、俺は何もしなかったな」

「いつだって俺を第一に守ってくれた二人のことを思う。」

「襲われそうになった時も、ソルが盾になってくれてさ」

「そうでしたか、それなら良かったです」

と、ジャスナがにっこり笑う。

階段を終えて広場へ着くと、子どもたちが元気に駆け回るのが見えた。

「魔物が出現している魔方阵も、分かっている箇所だけだけど、きちんと封じてきたしな」

「それは良かったです」

「超高度魔法については……ちょっと微妙だったな」

と、俺は苦々しく口角を上げた。

「ソルは何か分かったみたいだけど、俺にはちつともだ。それに、その後すぐに黒妖精のユヴァインって奴に会ったからさ」

するとジャスナは、俺を励ますように微笑んで言う。

「それなら仕方ありませんね。まだ時間はありますし、焦らなくて良いと思います」

彼女の優しさは素直にありがたい。ぜひネネルに見習って欲しいところだ。

「うん、ありがとう」

だから俺も、つられて微笑んだ。

けれども今の平和は束の間の平和。黒妖精の動向で状況はいくらだって変わるだろう。

魔物が街を襲うことはなくなっても、黒妖精が現われると言われた二度目の期限までは、あと四日しかない。

着実にその時は、近づいてきていた。

「……なあ、ジャスナ」

「何ですか、マリアド様？」

彼女は優しいから、俺の欲しい言葉をくれる。けれども、俺はだんだんと意識し始めていた。

「全てが終わった時、俺は……俺は、どうなっちゃうんだろうな」
ジャスナがはっとして俯いた。

石畳を歩く。温い風を頬に受けて、髪がなびいて、背後へ消える。
「俺は神の使者で、この世界を救う救世主で、黒妖精の脅威からこの世界を救って、その後は？」

この世界からいなくなるのか？ また神様の元に行って、別の世界で生まれ変わるのか？ でも、そうすると俺はこの世界に一ヶ月しか存在できなくて、それで終わってしまうのか？

「……分かりません」

と、ジャスナは答えた。当然の答えだった。

「俺は英雄になれるかもしれないけど、そうして俺がいなくなった後のこの世界は、一体どうなる？」

「分かりません」

と、心なし泣き出しそうな声で言う。

俺はそんな彼女に構わずに、また口を開いた。

「平和を取り戻しても、いつまた黒妖精が、変なことを考え出すかも分からないのに」

不安だった。

何故だか分からないけれど、俺は不安だった。

ジャスナが俯いていた顔を上げて、立ち止まる。

「全ては神の御心のままに、です」

つまり、その時にならないと何も分からないのだ。
もやもやした不安を抱えたまま、俺はこの世界で務めを果たすしかないのだ。

「……ごめん、ジャスナ」

と、俺も立ち止まって彼女を振り返った。

「いえ、気になさらないで下さい」

ジャスナはそう言って、また微笑む。

そして俺の隣まで来ると、可愛らしく首を傾げて問いかけた。

「以前と比べてマリアド様は、少し成長なさったようですね？」

「え、そうかな？」

「はい、大人っぽくなった気がします」

思わず嬉しくなって、俺ははにかんだ。

「そっか、ありがとう」

午後になると、また退屈な時間がやってきた。

フュエリが淹れてくれた紅茶を飲みながら、ぼーっと過ごす。

「あの、マリアド様」

ふいに彼がこちらを見て、顔色を伺うような様子を見せた。

「何？」

と、俺が聞き返すと、フュエリは躊躇いがちにそばへ来て言う。

「マリアド様は、一体何を考えてらっしゃるのですか？」

「……え？」

びつくりした。質問の意図がまったく分からない。

「その、何というか……マリアド様は、どこか他人と距離を置いて
いるような気がするのです」

そんなことないよ、と、言いたいのにな、何故だか言えなかった。

「ソールハロツシユ様にはもちろんですが、他の方に対しても、ど
こか心を開いていないように感じます」

「……そう、かな？」

自分ではそんなこと、考えもしなかった。それどころか、ネネル
やフュエリ、ゼーシュに対しては心を開いていたつもりなのだが。

俺が不安そうにしたからか、フュエリは慌てて言葉を継いだ。

「あ、いえ、気のせいなら良いんです。ただ、私はそう感じただけ
で、困らせたいわけじゃないので……っ」

あたふたと俺の気を悪くさせないように努めるフユエリ。

でも、言われてみるとそうかもしれなかった。俺はただの神の使いで、この世界を救ったらどうなるかは分からない。それどころか俺がここにいるのは神様の手違いなわけだから、俺は無意識にみんなと距離を置いて、ただその時を待っているような一面もある。

「いいよ、フユエリ。あながち間違えてもないしさ」

「そ、そうですか……？」

安心したようにフユエリが息をつき、それからまたもぞもぞと何か言いたそうにする。

俺は呆れて、仕方なく促した。

「まだ何かあるなら、はっきり言ってくれ」

「……そ、その」

と、目を伏せるフユエリ。

今度は何を言い出すかと思っただけで待っていたら、彼は言った。

「マリアド様はもう少し、ご自分に素直になるべきだと思います」

「……は？」

素直って何だ？ 俺は今のままでも充分に素直だと。

「ご自分の、本当の気持ちとか、誰かに対する本音とか……そういうものを、もっと大切にして、表すべきだと思うのです」

「どういうことだよ」

無性に苛ついて、ちょっとぶっきらぼうになってしまった。

フユエリは先ほどのように動じることなく、むしろ真っ直ぐな視線を俺へ向けた。

「ソールハロッシ様の気持ちに、きちんと応えていただきたいです」

応えるも何も、俺はソールハロッシが嫌いだ。

「そして、他の方たちの想いにも気づいていただけたら……と」
うんざりする。

俺は一体何なんだ。どうしたら良いんだ。

「……分かったよ」

反抗的に返して、俺はベッドへ向かった。

「昼寝するから、絶対に起こすなよ」

と、思ってもいない言葉を彼に言い残して、さっさと布団に潜り込んだ。

3 少年みたいな少女

たぶん、俺が前にいた世界とここでは、常識が違うのだろう。だから俺は、いまいち、みんなと歩幅を合わせられない。だから俺は、こんなに嫌な気分になるんだ。　　だけど、それが言い訳だってことも分かってる。

「散歩してくる」

朝食を早々に済ませ、俺は部屋を出た。

フエリとはあれから、あまり言葉を交わしていなかった。良くないなっと思うけど、俺にはどうしようもなく、もどかしかった。間に誰か入ってくれたら、少しは変わるのだろうが……。

適当に階段を下りて城外へ出る。

今日もあの大きな鳥が頭上を……舞っていない。何故か屋根の上で丸まっていた。珍しいこともあるものだ。

「きゅー！」

はっとして声のした方に顔を向けると、ニゲルが俺に向かって駆けてきた。

「ニゲル！」

無事に帰ってこられたようだ。思わず嬉しくなっちゃがみこみ、ニゲルを抱きとめた。

そうして久しぶりの再会を喜んでいると、黒髪の少年らしき人影がこちらへ来る。

「おい、ニゲル！」

と、ぶっきらぼうな口調で俺の前に立ち止まっては、はっとしたように目を丸くして。

「……まさか、あんたがマリアド？」

「ってことは、お前がルアンザか」

立ち上がってゼーシュの双子の姉を見下ろす。しかし、その姿は彼女と呼ぶには抵抗があった。

「そうだよ。ようやくニゲルが帰ってきたと思ったら、ゼーシュの秘密がばれるなんて……家から出るの、苦労したんだからな」

真っ黒な髪は高い位置で結わえられているがポニーテールと呼ぶにはあまりにも短く、胸は申し訳程度にあり、態度がでかい。そして全体の雰囲気からすると、どうも男っぽい。それも、思春期に入っただけの男子を思わせた。

俺はそんなルアンザに苦笑しつつ、ニゲルを抱いたまま城内へ誘った。

「とりあえず俺の部屋に行こう。詳しい話はそこでする」

「お早いお帰りで」

と、フュエリは言いかけ、俺の後ろにいるルアンザに気づく。

俺はただにつこり笑って部屋の中央へ向かった。

そして椅子を引いてやり、ルアンザへ言う。

「ほら、座れよ」

「……う、うん」

ルアンザはすぐには座らなかった。警戒している様子できょろきょろと周囲を見て、今度は俺に視線を向けてくる。

構わずにその向かいに俺が腰かけると、ルアンザはさも意外そうに言った。

「マリアドが女だったなんて……」

しつこいようだが、俺は男だ。きつと、たぶん、半分は。

「良いから座れって」

「あ、うん」

慌てて腰を下ろすルアンザだが、その視線はどう見ても俺の胸にあった。心なし、俺の抱いたニゲルを羨ましそうに見ている。

何となく気恥ずかしくて、俺は胸を隠すように横を向いた。どうやら、ルアンザはゼーシュと反対で中身が男らしい。……つまり、俺と一緒に。

フュエリが紅茶の準備をしに部屋を出て行き、口を開く。

「それでゼーシュのことだけど、今は謹慎ってことで部屋から出られない状態なんだ」

「うん」

「でもって、俺たちはユヴァインと顔見知りになってしまった」

「それはあいつから直接聞いたよ。まあ、マリアドが女なら、キスしちゃうのも納得っていうか……」

と、今度は俺の唇に視線を向けるルアンザ。何だかめんどくさそうな奴だ。

「で、俺たちは黒妖精がどんな方法でこの世界を焼き尽くそうとしているのか、知りたい」

ルアンザは息をつく、鞆から一枚の紙を取り出した。

「模写で悪いけど、これが僕たちの世界と地上を表した図だよ」

よほど急いでいたのか、あまり良い出来ではなかった。それでもはつきり色が塗られている部分が地下の図であることは分かる。そこに重なるようにして、俺の知っている大陸図が細い線で描かれていた。

「で、どうということだ？」

「この、大陸が重なってる部分、ここをユヴァインは狙ってるみたかった」

と、その広い範囲を指で示す。

つまり、狙われているのはその大陸で、中には俺たちのいるこの国も当然だが、存在していた。

「方法は分からないけど、あいつの考えてることはおかしいんだ」と、ルアンザ。

「おかしいって、何が？」

「だから……僕たち黒妖精だけでなく、他の奴ら全員を地上に送り込もうとしてるんだ。魔物だって、人間たちを怯えさせるためだけじゃない」

どうやら、彼にはまた別の狙いがあるらしい。

「それなのにあんたたちが扉を壊しちゃったから、またユヴァイン

は扉を作りに出かけていった。その隙に逃げ出てきたわけだけど、見つかったら僕、確実に殺されるよ」

と、恨めしそうに口を尖らせる。

「しょうがねえだろ。俺たちはそんなこと知らないし、あいつの思うままにさせるわけにもいかねえんだからさ」

と、俺は言い返した。

ルアンザは「それもそうだな」と、溜め息をついてから言った。

「僕の知ってるのはこれくらいで、あとは魔物たちから情報を得るしかないよ」

「そうか、わざわざありがとな」

と、俺はにこつと笑う。

するとルアンザは、急激に頬を赤くして顔を逸らした。

「べ、別に……ゼーシュのためだからな、しかたなくやってるだけだからなっ」

とても初々しい反応だ。もしかするとルアンザは、ゼーシュと違って付き合いが少なかったのかもしれない。

抱いているのに飽きてニゲルを解放してやると、扉がこんこんと叩かれた。

「どうぞ」

と、俺が声をかけた直後、現われたのは変態魔術士。

「フュエリから聞いたよ。彼のお姉さんが」

ぴたつと足を止めるソールハロツシュ。

「僕がルアンザだ」

と、名乗りながらも、何故かソールハロツシュを睨んでいるルアンザ。その視線と姿に、美青年は珍しく困惑していた。

「オレはソールハロツシュ、この国一番の宮廷魔術士だ」

どうやら、ソールハロツシュはルアンザを女だと認めなかった様子だ。

そしてこちらへ来ては、俺の耳に口を寄せる。

「これはどういことなんだい？ 確かお姉さんと聞いていたが…」

…」

「それがどうやら、中身は男みたいなんだ」

俺が平然と返すと、彼は微妙な顔で「なるほど」と、呟いた。

ニゲルが俺たちの足元をうろつくと歩き回る。

「それで、話は全て？」

「ああ、ユヴァインがこの辺りを狙ってるってことも聞いた」

と、地図を示す俺。

ソールハロツシュはそれをしばらく眺めると、改めてルアンザを見た。

「一応聞くが、君は俺たちの味方なんだろうね？」

「馬鹿言うなよ、僕はゼーシュの味方だ」

先ほどの俺に対する態度と違い、ソールハロツシュには厳しいルアンザ。

「そうか。それならオレも彼の味方であるから、同じ仲間ということに」

「勝手にすれば？　僕は、お前みたいな変な男を仲間だなんて認めないけどな」

ソールハロツシュは溜め息をつき、俺の隣へ座った。これで怒らないのは、やはり彼が大人だからだろう。

ルアンザは席を立つと、ニゲルの後を追いつ始めた。

「まあ、マリアドは女だから守ってやるけどさ」

「……若いつて良いね」

と、遠い目で言うソールハロツシュ。早くもルアンザとは気が合わないことが判明した様子だ。

しかし、これではいざという時に協力し合えない。

「こら、ルアンザ。あいつ、あんなにけどすげー強いんだぞ」

と、俺は腰を上げて後を追う。

しかしルアンザが何も答えなかったのも、仕方なく俺は先回りをして行く手を塞ごうとした。

「神の使者である俺が言うんだから間違いない」

俺の足の間をニゲルが通過していき、ルアンザは立ち止まる。

「そうなの？」

「ああ、そうだ。人間としては微妙だけど、魔術士としては一流なんだから仲良くしろよ？」

ルアンザはすると、また俺の胸を見た。

「……おっぱい触らせてくれたら、仲良くしてやつても良いよ」
ソールハロツシュがはっとこちらを見るのが分かった。

「最悪だな、お前」

「だってマリアド、胸でけえじゃん」

と、俺を見上げる瞳は思春期そのものだった。さすがの俺でも、そこまで女性に対して貪欲にはなれない。

しかし、こういう奴が本当に望むものが何かは知っていた。

「……ったく、しょーがねえな。特別だぞ」

と、俺はルアンザの頭をぎゅっと抱き寄せ、思い切り胸に押しつけてやる。

「っ……………!!」

「オレでさえ、まだ手を出していないのに　っ!」

と、悲鳴を上げるソールハロツシュ。そういえば、直接身体に触れたのは最初だけだったな。うん、何か……ごめん。

何だか申し訳なくなってきたので、ぱっとルアンザを離す。するとフュエリが紅茶のワゴンを押しながら戻ってきた。

余韻に浸るルアンザを少し不思議に思いながら、てきぱきとお茶の用意を始めるフュエリ。

俺は椅子に戻って、ソールハロツシュに顔を向けた。

「悪いな、ソル」

「いや、オレにも触らせてくれるなら　」

「それは無理」

ソールハロツシュが寂しそうに口を閉じた。ルアンザはまだ子どもなのだから、それとこれとじゃ意味が違う。

腰を落ち着かせると、フュエリが俺の前へカップを差し出した。

途端に立ち上ってくる良い香り。

ふいに扉の開く音がして、俺は顔を上げた。

「遅くなって悪いわね、ヴェルシが歩けるようになったって言うんで連れてきたけど……」

ネネルの巨乳にはつとするルアンザ。

「マリアド、あの人は？ あの人はい？」

と、無邪気に聞いてくる。そういえば、胸の大きさではネネルが一番だったな。

「宮廷魔女のネネルと、後ろにいるのがゼーシュの世話になってる騎士、ヴェルシだよ」

ルアンザは二人の前まで行くと、姿勢を正した。

「初めまして、ルアンザです。いつもゼーシュがお世話になっておりますっ」

と、後半はヴェルシに向けて言う。ルアンザの価値観は胸の大きさに決まるらしい、負けた。

ネネルは嫌な予感を感じたのか、

「ネネルよ、よろしく」

と、さつさと俺の方へ避難してきた。

「ヴェルシだ、よろしく」

と、ヴェルシもあまり話そうとはせずにネネルを追った。

4 黒妖精の魔法

「で、どうなったの？」

「とりあえず、ルアンザは味方だ。で、ユヴァインに見つかったら殺されるらしい」

ネネルが嫌そうな顔をした。

「じゃあ、しばらくここにいろわけ？」

「だろうな。あいつが言うには、この辺が狙われてるってさ」

と、地図を指す俺。

それを見てから、ネネルは輪の中に入れずにいるルアンザに顔を向けた。

「嘘は言っていないでしょうね？」

「もちろんです！」

と、答えるルアンザの頭の中は、きつとネネルの胸でいっぱいだ。

「顔はゼーシュとよく似ているが、性格は正反対だな」

と、どこかおかしそうにヴェルシが笑う。

「俺もそう思う」

彼女へそう返したところで、ネネルがきっぱり言い放った。

「じゃあソールハロッシュ、あの子の世話、お願いね」

「はあ!？」

「嫌です！」

ほぼ同時に声を上げる二人。

まさかルアンザにまで拒否されると思っていなかったネネルは、ソールハロッシュを無視して言う。

「表向きだけでも良いから、誰かの見習いになっておかないと、この城にはいられないわよ」

城への出入りは一般人も出来ないことはないが、ルアンザのような子どもが頻繁に出入りするのにはさすがに怪しい。

「そうか……でも僕、それならネネルさんの見習いになりたいです」

っ
」

「何だよ」

「だって、だって……僕、女の子だし」

と、ソールハロッシュをちらつと見るルアンザ。どうやら、自分の外見を良いように使う術を持ち合わせているらしい。なんてクソガキだ！

ネネルはそんな彼女もとい彼を見つめて、溜め息をついた。

「分かったわ。でも表向きだけよ？」

「……ありがとうございます！ ネネルお姉さま大好き！」

と、ネネルの胸へ飛び込むルアンザ。

それが目的だとは気づかず、ネネルは母性たっぷりにルアンザを受け入れるのだった。

「妖精って言うわりに、俺たち人間とあんま変わらねえよな」

ネネルが見習い手続きのためにルアンザを連れて出て行くと、俺はそう呟いた。

「妖精族にもいろいろあるからね。特に黒妖精はその強大な魔力のせいか、オレたち人間とよく似ているんだ」

と、ソールハロッシュ。

それまでルアンザが座っていた椅子にゆっくり腰かけて、ヴェルシが問う。

「それにしても、ゼーシュが黒妖精のハーフだとは知らなかったな。双子だということも」

「そっか、ヴェルシも知らなかったんだな。まあ、隠すのも無理はないことだけど」

と、返す俺。

いつの間にかベッドの上でニゲルが寝転がっていた。

「そっいえば、マリアド」

と、ソールハロッシュが俺を呼ぶ。

「何？」

顔を向けると、彼はヴェルシを気にしていた。どうやら、彼女には聞かれたくない話らしい、ということとは。

「いや、あとで話すよ」

「おう」

空気を感じたヴェルシが俺たちを見て尋ねる。

「私には聞かせられない話ですか？」

嫌味というわけでもなく、ただ聞いただけのようだった。

ソールハロツシュは彼女へ顔を向けて微笑む。

「いえ、別にそういうわけではないですが……まあ、聞かなかった振りをしてくれるなら」

「……では、私はニゲルと遊んでいましょう」

と、席を立つ。

何て良い人なんだろう、やはり騎士だけに人間が良くできている。そんなことを思う俺だったが、ヴェルシはベッドへ向かうとニゲルを抱き上げ、ぎこちなく頬ずりし始めた。……ただもふもふしたかっただけらしい。

「超高度魔法のことなんだが」

と、ソールハロツシュが口を開き、俺はそちらへ顔を戻す。

「古い文献に、黒妖精は闇の属性を持つ魔法を使ったと記されているんだ。これはルクス遺跡で気がついたことなんだけれど、もしかすると光は闇があつて、初めて存在しうるんじゃないか？」

「つまり、黒妖精の魔法がないと超高度魔法は使えないってこと？」

と、俺は聞き返す。

するとソールハロツシュは真面目な顔で言った。

「ああ、そうだ。まだ推測の域を出ないが、前の説より現実味があるだろう？」

「んー、どうだろうな」

俺は魔法に詳しくないのでよく分からない。

「黒妖精の中でも強い力を持つ者がいるように、オレたち人間にも強い力を持つ者がいる。それらは対になっているんだ」

その昔、強い魔力を持った人々は光属性である身体蘇生魔法を使っていた。それは現代で言い換えるなら、ソールハロツシュのような天才や俺を指すのだろう。

「『大地』という強力な魔力で阻まれているだけで、黒妖精が闇ならこちらは光……というように、相手がいないと存在できない属性なんだよ」

「じゃあ、仮にユヴァインが闇を使えたとしたら、俺も光が使えるのか？」

「おそらくね。ただ、その出現条件が分からない」と、一息をつく。

しかし、闇がなければ光は存在しないのなら、逆もあり得るんじゃないだろうか？ 違うな、地下の世界には太陽が届かないから……。

「なあ、闇は光がなくても存在できるのか？」

「それはどうだろう……ルアンザに聞いた方が早いな」

そう言っただけ苦い顔をするソールハロツシュ。何だか可哀相なので二人が帰ってきたら俺が聞こうと思った。

「でも、それが当たってたらすごいな。本当に超高度魔法を蘇らせられるなんて」

半ば無意識にぼやくと、ソールハロツシュが俺の目を見た。

「もし出来たとして、マリアドは、身体の蘇生を行うかい？」
何を問いたいのかわからなかった。

「え、だって、俺みたいな強い力を持たないと使えない魔法なんだろう？」

と、思わず聞き返す。

「それはそうなんだけれど……まあ、実際にやってみないと分からないか」

と、何故か自己完結してしまうソールハロツシュ。まったく、何が言いたいのかさっぱりだ。

しかし、聞いたところで答えてくれそうもなかったので、俺は楽

しそうにニゲルと戯れるヴェルシに目を向けた。

「闇の属性？ それって、つまりこれか？」

と、両手を前へ突き出すルアンザ。

「ノクティス！」

急に周囲が薄暗くなり、身体が重くなる感覚がした。動けない。心なしか息まで詰まりそうだ。

ぱっと闇が消えて、ルアンザが俺の顔を見る。

「こういうこと？」

「あ、ああ、そうそう」

と、思わず返す俺だが、すぐに魔女と魔術士に目を向けた。

「初めて見る技ね、あれが闇の力……とても興味深いわ」

「史実と同じだ。やはり闇属性は黒妖精のものってことか」

と、ネネルとソールハロツシュはそれぞれに感心していた。

これなら、さきほどのソールハロツシュの推測通り、俺が光を使える可能性も出てきたわけだ。

同じ事を考えていたらしい彼が、俺へ目で合図する。 これな

ら試せるぞ。

しかし、今この場にはネネルがいて、ヴェルシがいた。無関係の者を巻き込むのは駄目だし、ネネルには絶対ばれたくない。

「闇属性については、また別の時に詳しく調べさせてもらおう。今はあまり時間もない」

と、ソールハロツシュ。

「そうですね。黒妖精がこちらの世界へ来るまでは、あと三日しかない」

と、ニゲルを抱きしめたままヴェルシも言う。

ルアンザは改めて俺たちの顔を見ていくと、明るい声で言った。

「じゃあ、さっそく行ってくるよ。あいつんところに」

と、上を指さす。

誰もが首を傾げそうになり、ほぼ同時にはっとする。

「まさか、あのでかい鳥のところか？」

「うん」

と、特に怖がる様子もなく頷いて、爽やかに笑う。

「だってあいつ、ユヴァインのペットだぜ？ まあ、僕の呼びかけに答えてくれるか分からないけどさ」

そうだったのか。

「ということは、あいつは最初からこの城を狙ってたってわけね」

「確かにこの城を落とされたら、この国は終わったも同然だ」

「人々が混乱に陥るのも予想できるし、世界にも影響が出るでしょう」

「そうだな……」

でもあの鳥、俺の方をじっと見て……見て、たな。見てたよな、あいつ。

「もしかして、俺も狙われてるんじゃないかね？」

苦笑い気味にそう俺が言っていると、みんなが視線を向けてくる。

「確かにあり得るわね」

と、冷静にネネル。

「早く倒すべきだったな」

と、悔しそうにソールハロツシュ。

「いずれにせよ、放置はまずいと思っていた」

と、未だにニゲルを抱きしめているヴェルシ。

そんな彼らの殺気を感じてか、ルアンザが言う。

「見れば分かると思うけど、あいつ、結構手強いよ？」

「手強くてもやらないわけにはいかないだろう」

と、ソールハロツシュが腰を上げた。

するとルアンザがまた言う。

「あと、殺すのは構わないけど、その後でユヴァインに殺されることも覚悟しといてね」

「……」

口を閉じたソールハロツシュがずっと椅子へ戻った。正しい選択

だ。

結局、ルアンザは一人で城の屋上へ向かって行った。

5 いつか

しかし、ルアンザはまったく話を聞いてもらえず、何も情報が得られなかった。

もっというろいろ試すとルアンザは言っていたが、ユヴァイン含む黒妖精に知られるとまずいため、慎重に行動するそうだと。

そして迎えた朝。俺は欠伸を一つして、いつもと同じようにベッドを出た。

あと二日。

「え、何でネネルまで？」

「だってこの子はあたしの見習いよ、一緒に居ないと逆におかしいでしょ」

そう言えばそうだった。ルアンザはネネル付きの魔女見習い。

ルアンザがどこかにやけた顔でネネルの後ろに立っていた。

「そっか、気をつけるよ」

と、俺はネネルへ言った。

「言われなくても分かっているわ」

と、返すネネル。本当に分かっているのかどうか不安だったが、すぐに彼女は小さな声で付け足した。

「ゼーシュの方が何倍もマシってことくらいね」

良かった。きちんとルアンザのめんどくささに気づいていたようだ。

俺は頷きを返しつつ、陽光の当たる床でうとうとしているニゲルを見やった。

「ニゲルは連れて行くのか？」

「ううん、しばらくマリアドに任せるよ」

と、ルアンザ。

「下手に連れて歩いて怪我でもさせたら、ゼーシュが悲しむだろう」

しさ」

「ああ、それもそうだな。分かった」

話が終わると、ネネルがさっさと歩き出した。

「じゃあ、行ってくるわね」

その後ろをルアンザが元気よく付いていく。

「行ってくるーす」

「おう、行つてらっしゃい」

部屋から二人が出て行くのを見送って、俺は息をついた。今日もまた、暇だ。

ヴェルシはりハビリついでに城下町の見回りに出てしまっているし、フュエリは相変わらず掃除洗濯などの仕事優先だ。

どうしようかと思って椅子へ座ると、ニゲルがはっと夢の世界から戻ってきたところだった。頭を振って慌てて誤魔化す様子が愛らしい。

俺も居眠りしようかなんて思っていると、扉が叩かれた。

「どうぞ」

がちやりと開く扉、現われるのは金髪的美青年と美少女。二人一緒に居るところを見るのはこれで二度目だ。

「マリアド、おはよう」

「ごきげんよう、マリアド」

「ごきげんよう、姫」

にっこり微笑み返してフィアンシーナ姫にだけ返事をする。

ソールハロツシュは微妙な顔をしていたが、姫でさえ気にしていない様子だったので無視した。

「マリアドが退屈していると聞いたので伺ったのですけれど、あれは？」

と、ニゲルを指さす姫。

「ああ、ペットです。ニゲルって言って、とても人懐こい魔物なんですよ」

言いながら席を立ってニゲルを抱き上げて姫のそばへ向かう。

姫は少し怯えた様子だったが、ソールハロツシュが平気そうにしているのを見て覚悟を決めた。

「噛みついたり、引つ掻きはしないですわよね？」

「しませんよ」

ニゲルを姫へ差し出すと、姫がぎこちなく両腕を出して抱えた。

暴れるニゲルを俺が支えてやり、どうにかこうにか落ち着くニゲル。
「きゅっ」

「っ、な、鳴きましたわ！」

びつくりした様子の姫だが、だんだんと好奇心が刺激され始める。

「……可愛いですわね、この子」

きらきらと目を輝かせ、見つめ合う姫とニゲル。

その様子に俺がある提案をすると、姫は喜んだ。

「でしょう？ 良ければお貸しますよ」

「え、良いんですの？ でも、フィアンシーナ、動物はあまり好きじゃないのですわ」

そう言いながらもニゲルを手放そうとしない姫様。好奇心にあらがえない様子は、まるで幼い子どもだ。

俺はついおかしくなって、笑ってしまった。

「ええ、どうぞ。ただし、部屋から出さないようにお願いします」

主はルアンザで、俺はただ預かっているだけなのだ。目を離すことはできない。

「分かりましたわ」

そつとニゲルの毛並みを撫でて、俺の引いた椅子に腰を下ろす姫。

その向かいへ座って、俺はそれまで様子を見ていたソールハロツシュにようやく目を向けた。

「で、お前は？」

「オレも、マリアドが退屈していると聞いて、話し相手にでもなるうかと来てみたんだが……」

と、昨日と同じく俺の隣へ腰を下ろす。

「ふうん、別にいいよ」

からかうつもりで冷たく返すと、ソールハロツシュは無言で口を閉ざした。落ち込ませてしまったようだ。

「……冗談に決まってるだろ」

と、決まり悪くなって告げる俺。

姫の腕からニゲルが逃げだし、彼女がいつになくお転婆に後を追う。

ソールハロツシュは、まだ何も言わなかった。ずっと口を閉ざしては、何か考え込むようにどこかを眺めている。その視線が何だか嫌で、こらえきれずに俺は言った。

「すべてが終わって、俺がこの世界を救って……その後、俺はどうなると思う？」

はっとしたようにこちらを見て、少し悲しそうに彼が答えた。

「神様の元に帰るんだろ、違うかい？」

「……分からない」

と、俺は思わず俯いた。

ぱたぱたと室内を駆ける姫。ニゲルが時々、楽しそうに鳴く。

「自分でも、どうなるのか分からねえんだ」

「……そう」

ソールハロツシュは悲しいとか、寂しいとか、そういった言葉を口にしなかった。俺はそれが聞きたかったのに、何故だか言ってくれない。

「それだけかよ」

「だって、オレがどうこう言ったって、仕方のないことだろう。分からないなら、なおさら何も言えないよ」

「……そうだな」

無意識に溜め息が出た。

それから、ソールハロツシュがまた遠い目をして言う。

「それに、マリアドをものに出来るなんて、最初から思ってもないからね。いずれ別れが来るのは、最初から分かったことさ」

やっぱり彼は大人だ。悔しいくらいに、俺よりも大人だ。

「……それとも、やっとオレの気持ちが伝わったのかな？」

と、ふいにいつもの優しげな笑みを貼り付けて、彼が俺を見た。そんなところがまた大人にしか思えなくて、イラツとした。だから俺は言い返す。

「んなわけねえだろ！ 誰がお前なんか！」

ははは、と、ソールハロツシュがおかしそうに笑う。彼もまた、何かに葛藤しているはずなのに。

「でも……すべてが終わる前までに、ちゃんとした答えを聞かせて欲しいな」

と、真剣なまなざしをするソールハロツシュに、やっぱり俺は何も返せなかった。答えなんて、俺の心の奥の方にしか存在しなくて、それを取り出すだけの勇気がまだない。

それでは駄目なのだと、フユエリに言われた言葉を思い出す。

『ソールハロツシュ様の気持ちに、きちんと応えていたきたいんです』

『そして、他の方たちの想いにも気づいていただけたら……』と

俺は意気地無しだ。ヘタレだ。自分の立場さえきちんと理解していないくせに、偉そうなことばかり言って、結局何も出来ない弱虫だ。

自覚があるだけにさらに辛くて、答えを後回しにした。

「……いつか、な」

6 みんなとの距離

「これがゼーシュの部屋の鍵だ」

と、ヴェルシはルアンザにそれを手渡した。

「何かあったら、すぐにあいつを連れて逃げる。いいな？」

「……うん、分かった」

ぎゅっと鍵を握りしめて、服のポケットへしまいこむ。

黒妖精が現われると言われた二度目の期限が、明日に迫っていた。

「ユヴァインが直接現われるかどうかは別としても、防御結界が破られるのは時間の問題だものね」

と、ぼやくネネル。

「ここはやはり、ユヴァインの実力が知りたいところだな」

と、ソールハロツシュ。

魔女と魔術士は互いに喧きあつては、いつまでも結論を出せずにいた。

「どんなに実力があつたとしても、あいつ一人でやるわけじゃないでしょう？」

「それはそうだが、黒妖精の頂点に立つ者を知らないのはまずいだろう？」

そんな言い合いにも飽きてきたのか、ネネルが彼を睨んだ。

「だいたいねえ、何であんたはいつも偉そうなのよ？ あたしの方が先に宮廷魔女になったのよ」

どうでも良さそうな会話だ。

「たった一年だけだろう？ それに、年齢はオレの方が上なんだから良いじゃないか」

「そーいうことじゃないでしょ！ っていうか、前々から言おうと思ってたんだけど、あたし、貴族って好きじゃないのよね」

「ああ、そうかい。公爵でもあるオレを敵に回そうというのか？」

「敵よ、あんたは最初から敵よ！ 女の敵！」

ヒステリックな声を上げるネネル。

やれやれ、誰かが止めに入らないとまずそうだ。

「落ち着けよ、ネネル」

仕方なく彼女の方へ行って肩に手を置いた。

するとネネルは、何を思ったのか俺まで巻き込もうとする。

「マリアド、あんただってそう思うでしょう？　何か言ってやりなさいよ」

「え……そう言われても、なあ」

ソールハロッシュの顔を見て、俺は何を言うべきか考えた。しかし、何も思い浮かばない。

「つつーか、今は喧嘩してる場合じゃないだろ」

「このあたしに抵抗する気？」

「いや、そうじゃなくて」

困ったな。ネネルの機嫌をどうにかしないと。

「何とでも言うがいいさ。オレは気にしてないから」と、席を立つソールハロッシュ。

「おい、ソール！」

思わず呼び止めようと腕を伸ばすと、ネネルに袖を引っ張られた。「放つときなさい、あんな変態」

そう言われても困るだけで、俺は部屋から出て行く彼を呆れまじりに見送る。

扉が閉まったところで、半ば無意識に溜め息をついた。

「ねえ、マリアド」

「何だよ」

仕方なく彼女の隣へ腰を下ろし、顔を向けた。

「もしも明日、何かが起こったとしても、あんたはまだその力を使うべきではないわ」

「……分かってるよ」

場合によるとは思ったが、言い返すとまた機嫌を悪くされそうなのでやめた。

「マリアドは確かに救世主だけど、その力をいつ使うのかは、あたしたちが決めるべきだわ。この世界に生きる者として、ね」

「うん」

ネネルの言葉は正しかった。俺がむやみやたらと魔法を使うのは良いことではない。反対に俺が世界を滅ぼしかねないだけに。

「だから、その時まで待つてるのよ。世界が消えてなくなる直前で、何が何でも魔法は使っちゃ駄目」

「……うん」

でもきつと、俺は彼女の言葉を無視したくなるんだろう。だって、明日何が起こるかなんて、誰も知らないのだから。

「何となく、分かってきたことがあるんだ」

聖堂の裏庭で、たくましく育つ花々を眺めていた。

「たぶん俺は、俺でしかないんだって。男とか、女とか、そういうつたものに拘るのはもうやめて、俺は俺を受け入れるだけで良いんだって」

隣で静かに聞いてくれるジャスナ。

「でもそうしたら、俺はきつと、本当の意味で前世を捨てることになる」

異世界だと思って今までやって来たことが、そもそもの間違いだったのだろう。

「だから俺は、フユエリに言われちゃうんだ。もっと素直になれって」

風に吹かれて揺れる花。まるで鏡のように、青く澄んだ空。

ただ俺の言葉に耳を傾け、何も言わずにいるジャスナがありがたかった。

「前世のことなんてちつとも覚えていないのに、ずっとそれに縛られてた。おかしいよな、俺って」

「……そうですね、おかしいかもしれません」

と、ジャスナ。

「ですが、前世があることを知っているのは素晴らしいことです。わたしでさえ、その存在は疑ってしまいますから」

「……そっか」

神様のことも、そろそろ許してやらなくちゃいけない。そして、すべて受け入れなくては。

足元の草を踏んで、一歩前へ行く。

「これから俺、もっと素直になるよ。自分に正直になって、みんなのことも考え直す」

ネネルとかヴェルシとか、フエリ、ゼーシュとルアンザに、ソールハロツシュ。そしてジャスナ。

「それでせめて、俺だけでも笑っていようと思う。出来るかどうかは、分からないけどさ」

少し苦笑してみせると、ジャスナがにっこり微笑んだ。

「応援します、マリアド様」

俺はこの世界に生きる人間で、ちよつと他と違うだけで、ちよつとまだ成長途中ではあるけれど、まだ時間はあるはずだから、ちよつとずつでもいいから前進していこうと思う。

立ち止まって空を見上げると、太陽が少し傾き始めていた。

「あ、そうだ」

くるつと彼女へ振り向いて、俺は言った。

「ジャスナも、あまり無茶しないようにな」

はつとして、恥ずかしそうに少し俯く。

「……はい、分かりました」

彼女も他とちよつと違うから、俺と似ている。だから俺は、彼女にならどんなことだって話せる。

そんなことを考えつつ、ジャスナの頭にそつと手を置いた。

「ジャスナがまた倒れたりしたら、巫女長やネネルが心配するからな」

「……はい」

少し困ったように頷く彼女へ、にこつと笑った。

「それは俺だつて同じなんだけどな」

そしてまた、歩き出す。

「マリアド様！」

慌てて後を追ってくるジャスナ。今だからこそ感じられる平和が、何故だかとても愛おしかつた。今しかないと分かっていたから、俺もジャスナも笑っていられた。

きつと彼女には、きちんと伝えなきゃいけないことがある。それをどんな言葉で表すべきか分からなくて、ふと足を止めてしまう。

ジャスナが俺を見て、首を傾げた。

「どうしました、マリアド様？」

「ああ、いや……」

彼女の顔を見られずに、その先の遠い空へと視線をやる。

「ジャスナは……その、あんまり嬉しくないかもだけど、本当に妹みたいで、可愛いなと思って」

「……い、妹だなんてそんな、わたしには恐れ多いですっ」

わたわたと両手を胸の前で振る。

そんな彼女へ、俺はまた笑って言った。

「それと、俺に気を遣うのも程々にしていいよ。名前だつて、呼び捨てで構わないし」

「え、そんな……っ」

あからさまに戸惑うジャスナ。落ち着かない様子でその辺をうろろしては、ちらつと俺を見て息をつき、またうろろしては、元の場所へ戻ってくる。

「分かりました。そ、その……これからは、マリアドお姉様と呼ばせていただきますっ」

やっぱり俺は、女として見られていたらしい。心の中だけで苦笑して、俺は頷いた。

「うん、それでいいよ」

少しずついい、少しずついいから、みんなとの距離を埋めていこう。

7 二度目の期限

「で、フユエリはあいつのことどう思ってるの？」
「は？」

目を丸くするフユエリへ、俺はもう一度問いかける。

「ソールハロツシュのこと、どう思ってるんだよ？」

夕食の片付けをしながら彼は答えた。

「ああ、それはですね……何と言いますか、好きでしたよ。憧れの方でしたし」

「今は？」

「え、今ですか？」

と、俺にちよつと呆れた顔をして見せる。

構わずに俺は返答を待った。

「その……今は、ただ応援しております。ですので、私は他の方を探しているところですね」

「ふうん、そうか」

フユエリはそこまで彼に夢中だったわけでもないらしい。

「納得した、ありがとうございます」

きつと彼はミーハーで、俺が考えていたほど真面目な奴じゃないのだろう。とても良い奴だけれど、恋愛においては平気で浮気をするかもしれない。そう考えてしまうと、ちよつと彼を嫌いになりそうだ。

考えを振り切って俺は彼へ返した。

「じゃあ俺も、お前のこと応援してるわ」

「あ、ありがとうございます」

と、どこか戸惑うフユエリ。　　そういえば彼は、俺のことをどう思っているのだろう？

ふいに気になって、尋ねてみた。

「ところで、お前は俺のこと、どう思ってる？」

「え？ それは……えーと、そうですね」

何故だか悩み始めるメイド。さっさと答えるよ、と言いたかったがやめた。

「その、私はどちらかというと中性的な方が好みなので、マリアド様にはとても魅力を感じます。ですが、やはり実際に交際をするとなると話は違ってきてまして……」

「で、つまり？」

「つまり……その、マリアド様はどうも受け身のようなので、同じく受け身の私としては、相性が合わないかと」

あれだ、フュエリはやはり抱かれないタイプなわけだ。誰かに抱かれないのだから、俺では駄目というわけ。

「あと、それに加えてマリアド様には」

と、何か言いかけてはつとするフュエリ。

「いえ、何でもありません。聞かなかったことにして下さい」

と、片付けをさっさと終わらせ、部屋を出て行ってしまふ。

何なんだ、あいつ。悪口だって俺は聞いてやるつもりだったのに、おかしい人だ。

それから風呂に入って、のんびりとこれまでのことを考えた。

そして、これからのことを考えた。

夜が明けて、太陽が昇る。

「おはようございます、マリアド様」

「うん、おはよう」

いつものようにベッドを出て、今日も動きやすい服を身につける。窓のそばへ寄って、城下町を見下ろした。幸いなことに、特に変化は見られなかった。

それからフュエリの運んできた朝食を食べた。

何とも気分が落ち着かなくて、そわそわしてしまう。

フュエリも同じなのか、俺の食事が終わるまで何度も窓外に目を

やっていた。

朝食を終え、俺は席を立った。

「ちよつと国王のところ行ってくる」

てきばきと片付けをしながらフユエリは言った。

「かしこまりました。どうかお気を付けて」

「おう」

廊下へ出てしばらく歩いていると、前方に小さな人影が二つ見え
てきた。

「おはよう、ネネル、ルアンザ」

先に声をかけてやると、二人は俺の前で立ち止まる。

「おはよう、マリアド。こんな時間にどうしたの？」

ルアンザが相変わらず元気に「おはようございますっ」と、言う。
「国王に話を聞いてこようと思ってさ」

「そう言うと思った。迎えに来て正解だったわね」

と、ネネル。しかしその手には白いローブが握られていた。

「……まさかそれ、着るのか？」

苦笑いを浮かべて尋ねると、宮廷魔女はにっこり笑う。

「当たり前でしょ」

「……分かったよ」

仕方なくそれを受け取って、いつものように羽織った。

城内はやはりざわついていて、誰もがみんな、そわそわしている
ようだった。

「ここが襲撃されたり、魔物が襲ってきた場合は、すぐにゼーシュ
を連れて逃げるのよ」

と、俺の前を歩くネネルがルアンザへ言う。

「了解っ」

「そして街の西外れにある、あたしの実家にかくまってもらいなさ
い。場所はこの前教えたから分かるわよね？」

「大丈夫、任せて」

と、頼もしい返事をするルアンザだが、その様子が逆に不安をか

き立てた。

「あと、ニゲルも忘れずに連れて行きなさいね」

「分かってるって」

ネネルが溜め息をつく。どうも能天気な返事だった。

俺はただ苦笑して、相変わらず豪華絢爛な廊下の装飾を眺める。

窓から差し込む朝の光に反射して、美しい花瓶が花をいつそう輝かせる。足元を彩る絨毯も綺麗で、ふかふかだ。

ふと顔を上げると、ルアンザが急に立ち止まった。

俺とネネルがどうしたのかと思った直後、窓の外を見慣れた姿が急降下していく。

「来た　！」

あのでかい鳥が前庭へ降り立ち、砂埃が舞う。

ルアンザが来た道を戻り始めて、ネネルが叫んだ。

「死ぬんじゃないわよ！」

「了解！」

突然訪れた場面にも、ルアンザは明るく返してゼーシュを助けに向かう。

「あたしたちも行くわよ」

「おう」

はっとして、走り始めたネネルを追った。胸がときどきしていた。

城外の悲鳴が耳をつんざく。

でかい鳥のはばたきで前庭に面する窓ガラスがすべて割られていた。

騎士たちが駆け回り、メイドたちが逃げ場所を探して惑う。城下町はきつと、悲惨な状態だ。

国王たちが集まっている謁見の間まで、もう少しだった。

この階段を上げれば、あとは廊下を真っ直ぐ行くだけに、それに、背後で響いた轟音に気を取られてしまった。

「うわっ」

思わず振り向いてしまつて後悔した。二股の尾を持つ大きな狼が城内を破壊していたのだ。

「何してるの！」

ネネルに腕を引つ張られ、慌てて謁見の間へ向かう。

不安でどきどきする心臓を抑えながら、やっとの思いでたどり着くと、そこでは国王たちが玉座についていた。

「陛下、城内に魔物が侵入してきました！」

そう言つたネネルを、国王は手で制した。

「分かつている」

それなのに何故逃げない？ 俺が思わず声を上げようとした時、床が揺れた。城がどんどん破壊されていく！

ネネルに視線をやると、彼女は首を横に振つた。この状況でも俺は、魔法を使つてはいけならしい。

もどかしくて、唇を噛む。

そこへ駆けてきたのはソールハロツシュだった。

「ご無事ですか、陛下！」

その彼をも手で制し、玉座から腰を上げない国王。

ソールハロツシュは何か理解すると、俺たちを見た。そして杖を構える。

ネネルも杖を手にとると、国王たちを背にした。俺もまた、彼女たちを守られる位置にいる。

「俺は、どうしたらいい？」

「生き延びなさい、その為には逃げたつて構わないわ」
ただ、それだけだった。

8 ユヴァイン

謁見の間に現われたのは、鋭い爪を持った鳥型の魔物数匹と、ユヴァインだった。

「おやおや、みなさんお揃いで。なんて都合の良い奴らなんでしょう」

にやにやと嫌な笑みを浮かべたまま、ゆっくり歩み寄ってくる。魔女と魔術士は何も答えなかった。

漆黒の髪を持つ黒妖精は、部屋の中央で立ち止まった。そして真っ直ぐな視線を俺へ向けてくる。

「久しぶり、マリアド。また会えるなんて嬉しいよ」

心から言っている言葉ではないことくらい、すぐに分かった。

俺はただ口を閉ざし、相手の様子を伺う。

「あれ、無視するの？ ひどいなあ」

さも心外そうにして、ユヴァインは笑った。

「さあ、やっちゃって！」

鳥たちが一斉に暴れ出す。柱を壊し、炎を吐いて、ネネルたちに狙いを定める。

「アキユア！」

勢いよく放出された水に鳥たちは一度退散するが、すぐに舞い戻ってきた。

そこへソールハロツシュが生成魔法を放つ。

「ヴェントス・エ・イグニス、スファエラ！」

しかし無駄だった。宙を舞う鳥たちは軽々と攻撃を避け、小さなネネルに爪を立てる。

「小さいからってなめんじゃないわよっ！」

と、杖を振り回して追い払うネネル。

その隙にソールハロツシュが炎を使ってダメージを与える。

ユヴァインはしばらくその様子を見ていたが、また俺の方を見て

微笑んだ。

「本気、出しちゃえばいいのにねえ？」

皮肉だった。宮廷魔術士といえど、空を飛ぶ相手と戦ってすぐに勝てるわけもない。

フィアンシーナ姫と王妃が手を取り合う。国王はただ、堂々としていた。

逃げたって構わない。

ネネルに言われたことを思い出し、俺は一步だけ、横へずれた。

「マリアドはおれが相手してあげるよ」

と、近づいてくるユヴァイン。

そつと、そつと逃げる隙を探す俺。

「もちろん、嫌がったりしないよね？」

「……」

ユヴァインは嫌いだ。ソールハロツシュよりも遙かに、それはもう比べものにならないくらいに、嫌いだ。

「大丈夫、今日は殺さないよ。お楽しみは後に残しておかなくちゃ」

もう一步、横へ。

構わずに距離を詰めてくる黒妖精。

そしてもう一步、逃げる。後ろへ、横へ、壁際へ。

「ねえ、何か言ってるよ」

「……お前に言うことなんか一つもない」

と、相手を睨んだ。

ユヴァインはおかしそうに笑うと、両手を突き出して魔法を唱えた。

「ノクティス・グラヴィタス」

がくつと、その場にいる全員の力が抜けた。

動けなくなつて床へ膝をつく。……重い。透明な圧力で潰される

ような身体の重さだ。

あつという間にネネルが鳥たちの餌食になり、ソールハロツシュが杖を振り回すも空振りに終わる。

ユヴァインは俺の前まで来ると、しゃがみこんだ。

「このまま犯してやっても良いんだけどさ、長時間はさすがにきついんだよねー」

そして急激に解き放たれる。

はつと息を吸う俺の顎を掴んで、ユヴァインが唇を重ねてきた。

息苦しくて抵抗するが、後頭部にもう片方の手が回されていて離れられない。前回と違って、濃厚なキスだった。

一体何が目的なのか、まったく分からなかった。自分が男であるのを良いことに、力でねじ伏せようとも言うのか？ そんなのめんだ！

「……どう？ 気持ちよかった？」

俺は言葉を返さなかった。ただ呼吸を整えて、ユヴァインの暗く濁った目を見据える。

「そんな恐い目で見ないでよ。逆に燃えちゃうよ、おれ」
腹立たしい。

ユヴァインの背後で鳥たちが床へ落ちていくのが見えた。ソールハロツシュがネネルの名を呼び、こちらへ憎しみの目を向ける。

「ああ、そうだ。忘れるとこだった」

と、ふいに立ち上がるユヴァイン。

「国王に王妃、そして姫様、逃げるなら今の内だよ？」

がたつと席を立ちそうになる二人を国王が止め、ユヴァインが両手を向ける。

「ダーテ・ニーグラスピナ」

黒い棘が三人を襲い、抵抗する間もなく玉座にはりつけにされた。

鮮血が白い大理石に滴る。三人はもう、動かない。

残酷だなんて思う暇もなかった。

すぐにユヴァインという名の狂気が再び俺に向けられた。

「さあ、これでやっと楽しめる。もう抵抗する気もないかな、マリアドちゃん」

呆然とする俺のローブを脱がせ、力任せに押し倒す。

「……っ」

彼の言う通り、俺にはもう、抵抗するだけの力がなかった。
ユヴァインの冷たい手が身体を愛撫する。その気持ち悪さに吐き
気を覚えても、俺は動けなかった。

「イグニ・プルウエア！」

炎の雨がユヴァインの背を直撃し、手が止まった。
冷め切った顔で振り返り、ユヴァインが宮廷魔術士へ言う。

「何、まだ生きてたの？　しぶといなあ、まったく」

「マリアドから離れる！」

ソールハロツシュの声は明らかに息切れしていた。きっと身体は
ボロボロだ。

「嫌に決まってるじゃん。だいたい、今の状況分かってんの？」

「……いいから、離れろっ！」

足音が床を伝わって聞こえてくる。近づいてくる。

そういえばこの床、こんなに冷たかったわけ？　いつも足で
踏んでるだけだから、知らなかった。

「あーもう、うるさいなあ。分かったよ、おれ優しいから、どいた
げるよ」

と、俺から離れて立ち上がるユヴァイン。

衣服を直す彼を警戒しながら、ソールハロツシュが俺の方へ来る。
「マリアド」

そつと俺の頬に触れて、優しく撫でる。

その温もりがすぐ心地良くて、涙が出そうになった。ぎゅっと
ソールハロツシュに抱きつきたかったけれど、そんな余裕はなかつ
た。

杖を手放した彼の手が、俺の乱れた服をぎこちなく直す。

「逃げろ」

と、彼が俺を起き上がらせて言う。

そして支えられるまま立ち上がり、俺はそこに広がる惨状に声を

失う。

血溜まりの中で横たわっているネネルと、鳥たちの死骸。駆けつけたと思しき騎士たちも、折り重なるようにして死んでいた。

「逃げるんだ、マリアド」

ソールハロツシュが俺の前へ立って、俺は動かない足を無理矢理動かした。

「……人間って愚かだなあ。ふふ、笑いが止まらないよ」

壁に手をつきながら扉を目指す。

「おれがマリアドを逃がすわけないじゃん。イグニフェル」

暗い炎が俺の行く手を塞いだ。これでは前へ進めない……！

後ろを振り返って逃げ場所を探す。

「モンス・イグニフェル！」

「カヌス・アキュア」

溶岩は灰色の水に押し流されて消えた。圧倒的な差を見せつけられて、ソールハロツシュが後ずさる。

「じゃあ、これで終わりね」

と、ユヴァインは言うつと、ソールハロツシュに空気の剣を向けた。

「ヴェントス・フェロ」

目に見えない切っ先が彼の心臓を突き刺し、貫通する。

「……っ、ソール！」

駆け寄りたかったのに、足が動かなかった。それどころか俺はその場にくずおれて、床に膝をついてしまう。

ソールハロツシュもまたその場に落ち、ユヴァインが両手を降ろす。途端に染め上げられる魔術士のローブ。

「あー、ちよつとやりすぎたかなあ。まあ、目的は達成したし、いいか」

と、ユヴァインは呟くと、俺へ笑顔を向けた。

「またね、マリアド」

こつこつと足音を響かせて歩き出すユヴァイン。大人しく待機していた狼に手を伸ばし、共に遠ざかっていく。

「……」

魔法を　　そうだ、魔法を使って、あいつを、あいつを殺さなきゃ。

両腕を上げてユヴァインの背に手の平を向ける。

「……」

あれ、でも何て唱えたら良いんだっけ、分からない。黒妖精は、闇の属性を使うから……だから、そう、闇と対になるのは光。

呼吸を一つして、両手を重ねた。

ぎゅっと両目を閉じて、想う。今なら出来るはず、俺の持つ魔力なら、きっと……。

そしてどこから響いてきた言葉を、口にした。

「　　ヴィヴィフィカ」

9 代償

覚えているのは、不透明な白がどこまでも続く景色。感覚はどれも麻痺して、ただ流れていく白を見つめていた。

突然、誰かの声がして、俺は現実を思い出す。……そうだ、帰らなきゃ。

「ようやく目が覚めたみたいね」

ネネルの声だ。

「ここがどこだか分かる？ マリアド」

ああ、分かるよ。俺がいつも見ている部屋だ。手入れの行き届いた綺麗な部屋の、綺麗なベッド。

そつと顔を横へ向けると、彼女の大きな胸が見えた。

「……みんな、は？」

「大丈夫、漏れなく全員ぴんぴんしてるわ」

あれ、だけど俺、みんながユヴァインに殺されて……ネネルが、生きてる？　じゃあ、ここはまさか天国　？

「あんたのせいだからね。あんたが超高度魔法なんて使うから、みんな生き返っちゃったのよ」

「え？」

視線を上に向けてネネルの顔を見る。

「ソールハロツシュから全部聞いたわ、だから何も言わないで」

彼女の身体には怪我一つ無く、まるであの時が嘘みたいだった。

これが身体蘇生魔法の力、古の光の魔力か。

ああ、良かった。

溢れ出た涙が頬を伝ってシーツに落ちた。

「……ちよつと、泣くことないじゃない」

ネネルが呆れたように微笑んで、ただ俺を見ている。

外から賑やかな音が聞こえてきた。明るい人々の声と、何やら大

きな物を動かすような音。

「どうやら、あんたは城内だけでなく街の人々まで回復させちゃったみたいね。そのせいで、二日間も目覚めなかった。無茶なことをした代償よ」

「……そう、だったのか」

知らなかった。超高度魔法に代償があるなんて。

「……後悔してたわ、あいつ。ちゃんと教えとけば良かったって」
「うん……」

でも、きっと俺はそれを知っていても、こうなることを選んだだろうな。

ネネルが溜め息をつき、椅子を立つ。

「食欲はある？ 報告するついでに頼んでくるけど」

「……うん、ありがとう」

俺がにこつと笑うと、ネネルは満足げに部屋を出て行った。

ルアンザとゼーシユは無事にネネルの実家にたどり着き、今はそこで居候させてもらっているらしい。

魔物たちの姿もすっかり消えてなくなり、街全体が平和な状態だった。

「他の騎士もそうだけど、ヴェルシはまた魔物の討伐に出て行ったわ。最も、この周辺の魔物は昨日で倒しつくしたそうだけ」

フュエリにスープを食べさせてもらいながら、ネネルの話を聞いていた。

「国王たちも元気にしてるわ。今は城の復興や国内の状況について会議してる」

「……ソルは？」

細かく切られた肉を汁と一緒に飲み込んで、尋ねた。

「あいつも国王と一緒に会議に参加してるわ。魔術士として、公爵として、出来る限りのことをするって」

そっか……みんな、忙しいんだな。

「聖堂は奇跡的に無事だったわ。あんなことがあったから、巫女たちは一所懸命に祈り続けているわね」

「そう」

結局、俺だけが何もせずに眠り続けていたらしい。これじゃあ、救世主失格だな。

思わず落ち込んでしまうと、ネネルが言った。

「分かっていないようね、マリアド」

「？」

目をあげて疑問に思う。

「あんたがみんなを生き返らせたおかげで今があるのよ。言い換えると、あんたがあの時魔法を使わなかったら、この国は完全に終わってた」

「……ああ、そうか」

じゃあ、俺、少しは良いこと出来たってことかな？

「あんたが生きてて、良かったわ」

まだ意識のはっきりしない感覚はあるけれど、生きている感覚は嫌になるくらい実感していた。シーツの感触や室内の匂い、彼女の高い声とスープの温かさ。指が動き、首が回り、口が開ける。確かにそこにあるものが、この目で見て取れる感覚。

「……うん」

フュエリに最後の一口を口に入れてもらって、飲み込んだ。

「ありがとう」

と、彼に感謝を伝える。

するとフュエリも、にっこり微笑んでくれた。

「それで、これからどうするんだ？」

と、再びネネルへ顔を向けた。

「とりあえず、この城から出ようかと思うわ。両親も心配してるし、あの子たちもあっちにいるし」

部屋の窓はすべてガラスが割れて使い物にならなくなっていた。室内を掃除した跡はあるが、壁や天井に亀裂が入っていて、いつ崩

れるか分からない。

城内にはもつと他に、破壊された箇所が数多くあるのだろう。

「もちろん、あんたも連れて行くつもりよ」

「……うん」

あの時のことを思い出しそうになって、気分が悪くなった。胃に入れたばかりのスープを吐き出してしまいそうだ。

思わず胸を押さえた俺を、ネネルとフュエリが心配そうに見つめた。

「大丈夫ですか？」

と、俺の背中に手をやるフュエリ。

頭の中に浮かぶのはみんなが動かない光景と、不敵に笑うユヴァイン。大理石の床の冷たさに混じる、血の匂い……。

狂った笑い声が急に耳元で鳴り響き、今度こそ吐き気を覚えた。

両手で口を押さえて抗ったが、逆流してしまう。

あまりの気持ち悪さに耐えきれず、すべて吐くと、布団を異臭が埋めていった。

フュエリはただ俺の背中をさすってくれていた。その優しさに涙が溢れ、何が何だか分からなくなってくる。

「……しばらく療養した方が良いわね」

と、ネネルの静かに呟くのが分かった。

その夜、フュエリは俺の荷物をまとめてくれていた。

「……フュエリは、俺と一緒に行くのか？」

椅子に座ってぼーっとしながら尋ねると、彼は手を止めずに答えた。

「いえ、私はここに残ります」

「何で？」

てきぱきと服や靴、その他必要なものを鞆に詰めていくフュエリ。

「メイドの多くが仕事を辞めて故郷へ帰ってしまったのです。だから今、この城は人手が足りていません」

「……そうなのか」

「はい。ですから、私はこの城のメイドとして、最後まで従事させていただくつもりです」

それは正しいことだと思った。

「そうか、それで良いと思うよ」

「はい……ありがとうございます」

フュエリとはしばらく会えなくなるけれど、不思議とその寂しさを俺は受け入れられた。

「どうか、気をつけて」

「それはこちらの台詞ですよ、マリアド様」と、にこり笑う。

おかしくなって、俺も少しだけ笑った。

10 街外れの家

歩いて行ける場所なのに、俺の体調が思わしくないので馬車で移動していた。

街の至る所が破壊されていたけれど、そこにいる人々は皆、明るい顔で作業を続けている。

広場を南へ進み、大通りを右へと曲がる。

「こっちの方に来るのは、初めてだな」

窓外の景色に目をやったまま呟くと、ネネルが笑った。

「そうでしょうね、この辺りは住宅街だから」

路地裏にはごちゃごちゃしたアパートが建ち並び、時折屋台が流れていく。

色んな食べ物の匂いが混ざり合って、俺は窓を閉めた。

「気持ち悪い」

「あんだ、神の使者じゃなかったら、きっと死んでたわね」

と、呆れるネネル。

それは冗談ではなく本当のことだった。俺でさえこんなものだから、古代の人々の気が知れない。

「まあ、外れの方はのどかだから、ゆっくり休めると思うわ」

まるで姉のように優しい口調で言われ、俺は頷いた。今は体調を整えることが優先だ、三度目の期限まではもう長くないのだから。

広がる畑は魔物に踏み荒らされたようで、痛々しい光景になっていた。

「マリアドさん！」

と、馬車を降りた俺に駆け寄ってくるゼーシュ。

「ゼーシュ、久しぶりだな」

「はいっ、マリアドさんがお元気そうで何よりです」

相変わらずの彼女に、俺は「ありがとう」と、笑みを返す。

そして歩き出そうとすると、ネネルが腕を差し出してきた。

「捕まらなくて大丈夫？」

「……大丈夫だ」

と、思わず見栄を張る。

一歩踏み出して歩きだしたが、今度はゼーシュに腕を差し出された。

「ゆっくり行きましょう」

「あ、ああ、ごめん」

どうやら俺の歩みは見ていて危なっかしらしい。ちくしょう、悔しいな。

そして少し歩くと、一軒の民家にたどり着いた。

「ただいま」

と、ネネルが扉を開けた途端、駆けてきたニゲルが俺へ飛びつく。
「おわっ」

バランスを崩しそうになる俺をゼーシュが支え、無事に胸の中に収まったニゲルが嬉しそうに鳴いた。

「きゅっっ！」

「こら、ニゲル！ って、大丈夫か？」

と、後から駆けてくるルアンザ。

「ああ、ゼーシュのおかげでどうにか」

と、俺は困りながらも苦笑した。

その後ろからネネルの父母と思しき中年の男性と女性がやって来て、にっこり笑う。

「よく来たね、さあ中に入りなさい」

「娘から話は聞いてるわ、どうぞ楽にしてちょうだい」

「あ、はい……ありがとうございます」

そして中へとお邪魔する。

ネネルが一般家庭に育ったことは知っていたものの、思ったよりも大きな家だった。

「まずは部屋、案内するわね」

と、階段をさつさと上がっていくネネル。

その後をルアンザとゼーシュに支えられながら追う。ニゲルもまた、後ろから付いてきていた。

階段を上りきると、左右にいくつかの扉が見えた。

「ここが僕たちの部屋だよ」

と、ルアンザが指さすのは、手前から数えて二番目の左側にある扉だった。

そこを通り過ぎて、ネネルが立ち止まったのは一番奥の部屋だった。

「マリアドの部屋はここよ。昔、あたしが使ってた場所ね」

取っ手を引いて開けると、シンプルなベッドが目に入る。

室内に足を踏み入れて、鞆をその辺に置いた。宿で言うところの広い個室だ。

「あたしは隣の部屋にいるから、何かあったら呼んでちょうだい」と、壁の向こうを手で示すネネル。

ベッドの座り心地を確かめてから、俺は顔を上げた。

「うん、分かった」

ゼーシュとルアンザが俺の両隣を占領し、ニゲルが膝の上へ乗っかってくる。

「しばらくこの部屋でのんびりしてなさい。部屋から出たくなければ、食事は運んであげるわ」

「うん、ありがとう」

ネネルは口を閉ざすと、窓の外を指さした。

「ちなみに、あっち側に見えるのがヴェルシの実家よ」

その向こうに見えるのは、青い屋根の立派な屋敷だった。

「素敵なお家でしょう？ あの子、貴族とは違うけど、代々王家に仕える家系なのよ」

「ああ、なるほど」

あれほど立派な家である理由が分かり、納得した。だからヴェルシも騎士として、王家に仕えているのだろう。

「他に何か聞きたいことはない？」

「うん……大丈夫、かな」

と、俺が答えると、双子が同時に言った。

「何かあれば僕がお助けします」

「何かあれば僕が助けてやるぜ」

二人揃うと騒々しい。

「だそうだ」

と、ネネルへ苦笑を向ける俺。

彼女も苦笑いを見ると、部屋を出ていった。

「それじゃあ二人とも、よろしく頼むわね」

この辺りは穏やかだ。空気も気のせいかな澄んでいるように感じられるし、街の喧噪も聞こえない。

「うん、美味しい」

と、ネネルに運んできてもらった夕食の感想を言う。

「でしょ？」

自慢げにする彼女がおかしくて、思わずにやける。意外に母親っ子みたいだ。

「何笑ってるのよ」

「いや、何でもないさ」

自分のペースで食事に集中する。少しずつではあるが、食欲も回復してきていた。

ネネルは俺から視線を外すと、そつと窓際へ寄った。

開けっ放しだったカーテンを閉めて、夜の冷気を遮断する。そしてまた、俺の方へ。

「彼らは、どうやってこの世界を滅ぼすつもりかしらね」

と、憂鬱そうに呟く。

俺は何も答えなかった。無視したのではない、返す言葉がなかったのだ。

「あいつの連れている魔物も半端じゃない強さだし……次こそ先手

を打たなきゃ」

「……そうだな」

何か良い案があればいいけれど、今のところは為す術がない。

ネネルは溜め息をつく、調子を変えた。

「まあ、いいわ。あんたはとにかく、体調を戻しなさい。それから考えましょう」

「おう」

そつと開く扉の音。次に軋む床の音。

もそもそと寝返りを打ったら、何かのしかかってきた。

「……おっぱい揉んじゃうぞ？」

ぱちつと両目を開けてはつとする。

「ルアンザ……っ」

「おはよう、マリアド」

にこつとする彼の下にいるのは紛れもなく俺で。他人が見たら明らかに勘違いされる体勢だった。

「……おはよう」

ルアンザを退けるように起き上がり、両腕を上げて伸びをした。

ああ、眠い……。

ベッドを下りたルアンザがカーテンを勢いよく開けた。途端に外光が差し込んできて眩しい。

光から顔を背け、欠伸をした。

「で？」

ルアンザは俺のそばまで来ると、こそつと耳打ちをする。

「ゼーシュがすげーの見つけたんだ」

「すげーの？」

疑問符を浮かべて相手を見る。

「うん。でかいから連れてこれないんだけど、マリアドに一番に知らせたくてさ」

と、あどけない笑顔を浮かべるルアンザ。

「……ふうん」

あまり興味も沸かなかった為、俺はまた欠伸をする。するとルアンザに腕を引っ張られた。

「来て」

「え？ あ、ちょ、おい！」

ベッドから無理矢理出され、手を引かれるがままに部屋を出た。裸足だった。

階段を駆け下りてそのまま外へ。

「あら」

花に水をやっていたネネルの母の横を通り過ぎ、裏へと回った。そこから木々の並ぶ、林だか森だか分からない道を進んで、ようやくルアンザが立ち止まる。

「連れてきたぜ！」

「ルアンザ、マリアドさんに無理させちゃ駄目って言ったでしょ」と、ゼーシュの声。

息を切らせながら視線を上げると、そこには純白の美しい馬が立っていた。地上で見る馬よりも身体が大きい。

「……こいつが？」

ゼーシュが俺の方に寄ってきて、ルアンザと逆に優しく手を引いてくれる。

「はい。魔物の一種なんですけど、中でも聖獣と呼ばれているそうで……」

そつと近づいていくと、その意味が分かった。白馬の背に翼が生えていたからだ。

ゼーシュに促され、手を伸ばす。

馬にしてはやわらかな毛だった。手の平全体で触れると、その体温が伝わってくる。

「僕たち黒妖精ですら手を出すことが許されない、とっても神聖な魔物なんだ」

と、ルアンザも白馬を撫でながら言った。

「一説には、地下世界を見守る神の使いつてことにされてて、なかなか見ることも難しいんだけど」

「ユヴァインはどうやら、すべての魔物をこちらに送ってしまったみたいです」

白馬は大人しかった。

ふいに俺の顔を見て、何か訴えるような目をする。神の使いつてことは、俺と同じ立場になるのだが……。

「お前も、もしかしてユヴァインのしようとしていることを止めたのか？」

白馬が頷く。

そのたてがみを撫でてやりながら、俺も頷いた。

「うん、そうだな」

止めよう、あいつの企みを。そしてこの世界を救おう。

ゼーシュとルアンザが目を丸くして俺を見ていた。

「分かるんですか、マリアドさん」

「なあ、何て言ったんだ？」

俺は少し苦笑しながら、二人へ言葉を返す。

「いや、別に言葉が分かるわけじゃなくて……その、何となく伝わったんだ。こいつの思ってること」

二人は顔を見合わせると、何故だか安心したように息をついた。

「ですよ、マリアドさんに分かるはずありませんよね」

「マリアドはどちらかっていうと人間だもん。あー、びっくりした」

さりげにひどいことを言われた気がするが、俺は気にしなかった。

「で、こいつの名前は？ もう付けたんだろ？」

11 嫌な予感

ネネルは呆然としていた。

朝食を終えてすぐに白馬の元へ連れてきたわけだが、彼女は我が目を疑うかのように呆然としていた。

「これ、飛ぶの？」

「当たり前じゃん！」

と、ルアンザが声を張り上げる。

魔女は少し考える様子を見せ、次に俺を見た。

「……それで、どうするっていうのよ？」

「こいつは聖獣だ。で、空が飛べる。こいつならユヴァインたち黒妖精は殺さないから、情報収集がぐつとやりやすくなる」

「……そうなの？ ルアンザ」

と、黒妖精を見やるネネル。

「ああ、マリアドの言う通りだぜ。それにアル布斯も協力するって言ってる」

白馬アル布斯は答えるようにまばたきをした。

ネネルが息をつき、先を促す。

「で、具体的にはどうするつもり？」

「もちろん、ゼーシュとルアンザがこいつに跨って、空から情報を集めるのさ」

「……そう、それならいいわ。でも気をつけなさいね、二人とも」

と、ネネルに忠告される双子。

「はい」

「分かってるよ」

アル布斯が誰に言われるでもなく両足を折って身体を低くした。

そこへ慎重に跨るゼーシュとルアンザ。

「これで、ちよつとは前に進めそうだな」

「ええ、そうね」

二人がその背に乗ると、アルブスがゆっくり立ち上がった。

「それでは、早速行ってきますね！」

「行ってくるな。飛べ、アルブス！」

数歩地面を駆けてから、ふわりと風に乗って翼をはためかせる。あつという間にアルブスは空高く駆けていき、二人の姿も見えなくなった。

二人に置いて行かれたニゲルと部屋で遊んでいたら、ネネルが俺を呼んだ。

「マリアド、ちょっと来て！」

立ち上がって部屋を出る。

「何だよ？」

ニゲルに後を追われながら階段を下りると、久しぶりに見る顔がリビングで待っていた。

「マリアドお姉様！ お元気そうで何よりです」

ジャスナだ。

「ああ、久しぶり」

俺の前へ来て心配げな顔をするジャスナ。

「お身体の具合はどうですか？」

「うん、今日は良い感じかな」

その様子を見ながら、ネネルがもう一人の客人に呟くのが聞こえた。

「いつからお姉様になったのかしら？ 今まではあんたしかそう呼ばれてなかったのに」

「ふふ、そうだったな。二人の間で何かあったんだろ？」

と、すっかり健康を取り戻したヴェルシがおかしそうに笑う。どうやら、ジャスナにお姉様と呼ばれるのは、俺と彼女だけらしい。

「それで、今日はどうしたんだ？」

「はい、陛下直々の命で、巫女たち全員、故郷へ帰るよう言われたのです」

と、ジャスナは少し寂しそうにした。

「ですから、わたしは今日からヴェルシお姉様のお家にお世話になることになりました、挨拶をしに参りました」

「そっか、なるほどな」

聖堂で世界のために祈るのも良いけれど、国王は彼女たちを聖堂から解放してやることを選んだらしい。

俺は納得し、ジャスナの頭を軽く撫でてやった。

「じゃあ、これからはいつでも会えるな」

「はいっ」

ふいに家の中を見回してヴェルシが尋ねた。

「ところで、あの二人は？」

さっきまで俺の足元にいたはずのニゲルを、いつの間にか彼女が抱きしめていた。

「空を飛んで情報収集してるわ」

「空？」

と、首を傾げるヴェルシ。

「あっちの世界で聖獣とされる魔物を見つけたから、それを使ってあいつらの作戦を知ろうっていうことよ」

ネネルがそう説明をすると、ニゲルが後押しするように鳴いた。

「きゅうきゅう！」

思わずそちらに顔をやり、微笑ましくなる。

つい笑い声を漏らしてしまい、俺は三人の視線を集めた。

ニゲルまでもが俺を見て首を傾げる。

「ああ、いや……何か、良いなと思ってさ」

この世界の、この今の、この平和が愛おしかった。

彼女たちに俺の想いが伝わったかどうかは知らないが、ジャスナは微笑んでくれた。

「あの、ヴェルシお姉様に懐いてるのって、ニゲルちゃんですよね？」

そっぴや、ジャスナはニゲルと会うのはこれが初めてだったな。

「そうそう。可愛いだろ？」

「はい……魔物なのに、全然恐くないです」と、不思議そうにする。

魔物は魔物でも、ニゲルやアルプスのように人に懐くやつもいる。人に従うやつもいるし、人を襲うやつもいる。ユヴァインのように、魔物を人殺しの道具にするのは耐えられないが、魔物にもそれだけ多様性があるということだ。

「魔物について研究するのも、面白いかもしれませんね」と、ジャスナはくすり笑った。

「いや、まだ確証は持てないんだけど……」

その夜、ルアンザは帰ってくるなり、自分が模写した地図をテールに広げた。

現在地を確認し、西南に広がる森の中央辺りを指さす。

「ここだったよな？」

「うん」

と、頷くゼーシュ。

ルアンザは筆を取ると、そこへ丸い印を付けた。

「それは何なの？」

「描きかけの魔法陣だ。それがここにあっただ」

はっとして、思わずみんなと顔を見合わせてしまった。

ルアンザは筆を置いて真剣な口調で言う。

「たぶんユヴァインは、魔法陣を他の場所にも描かせているはずだ」

「それでどうなるんだよ？」

「一斉に魔方阵を起動させるんだよ」

と、ルアンザが俺を見た。

「たぶん、こうやって一直線に結ぶんだと思う」

大陸の中央、テリウス山脈の一部を通って指で横線を描く。

「起動のきっかけはユヴァインの魔法陣だと思うから、その場所さえ分かれば先手を打てる」

ネネルはただ、その地図を眺めていた。
魔法陣による魔法で世界を焼き尽くす、か……言われてみれば、
なかなか現実的な方法だ。

しかし、それをどうやって阻止するというのだろうか？ ユヴァインに近づくのは危険じゃないか？ ただでさえ、俺は……次会った時、彼に何をされるか分かったものじゃないのだ。

「じゃあ、あんたたちは明日も情報収集ね。あたしたちはここで作戦を練りましょう」

と、ネネルが話をまとめて席を立った。焦ることはない、その態度が言っていた。

明くる朝、空は晴れていた。

身体の調子が昨日よりも良くなっていることを感じ、今朝は自分から部屋を出た。

そして階段を下りていくと、黒い頭が二つ、玄関へ向かうのが見えた。

食卓の方へ行き、朝食中のネネルに声をかける。

「どうしたんだ、あの二人」

母親の手作りパンを頬張りながらネネルは言った。

「ちよつと旅に出てくるそうよ」

「旅？」

その向かいへ腰を下ろすと、台所に立っていた彼女の母が俺の朝食を用意してくれた。

「ええ、嫌な予感がするから、おおまかに世界を回ってくるって」

「ふうん……で、いつ帰るって？」

「明日の夜」

グラスに牛乳が注がれ、独特の匂いが鼻を突く。

「だから旅か」

と、喉を潤そうとグラスを持ち上げたら、ネネルがふと俺の顔を見た。

「その牛乳、セリンの家のだから」

どうでもいい情報だった。

びっくりさせるなよと思いつつ、口を付ける。そういえば、牛乳を飲むのってこれが初めてかも。食事中に飲むのは水か紅茶で、夜はアルコールがほとんどだ。特にこの家では当たり前のようにアルコールが出される。

「……濃いな」

「お腹、下さないようにね」

と、ネネルがからかうように言った。

むかつくが、何か言い返す気が起きないので話題を変えた。

「で、今日は？」

ネネルは口の中を空にしてから、目を上げて考える。

「とりあえず、どうやって対処するか考えましょう。午後からは種蒔くわよ」

「種？」

何かの比喻かと思って聞き返す。

「そう、種。ヴェルシの庭が魔物に荒らされちゃって、ひどい状態なんですって。だからみんなで、土を耕して新しく種を蒔くのよ」

「……ああ、そういうこと」

何でこんな時に、と思ったが、考えてみればそうして身体を動かすのは、俺にとっては良いリハビリになる。

「今日は天気も良いし、それが終わったらお茶会でもしましょうって、ジャスナが言ってたわ」

「そうか……良いかもな」

こうしてのんびりしてられるのも明後日までだ。それなら、今は出来るだけ現実から離れて、みんなで楽しもうと思った。

1 あの時

じょうろで水をやるジャスナの後をゆつくりと追う。

種を蒔いたのは昨日のことなのに、早くも芽が出始めていた。水を浴びたその姿は力強く、まるで太陽を睨んでいるかのようだった。

「また荒らされないと良いけどな」

ぼつりと呟くと、ジャスナが俺を振り返った。

「そうですね、何にも邪魔されずに育って欲しいです」

そしてまた水やりを再開し、歩き出す。

足で踏みつぶせそうな、普段は見落としがちな小さな芽。この世界には人間だけでなく、こうした小さな命を始めとして、たくさんの命がひしめき合っている。たぶん、俺がやろうとしていることは、それらすべてを守ること、救うことなのだ。

「……結構、責任でかいよな」

思わず苦笑した。失敗するとは思えないが、あまりにも重すぎる荷物だった。万が一失敗したら、どんなことをしても償いきれない。ジャスナは聞こえていなかったのか、それとも聞こえなかったふりをしているのか、何も反応しなかった。

花壇をぐるっと一周し、彼女はじょうろに残った水を適当なところにかけた。

それから顔を上げて俺へ言う。

「ちよつと休憩にしましょう、マリアドお姉様」

「うん、そうだな」

お姉様と呼ばれるのにも慣れてきて、俺は彼女へにっこり微笑う。そして屋敷内へ入ろうと玄関へ向かうと、見知った顔がこちらへ近づいてくるのが見えた。

「あ……」

思わず立ち止まってしまう。ジャスナもそれに気がつくと、慌てて身だしなみを気にし始めた。

こちらまで来たところで彼が立ち止まる。久しぶりに見るその顔は、俺を見てどこか戸惑っているように見えた。

「久しぶり、マリアド」

相変わらず優しい顔で、どこか安心したように口元を緩めるソールハロツシュ。

「おう、久しぶり」

それなのに、何故だか分からないけれど気まずかった。久しぶりに会うからなのか、他に理由があるからなのか、まだ俺には分からない。

「つまり、原理としては防御結界と同じだけれど、その効果は正反對というわけだ」

屋敷の広間で、ソールハロツシュは呟いた。

テーブルに置かれた地図は、印が一つ付けられたきりだ。

「普通なら、その魔方陣を壊すしかないが……」

「無理ね、時間がないもの。それに、いくつ魔方陣が作られてるのかも分からない」

と、腕組みをしながらネネルが返す。

ソールハロツシュは頷くと、地図を見ながら考えを次々と口にす

る。「きっかけの魔方陣を壊すか、途中で魔力の流れを遮るか……出来たとしても、多少の犠牲はやむを得ないな」

ゼーシュとルアンザの持ち帰る情報次第で、こちらの考えはがら

つと変わる。今はまだ、確かな可能性のない推測をして、待っているしかなか

った。「それにしても、これだけの規模でやるっていうんだから、相手は

かなり本気よね」

と、ネネル。
腕を解いて前屈みになると、地図の端から端を指で示した。

「海を挟んではいるけれど、場合によってはそれすらも焼き尽くされるわよ」

文字通り、火の海になる可能性もあるということだ。

「……確かにそうだろうね」

と、ソールハロツシュ。

魔力は魔方阵の数、魔法を使用する者の数だけ威力を増す。世界を滅ぼすくらいだから、きっと簡単な数字じゃない。

ネネルが息をつき、ソールハロツシュは彼女の顔を見た。何か通じ合うようにして、ふいと互いに目を逸らす。

「やっぱり今は、待つしかないんじゃないかねえの」

と、俺が口を出すと、彼女たちはそれぞれ適当に頷いた。

何となくそれが気に食わなくて、広間の端でニゲルと遊んでいるヴェルシとジャスナに目をやった。俺も混ぜてもらおうかと思い、席を立とうとする。

すると、俺より先にネネルが立ち上がった。

「先に家、帰ってるわね」

と、広間を出て行ってしまふ。出遅れた。

タイミングを逃してもやもやしている俺に、彼が声をかけてくる。

「ごめん」

唐突だった。

「何がだよ？」

と、俺が返すと、ソールハロツシュは申し訳なさそうな顔をした。「忘れていたわけじゃないんだ。ただ、実際に使われることになるとは思わなくて、言い出せなかった」

超高度魔法のことだった。

彼はそれに代償があることを俺に言わなかったせいで、俺が丸二日眠っていたことに責任を感じていた。

「本当にごめん……」

と、彼が俯く。

俺はどう返そうか迷っていた。だって、それはもう過ぎたことだ

し、俺は今、こうして元気にやっているのだ。今さら謝られても、困る。

「謝ることじゃねえよ。別に俺、何ともないしさ」

できるだけ明るく言ったつもりだったが、ソールハロツシュは顔を上げなかった。

記録では、古代に身体蘇生魔法を行っていた者はみな、早死にしたという。小さな怪我であればその代償は小さくて済んだが、死んだ者を生き返らせるには相当な魔力を消費した。それはつまり、俺が陥った状況は当然で、むしろやりすぎくらいだったということ。「あの時、オレは君を守れなかった。それに加えて、マリアドにあれほどの超高度魔法を使わせてしまった」

「……うん」

気にしてないと言いたかったけれど、今はただ彼の話に耳を傾けた。

「君が目を覚ましたと聞いても、すぐに、会いに行く気になれなくて……遅くなってしまって、ごめん」

何度謝るつもりだろう。

珍しく本気で落ち込む彼が、痛々しかった。俺のことで苦しんでいるだけに、こっちまで息が詰まりそうだ。

深呼吸を一つして、俺はソールハロツシュへ言った。

「気にしてねえよ。全然俺、気にしてないから……だから、顔上げるよ」

伺うようにゆっくりと顔を上げて、彼が俺を見る。

「許して、くれるのかい？」

「当たり前だろ。つつか、許すとか許さないとかじゃねえよ」

と、俺はちよつとだけ彼の方へ身体を向けた。

「もう終わったことなんだから、気にしたってしょうがねえだろ」
ソールハロツシュは曖昧に頷いた。まだ納得がいかないらしい。

「……そうだね、マリアド」

と、ポケットを探ったためらう。何だ？ 取り出すならさっさと

取り出せばいいのに。

ふと俺の目を見つめて、ソールハロツシュが席を立つ。

そして、俺の前まで来てひざまずいた。

「どうか、受け取って欲しい」

と、ポケットからそれを出す。

その手の中にあるのが指輪だと気づき、呆然とする俺。これってもしかして、プロポーズか？ え、ちょっと待てよ！

ソールハロツシュは遠慮がちに微笑むと、俺の右手をとって優しく薬指に指輪をはめた。

「魔法に対する防御力を上げる指輪だよ。彼の前では無力かもしれないけれど、無いよりはマシだと思う」

「へ？ 防御？」

どうやらプロポーズじゃなかったようだ。びっくりした。超びっくりした。

「あの時のように、相手に屈して欲しくないんだ」

「……あ、ああ」

そうだった。彼は俺がユヴァインに何をされたか知っているのだ。

……思い出さなくて、両目をぎゅっと閉じた。

察したソールハロツシュが立ち上がり、そっと俺を抱きしめる。

「もう二度と、マリアドを傷つけさせないよ」

あの時求めた体温に、俺は安堵の息を吐いた。俺には彼がい

る、みんながいる。今度こそ、次こそあいつを阻止しよう。それで、この世界を守りきろう。

2 俺になら

日が暮れた頃、ソールハロッシュは自分の家へ久しぶりに帰ると言って、去って行った。

ゼーシユとルアンザはまだ帰って来ていなかった。

「……何となくムカつくわね、その指輪」

と、ネネルは俺の右手を見つめて言う。

「何でだよ」

と、俺は言葉を返したが、ネネルは無視してどこかへ行ってしまった。まったく何なんだ。

仕方がないので二人の帰りを待とうと思って居間にいたが、夕食を終えても彼らは帰って来なかった。

何かあったんじゃないかと俺たちが心配し始めた翌日の朝。

「ただいま！」

「ただいま帰りました！」

と、元気な声が二つ。

ネネルは戻ってきた二人の顔を見るやいなや、怒鳴り始めた。

「何してたのよ、あんたたち！ 帰ってくるのが遅いわよ！！」

彼女は俺よりもひどく心配していたようだ。

ちらつと顔を見合わせる双子だが、すぐにルアンザが口を開いた。

「それよりも大変なんだよ！」

何やら切羽詰まった表情だったので、何か言おうとするネネルを遮って俺は問う。

「大変って、何が？」

「地下の奴ら全員が、強制的にこっちに送られてるんだ」

ネネルがはつとし、俺も笑うのをやめた。

ヴェルシの屋敷へお邪魔して、広間で顔を突き合わせる。

「魔方阵はここ、やっぱり僕の予想通り一直線に並んでいた」

と、次々に印を付けていくルアンザ。その数はざっと五十くらいだろうか。

そして現在地である城下町より北東、都市から少し離れた辺りに二重の印をつけた。

「ユヴァインは、ここを起点にしようとしてる」

「その辺りって、あたしが奴と遭遇した場所だわ。まさか、下見でもしてたってわけ？」

と、ネネル。

「そういうこともな。一度、地下の世界に戻ってるし」と、俺は口を開いた。

あの時のユヴァインにはまだ、戦う意志などなかったのだろう。ただこちらの世界を見に来ていたわけだ。でも、どうしてあいつ自ら？

ふと疑問がわき上がり、無意識に首を傾げてしまう。すると、ルアンザがネネルを見た。

「あいつと会った時、ユヴァインは何してたか分かる？」

「何って……すれ違ったときに違和感を覚えただけよ？ だから相手を追って……そうだわ、あたしが張った防御結界を見てた！」

玄関から来訪者を告げる鐘が鳴り、ヴェルシが席を立った。

ルアンザはしばらく考え込み、俺たちはただ彼の言葉を待つ。

そしてヴェルシがソールハロッシュを連れて戻ってくると、一度そちらに目をやってからルアンザは口を開いた。

「たぶんあいつは、大地そのものを破壊しようとしてる」

思わずはっとした。

「防御結界の魔力の流れを見極めて、その隙間から自分の魔力を流し、すべての魔方阵へ繋げるんだ」

ソールハロッシュが静かに空いた席へ着き、地図を眺める。

「焼き尽くすのは表面上で、本来の狙いは大地を内側から破壊するということだね？」

「そうだ。だからあいつは僕たち黒妖精だけでなく、すべての妖精族をこの世界に送り込んでる」

「あの、その……大地が破壊されてしまったら、世界はどうなるんですか？」

と、ジャスナが控えめに尋ねた。

「地上の大地は無くなるだろうね。そして、地下の世界は壊れた大地に埋もれる」

埋もれる　？

それはつまりどういうことなんだ、と、俺が問う前に黒妖精は言い切った。

「ユヴァインは両方の世界を、同時に滅ぼそうとしてるんだ」

だから大変なことになってるんだよ。と、苦々しく付け加える。

ネネルとソールハロツシュがそれぞれに溜め息をついた。俺も同じ気持ちだったが、やがてそれは怒りに変わる。

「そんなこと、絶対に許さねえ」

何が何でも止めてやる。それであいつをとっつかまえて、罪を償わせるんだ。

「落ち着いて下さい、マリアドさん」

と、ゼーシュが優しく言葉をかけた。その直後にニゲルが俺の足元へ来て一声鳴く。

はっとして、俺は息をつくとニゲルを抱き上げた。

「それで、止めるにはどうしたら？」

と、ヴェルシが問う。

「ユヴァインに魔方陣を発動させないのが一番だけど、他の魔方陣はすでに横に繋がっているから、それだけで威力を発揮するかもしれない」

「一つ壊したところで、別の魔方陣がちょっとしたでも魔力を宿していれば意味無いものね」

元々、魔方陣は単体で魔力を宿すものだ。その時は何も起こらないかもしれないが、ずっと放っておくことは出来ない。

ふいにソールハロツシュが地図の、南の方を指さした。

「彼の居場所を世界の中心とするなら、その反対はここだ。大陸ではないが、いくつか島が浮かんでいる」

そこは小さな国だった。人口も少なく、文化的発展が遅れている途上国だ。

「まさか……反対側から攻めようって言うの？」

と、ネネルが横目に彼を睨む。

ソールハロツシュは表情を変えずに、堂々と説明をした。

「島と言っても、海底で大陸とは地続きになっているだろう？ それなら、相手の魔力が広がる前に反対側から魔力を流せば、大地が壊されるのを阻止することが出来る」

「でも時間が合わないと無理よ？ だいたい、いつあいつが魔方陣を発動させるかも分からないのに」

と、ネネルは提案を却下しようとしたが、ルアンザがそれを遮った。

「出来るかも」

「え？」

身を乗り出して地図を示す。

「時間はどうでも良いよ、すべての魔方陣が発動してからでも遅くない。だって、マリアドになら、大地を蘇らせることだって出来るだろう？」

みんなの視線が俺に集まった。確かに、俺ならそれも出来なくはないだろう。ただ……。

「そうだな、それで行こう」

と、俺は言葉を発した。

何も知らないルアンザが頷いて、

「よし、決まりだ！」

と、叫ぶ。

ソールハロツシュが反対しようとするのをネネルが手で制し、何も知らないゼーシュが言った。

「ですが、ユヴァインはどうするんですか？ 現われると知っていて、見逃すわけには行かないでしょう？」

「そうだ、彼を捕まえて、もう二度と危険なことが出来ないようにしなければ。」

「そうね……本来なら宮廷騎士団に頼むところだけど」

「無理だろうな。陛下は騎士団にも帰郷を許し、城の警備すら手薄になっている」

と、ヴェルシが返す。

それにこのことを知っているのは俺たちだけ。

「仕方ないわね、戦力を二つに分けましょう」

ネネルがそう言って双子の顔を見た。

「ユヴァインを捕まえるにはどうしたら良いと思う？」

「可能なら、ぼこぼこに殴って気絶させる」

と、即答するルアンザ。どうやら彼もまた、ユヴァインに対して怒りを感じているらしい。

「魔法で、どうにかできたりは？」

と、逆に聞き返すのはゼーシュだ。相変わらず対照的な二人である。

ネネルは腕組みをして考え始めた。相手の実力をすでに知っているだけに、宮廷魔女としてどう対処すべきか悩んでいるようだ。

一方のソールハロッシュは、憂鬱そうにみんなから視線を外していた。

「あの、わたしなら……一時的にその方の意識を失わせられます」

と、突然ジャスナが言いだした。

「しかしジャスナ、それは」

「良いんです、ヴェルシお姉様。これはわたしにしか、出来ないことですから」

いつになく力強い声で言い切る巫女。確実に肉体と精神を分離させられるのは彼女だけだった。

その覚悟を聞いて、ネネルがルアンザへ問う。

「ルアンザ、相手の動きを鈍らせる魔法、使えるわよね？」

「え、うん。ユヴァインに効くかは分からないけど」

「短い時間で構わないわ。その隙にジャスナがあいつに近づけば、それで完璧なもの」

3 世界の中心へ

ルアンザとジャスナがユヴァイン確保に向かうことが決まり、ゼーシュが言った。

「僕も一緒に行きます。ルアンザだけだと不安だし、万が一失敗しても助けられるように付いていきます」

彼女らしい選択だった。

残るは宮廷魔女と魔術士、宮廷騎士団の第一隊長。どれも一般人からすると手強い人物なわけだが……。

「移動手段はどうなんだ？ やっぱリアルブスか？」

と、俺が尋ねると、双子が同時に頷いた。

「そうなるだろうな」

「そうなるでしょうね」

時間はもう残り少ない。当然、馬車を使う余裕はなく、自由に空を駆けられるアルブスが最適だった。

「でも北へは今から出れば十分間に合うわ。アルブスが必要なのはそっちだけでしょ」

と、ネネルが言っていると、ルアンザが即答した。

「確かにそうだけど、マリアドを送って戻ってくる余裕はあると思う。こっちは、急げば半日もかからないだろうし」

「……じゃあ、あたしはここに」

と、何故か戦力から外れようとするネネル。

「そう言えば、ネネルは高いところが苦手だったな」

と、ヴェルシがくすつと笑うと、魔女が切れた。

「別に苦手じゃないわよ！ ちょっと恐いけど、別に空を飛ぶくらい……が、我慢できるわよっ」

彼女は高所恐怖症だったらしい。それならアルブスに乗りたくない気持ちも分かる。

しかし、今はそれどころじゃないのだ。

現在の状況を思い出し、ネネルが重たい溜め息について諦める。

「……っ、分かったわよ。あたしはジャスナのお守りに付くわ」

嫌々なのがとてもよく伝わってきて、俺はちよつと苦笑してしまった。

そうして話がようやくまとまり、俺たちは今日の夕方に出発することになった。目的地までは約一日、そこで一泊して当日を迎えるというわけだ。

アルブスは一度こちらへ戻ってきて、小柄な四人を乗せて今度は北へと出発する。帰りももちろんアルブスだが、先に四人を送ってから俺たちの元へ迎えに来てくれるようだ。一方通行の旅路に、ならなければいいんだけどな。

あまり大きくない鞆に最低限の荷物を詰めて、部屋を出た。

居間ではネネルが夕陽に照らされ、独り、憂鬱そうにしていた。

そつと向かいに腰かけて、庭の方から聞こえる双子の声に少しの間耳を貸す。

「説明が足りなかったんだわ」

と、呟くネネル。

俺はそれでも構わずに言った。

「最初からきつと、こうなることが決まっていたんだよ。俺はただの神の使者で、世界を救ったらそれで終わりだ」

「……寂しくないの？」

「どうだろ……よく分かんねえや」

俺がそう言つて笑うと、ネネルは急に立ち上がって俺の前まで来た。

そしてちゅつと俺の額へ口づける。

「おまじない。あんたが後悔しないように」

はつとして彼女の表情を見ようとしたときには遅く、さつさと背を向けて出て行ってしまった。

これまでずっと偉そうで、何かと冷ややかな態度をとってば

かりの彼女だったが、本当はすごく優しい人なのだろう。

額にそつと指先で触れ、俺は椅子を立った。

「ありがとな、ネネル」

足下に置いた鞆を手にとって、俺も歩き出す。

家の前では、すでにヴェルシとソールハロツシュが待っていた。
アルブスが俺を見てゆっくりと瞬きをする。 分かってるよ、

アルブス。もう何も言わなくていいから、俺を世界の中心へ連れて
行ってくれ。

「しっかり捕まっていと落ちちゃうからな」

と、ルアンザが俺へ言った。

「おう、分かった」

「どうか気をつけて下さい、マリアドさん」

と、ゼーシュまで。

俺は二人へ笑って見せ、前後の脚を折って待機するアルブスの背
に触れた。

「よろしくな、アルブス」

そしてまた、白馬は俺へ言うのだ。 本当の良いのか？ と。

良いんだよ、アルブス。俺はお前と違って、一時的な神の使者な
んだ。俺は俺の仕事をやるだけさ。

アルブスが頷いたのを確認し、俺はその背に跨った。……思った
よりも座り心地が悪い。いや、馬なのだから当たり前か？

「マリアドを頼んだわよ」

と、ネネルがソールハロツシュに言う。

宮廷魔術士はいつものように笑いながら返した。

「言われなくても分かってるさ」

俺の様子に彼も平静を装うと決めたらしい。

「それじゃあ、行ってくるよ」

と、アルブスへ乗るソールハロツシュ。

後ろに座った彼が、俺の腰に両腕を回してきてびくつとした。

「……嫌だったかい？」

「うん。お願いだからあんまりくつつくな」と、振り向いて返す。

ソールハロツシュは残念そうにすると、ちょっとだけ距離をとった。

その後ろにヴェルシが跨って、若干窮屈になる。

「大丈夫か、アルブス？」

さすがに大人三人はきついんじゃないかと思って尋ねたら、アルブスは構わずに立ち上がった。

ぎゅっとその首に両腕を回し、抱きつく。

ネネルたちに見送られながら、アルブスは天へと駆け出した。

日が暮れて夜空を星と月が彩る。

速度に慣れてくると、あまり強く抱きつかずとも平気なことが分かってきた。

そのためか、ヴェルシは途中から反対方向に座って後方を眺めていた。恐くないのかと思ったが、彼女は乗るコツを掴んでいるのか、むしろ楽しそうにしている。

ふいにソールハロツシュが俺を強く抱きしめてきた。

「少しの間だけ、こうしていてもいいかな……？」

と、俺の耳元に囁く。

「気が済んだら離れるよ」

と、俺はただぶつきらばうに返した。

彼の想いが痛いほどに伝わってきたから、嫌だなんて言えなかった。

「ありがとう」

ぎゅっと俺を抱きしめて、重たい息を吐く。

俺はまだ、何も答えられない。応えたくても、それどころじゃない。俺には考えることがたくさんあって、覚悟を決めたはずの今も不安で、心配で、胸がときどきと痛む。

もう戻れないと分かっいて、俺はどうしようもなく臆病になつていた。きつとネネルは、そんな俺を理解していたからおまじないをくれたのだろう。最期の最後まで、俺が後悔しないようにと。双子の月が遠くから俺たちを眺めていた。ポルクスが一段と遠ざかって、やがてカストールの陰へと隠れるのが分かる。もうすぐ太陽が昇る。

4 最期の期限

その島はのどかな所だった。きつとりゾート地として賑わうことだつてあるだろう、暖かな気候の土地だ。

けれども今は、誰もがぴりぴりしているように思えた。当然か、明日死ぬ命なのだから。

アルプスを見送った後、街から外れて出来るだけ開けた場所を探した。

そして見つけたのは草が所々に生えた空き地だった。人気もなく、万が一魔物が現われても、十分に戦える広さのある場所だ。

宿へ戻る途中、ヴェルシが俺へ言った。

「人間以外の種族がこの世界に来ているのは、確かみたいだな」

「ああ、そうだな」

それは俺も感じていた。

俺たち人間の中にそれらはたくさん紛れ込んでいて、時折草の陰から羽を生やした小さな生き物が飛び出してくる。

ユヴァインはこれらすべての命を、無に還そうとしていた。

海は穏やかだった。

風があまり強くないせいか、ふわふわとした優しい空気が流れている。俺たちを照らす太陽も、いつもと変わらず輝いていた。

あれから一ヶ月が経ったとは思えないほどに穏やかだった。まるで何もなかったのではないかと、錯覚してしまいそうなくらいに。そうしてぼーっとしていた俺に、ソールハロツシュが声をかけてきた。

「マリアド、この辺りならやりやすいんじゃないかな」

と、地面がむき出しになっている箇所を示す。

そちらへ歩いて行き、そつとその場にしゃがみこんだ。片手で触れて、さらさらした砂を軽く払う。

「うん、そうだな」

伝わってくる大地の力。生命を育む力強い鼓動。頭上を見上げると青い空が見えた。どこまでも、どこまでも続く青い空、そして海。

手を離して、俺はそこにぺたんと腰を下ろした。もうすぐこの世界に起きるであろうことが、恐い。

この世界の反対側で、ネネルたちはきつと、ユヴァインが現われるのを待っている。

ふいに何かの鳴き声が響き、ヴェルシが剣を抜いた。それぞれが耳を澄ませて状況の把握に努める。

魔物かと思ったが、違う。

俺は次々に聞こえてくるそれらが、すべての生物たちの悲鳴であることに気がついた。鳴いている、鳥が、犬が、魔物が、植物が。思わず周囲をきよるきよるする俺に、ソールハロツシュは頼もしく言った。

「気にしなくていい、マリアドは自分のことだけ考えるんだ」
ずずつと何か動くような音がして、地面がぐらりと揺れ始める。はつとして両手を地面にぴったりくっつけた。手の平から、まがましい魔力の流れの、大地を這うイメージが伝わってくる。動物たちが、大人しくしていた魔物たちが暴れ出す……！
そしてどこからか現われた魔物たちが、ヴェルシたちに襲いかかった。

その内の一体をヴェルシが真つ二つに切り裂いて、ソールハロツシュが水圧で他の魔物を遠ざける。魔物の狙いは俺だった。分かってしまうと恐かったが、今はそっちに気をとられてはいけない。

魔物のことは二人に任せて、俺は神経を集中させようと努めるが、地面の揺れのせいでなかなか上手くいかなかった。

大陸が、魔力に耐えきれず割れるのが見えた。

ユヴァインの発動させた魔方陣がぎらぎらと光っている。
剣を手に飛び出すゼーシュ、その隙にルアンザが闇の力でユヴァインの身体を拘束する。

ジャスナがユヴァインの両手をとって、あの時と同じように意識を、精神を神の待つ天界へ。

すかさずネネルの小さな足が魔方陣を壊し、魔力の流れが急に止められた。

しかし、そこから一度流れ出た魔力はすべての魔方陣を起動させ、黒妖精たちは世界の終わりへ向けて歓喜する……。

俺は両目を閉じて、深呼吸をした。右手の薬指にはめた指輪が俺の身体全体を包み込む。

神経を手の平に集中させて、すべての魔力を大地の中へ。

「デウス・ヴィヴィファイケト！」

俺の中の魔力が大地のそれと結合して膨らんだ。

その風船を割らないよう、慎重に力を放出していく。少しでもずれたら、きっと俺の魔力は暴走してしまうだろう……最終的には避けられないとしても、被害は最小限に！

もう一度深呼吸をして、今度は深く大地の中へ魔力を潜り込ませた。

大地が泣くようにぐらぐらと揺れる。その意思を、その本来の姿を、俺の魔力で取り戻す！

左右の手の平に力を込め、大地へすべての魔力を放つ。

「っ、くそ……！」

上手くいかないからではない、上手くいつているからこそ、俺は叫んだ。

「くっそおおおおーっ……！！！」

頭の中に聞こえてくる。

悲鳴を上げて、混乱のあまり泣き喚いて、それぞれの大切なものを必死で守ろうとする声が。

俺の魔力が大地に跳ね返されて周囲に強風を巻き起こした。自らの力に飛ばされそうになりながら、必死で大地にしがみつく。

何が何だか分からなくなつて、ただ大地の叫びにとらわれても、俺は手を離さなかつた。ここにはすべてがあるから、この世界には愛おしいものがたくさん！

地中を進んでいた魔力が光を生みだし、ユヴァインの魔力にぶつかった。黒く渦巻くその力を、俺は最後の力を振り絞って光の色へと染め上げていく。

白く、白く、大地をもう一度再生させる。この世界を構成する、神なる大地を！

そして俺の意識は途絶えた。

5 後悔と安堵と

「よくやったな、マリアド」

気がつく、目の前に神様がいた。

俺は妙に穏やかな気持ちで、ただそこにいた。

「これで世界は救われた。大地は本来の力を取り戻し、妖精族は再び人間たちと手を取り合って暮らしていくことになるだろう」

「へえ、そうか」

足元に見えるのは、俺がついこの前まで在った場所。

「初めはどうなるかと思ったが、無事に務めを果たしてくれて何よりだ」

神様もまた、世界を見下ろしていた。

「さぞかし辛かっただろう？」

と、問う神様に、俺は言う。

「意外と、そうでもなかったぜ」

「そうか？ ひどく苦労しているように見えたが……」

俺の肉体は、静かな部屋のベッドに寝かされていた。

周囲にはみんながいて、先ほどから暗い雰囲気で満ちているのが分かる。誰もが口を閉ざして、何人かが思い出したようにふと俺を見つめる。

改めて自分の姿を目で見て、何だかくすぐったくなった。俺

ってあんな外見してたのか、自分で思っていたよりも全然女じゃないか。そりゃあ、ドレス着させられたり、女扱いされたりするのも当然だよな。

しかし、改めて考えると、俺があそこにいたのはたった一ヶ月だけだった。それはあまりにも短く、充実しすぎた一ヶ月間だった。たくさんの出逢いがあって、それと同じだけの……。

「そっさいや、前に言ってたよな？」

と、俺は顔を上げて神様を見た。

「ああ、褒美の件か。我は嘘を言わん、お前の好きな世界へ転生させてやるぞ」

「うん……それじゃあさ」

もう一度足元を見下ろして、俺は神様へ頼んだ。

「俺が救世主だった世界に、まったくあの頃と同じ姿のままで、平和を取り戻した今へ転生させてくれ」

神様が片方の眉を上げてみせた。

「すると、救世主としての力は失われてしまうが、それでも良いのか？」

「ああ、構わないさ。一人の人間であるなら、それだけで十分だ」と、俺がにつこり笑って言い返すと、神様は呆れたように頷いた。

白い白い世界から、急に地上へと落とされる。

「マリアド？」

誰かが俺を呼び、はっと両目を開けた。

「うそ……死人が、起きた」

呆然と呟くネネルに構わず、俺は上半身をゆっくり起こす。

そしてにこつと笑って見せた。

「ただいま、みんな」

途端にぼろぼろと涙をこぼすジャスナ、ゼーシュ、ルアンザ。

誰も何も言えずにいるのを察して、フュエリが少し涙声で言う。

「おかえりなさいませ、マリアド様」

その言葉にヴェルシとネネルがはつとする。

ソールハロツシュはそばへ寄ると、力強く俺を抱きしめた。

「おかえり、マリアド……！」

「うん……ただいま」

大人しく抱きしめられていると、ネネルがまだ信じられない様子で尋ねた。

「何で、何で帰ってきたのよ？」

だから俺は、明るい声で言う。

「言い忘れたことがあるんだ。ネネルには悪いけど、俺、後悔してることが一つだけあってさ」

ソールハロツシュが力を抜いて俺を解放した。

みんなの視線を感じながら、俺ははつきりと言う。

「俺、ずっとソルのこと嫌いだって言ってたけど……本当は、好きだ」

彼が呆然とし、俺はすぐに言葉を継ぐ。

「だけど、それ以上にみんなが好きだ。お前たち、全員が」

「っ、マリアド！」

「お姉様　っ！」

ルアンザが反対側から抱きついてきて、その横からジャスナが腕を出してくる。いつの間にやらニゲルまで飛び込んできて、ちよつと暑苦しい。

ゼーシュはルアンザに呆れた目を向けながらも、こちらへ来て笑った。

「おかえりなさい、マリアドさん」

本当はきつと、ゼーシュも抱きつきたいはずだ。空いていた手をそちらへ出すと、思った通り、彼女は俺の手を取った。ぎゅつと握って、静かに涙する。

ヴェルシが安堵したように微笑んで、俯いているネネルへ言う。

「こんな時くらい、素直になっただろうだ？」

「っ……マリアドの馬鹿！」

と、ソールハロツシュを押し退けて抱きついてくる小さな魔女。

「馬鹿って何だよ」

そう言い返しながらも、俺は彼女の体温に身を任せた。彼女には最初から最後まで、ずっと世話になりっぱなしだったから、怒られるのかもしれないことだ。

フュエリが眼鏡を外して涙を拭い、ソールハロツシュが珍しく戸惑った様子を見せる。でも俺は無視した。

この世界に戻ってきて、本当に良かった。

近々行われる予定だった俺の葬儀は中止になり、国王たちは俺の復活を心から喜んでくれた。

フィアンシーナ姫なんて、わざわざ俺の前まで来て言うのだ。

「本当に良かったですわ、マリアドが戻ってきてくれて」

そして、俺の頬にちゅっとキスをする。

何だか恥ずかしかったけれど、嬉しかった。生きていることが、こんなにも新鮮だなんて。

「それでマリアド、ソールハロツシュに告白したのですって？」

「……え？」

何て耳の早い人なんだ、と、俺が愕然としたのは言うまでもないだろう。

6 後日談・前

地上には妖精族が現われ、人間と共に暮らしていた。一部の妖精族は地下の世界へ帰ったらしいが、それをきっかけに地下と地上を行き来する人間も現れ始めているらしい。

「だから僕たちは、そうした人たちを支援しようと思うんです」

と、ゼーシュは言った。真っ直ぐな視線だった。

「妖精族にもいろいろあるし、僕たちみたいなハーフだってこれからは増えるだろ？」

ルアンザはまるで、未来を見透かすかのようにそう言った。

確かにこれからはそういう時代だ。人間たちは妖精族と混じり合っ
つて、この大地の上で共生していくのだろう。

「まだどこかにひっそりと隠れてる妖精なんかもいるだろうし、互いに協力し合えるってことを教えようと思う」

「魔物たちのことも、そのすべてが恐いわけじゃないと、一人でも多くの人に伝えようと思います」

「きゅう、きゅきゅう！」

ゼーシュに抱かれていたニゲルが、彼女の言葉を応援するように鳴いた。

あれからアルブスは、自分の使命は終わったと感じたのか、いつの間にか姿を消してしまったそうだ。魔物の中でも聖獣と呼ばれるだけあり、とても賢く、頼もしい仲間だった。

「そっか、それは良いことだな。お前たちじゃなきゃ出来ないよ」と、俺は頷いて笑う。

「それで、そのついであってわけでもないんだけどさ」

と、ルアンザはゼーシュを見やった。

「二人で、母さんを探しに行こうと思う」

「……そうか」

辛そうに俯くゼーシュ。

ルアンザは彼女の肩をそつと抱くと、はつきり言った。

「だから、いつこの町に戻ってこれるか分からない。もしかすると、すぐには帰ってこれないかもしれない。だから、ゼーシュは騎士団を辞めるよ」

行方不明の母親を捜すのは、きつと容易じゃない。ただでさえ、双方の世界があるべき形に落ち着くまでに、何年かかるか分からないのだ。二人のやろうとしていることは、途方もない時間を必要とするだろう。

「でも僕、手紙書きます。返事は受け取れませんが、必ずマリアドさんに手紙を送りますっ」

「うん、分かった。待ってるよ、お前からの手紙」

そう俺が返すと、ゼーシュは堪えきれず両目を潤ませた。俺はちよつと微笑ましく思いながら、ぽんぽんとその頭を撫でてやる。

「っ……はい」

ニゲルがまた「きゆう！」と、鳴く。彼女を励まそうとしているらしい。

「がんばれよ、お前ら」

「おう！ マリアドもがんばれよな」

へへつとルアンザが笑う。何をがんばるんだか分からないけど、気にしないことにした。

どこからか現われた妖精族は、城下町の復興を手伝うと言ってくれた。

国王はそれをありがたく認めると、その翌日から復興作業はぐつと速度を上げて進み始めたらしい。

「で、フュエリは新たな恋を見つけたわけだ」

窓外を見下ろすと、黒妖精らしき青年とフュエリが何やら会話しているのが見えた。

その青年は城の庭を片付けてくれているらしいが、それにしてもとても爽やかな笑顔だ。フュエリの好きそうなタイプというか。

「ユヴァインは反省しているそうよ。口だけかもしれないけどね」
両手を別々に縛られ、魔法を使えないようにされたユヴァインは今、城の地下牢に投獄されていた。

「彼に共謀した黒妖精たちの何人かは自首してるそうだし、脅威は完全に去ったと言えるわね」

「そっか……良かった」

窓の外から目を離して彼女を見やる。

「これで俺は、本当の意味で神の使者という肩書きから解放されたわけだ」

すると、ネネルは紅茶を一口飲んでから尋ねた。

「でも、それって本当なの？ 実はまだ、魔法が使えたりしないの？」

「しねえよ。そんなに気になるなら確かめてみるか？」

と、俺は両手を前へ出して重ねた。

ネネルがびくつと身を縮め、俺は魔法を唱える。

「ヴェントス！」

巻き起こったのはそよ風だけだった。ネネルの長い髪を揺らして、あつという間に消えていく。

「……もったいない」

と、ネネルは呟いて身体の緊張を解いた。

俺はもう、ただの人間だ。救世主ではあるけれど、能力は人並みである。

「だから言っただろ？ 俺はもう、ただのマリアドなんだよ」

ヴェルシは騎士団に戻り、復興を手伝っていた。

「大変そうだな」

と、俺が思わずのんきなことを口にしても、彼女は怒らなかった。
「マリアドも手伝ってくれと、こちらとしてはとてもありがたいんだがな」

とはいえ、妖精たちのおかげで復興作業は早くも最終段階だ。

破壊された建造物は建て直しが始まり、広場では普通に子どもたちが妖精族と遊び回っている。

俺はそれを、直接自分の目で見てきていた。

「悪いけど、今日は様子を見に来ただけだから」

「そうか。気が向いたらまた来てくれ」

と、ヴェルシ。

「うん。じゃあ、またな」

作業の邪魔にはなりたくなかったので、さっさとその場を離れる。ちらつと振り返ると、ヴェルシが作業を再開するところだった。

平和な世界だ。

戻ってきたはいいものの、俺は人間として、一人の生きる者として、何をすべきか分からなかった。

ゼーシュとルアンザのように人々を支援できればいいが、それは俺のやるべきことではない。

ヴェルシのように復興を手伝うのも良いが、それもやがては終わってしまうだろう。その後、俺はどうなる？

どんなに考えても見つけられなくて、もどかしかった。

7 後日談・後

ジャスナは聖堂の前で悩んでいた。

「フィアンシーナ姫様が旅へ出るというのです。その従者を募集していて、わたしもお供しようかと……」

相変わらず真っ白な巫女衣装が風になびく。

「ですが、わたしには巫女としての務めもありますし、どうしたらいいか」

悩む彼女に、俺は言った。

「自分がやりたいと思うことをやればいいさ。旅に出ていたいことがあるなら、それを選べばいい」

「……そうですね」

と、息をつくジャスナ。

本当なら俺も、自分がやりたいことをやるべきだった。しかし、それが見つかからない。分らない。

「わたし……思っんです」

と、彼女は口を開いた。

「黒妖精でなくても、魔物と心を通わせることは出来るのではないかと。もしも、その最初の一人が自分であれば良いな、と思うんです」

「ジャスナなら、出来そうだな」

と、俺は笑った。心優しい彼女なら、きっとどんなに凶暴な魔物もいつかは心を開くだろう。

それなのにジャスナは自信なさそうに言う。

「まだ分かりません、マリアドお姉様。今はまだ、そうであれば良いと思うだけです」

でも、そう思っのだったら、それを叶えることだって夢じゃないはずだ。

「俺は、ジャスナが旅に出ても構わないよ。ちょっと寂しくなるけ

ど、ジャスナがそれで幸せなら、俺は止めない」

ジャスナがはっとして、俺を見た。

「……ゼーシュさんとルアンザさんが旅立たれた今、わたしまで行くわけには」

「良いんだよ、俺のことは気にするなっ」

頭を撫でてやると、ジャスナは涙目になって俺へ抱きついた。

「ごめんなさい、マリアドお姉様……っ」

そうして彼女も、自分の道を見つけて旅へ出る覚悟を決めるのだ。

「それにしても、どうして旅へ？」

と、俺が尋ねると、フィアンシーナ姫はにっこり笑って言った。

「目的は国内の視察ですわ。後片付けで忙しい父の代わりに、フィアンシーナが国中を周り、全国民と会ってきますの」

さすがに全国民というのは無理だろうが、俺は納得した。

「そういうことだったんですか。でも、それにはずいぶん時間がかかるんじゃない？」

「そうですね、早くても二年はかかるでしょう」

と、姫。

まだ国内は不安定で、それを姫自らが顔を見せることで、少しでも人々の支えになるうというわけだ。

俺だって、出来るものならそれがしたい。姫と一緒に旅へ出たいけれども、俺に何が出来る？

「月に一度、父上へ報告書を出すことにはなってますけれど、城下の者たちにはやはり、寂しい思いをさせてしまいますわね」

何も出来ない。俺はもう強力な魔法を使えないし、他には何も思い浮かばない。ジャスナのように、魔物と心を通わせようとも思わない。

ただ俺は、旅立つ彼女たちを見送るだけだ。

「そうですね……確かにちよっと、寂しくなります」

と、俺が言葉を返すと、姫は笑った。

「マリアドまでそう言って下さるの？　フィアンシーナ、とっても嬉しいですわ」

焦りそうになる自分を押し殺し、俺はただ愛想笑いを浮かべた。

自分の部屋へ戻る途中、ソールハロツシュに出会った。

「忙しそうだな」

と、俺が声をかけると、何十枚もの紙を抱えた彼が笑う。

「そうでもないよ。幸いなことに、この国には金がたくさんあるからね」

ソールハロツシュは引き続いて経済的支援を行っていた。

その内に魔術士としての仕事へ戻るらしいが、公爵でもある彼のことだから、しばらくは忙しそうだ。

「そっか……」

やはり俺には何も出来そうにないと、思わず落ち込む。

とりあえず部屋へ戻って考え直そうかと思っていたら、ソールハロツシュが言った。

「何か考えごとかい？」

「え……いや、うん」

俯いてから足を止め、床を見つめる。

ソールハロツシュは俺の隣まで来ると、優しく言った。

「悩みがあるなら、オレが聞くんよ」

今までは俺の方がみんなより上で、そうじゃなくなって初めて、

俺は自分の本当の無力さを知った。

「別に、悩みってわけじゃ……ない」

「そうは見えないけれど？」

すべてお見通しだった。

溜め息をついて、俺は彼を見上げた。

「今の俺には、何が出来ると思う？」

目を丸くして、真面目に考え始める美青年。

「何って言われても……そうだな」

すぐに答えは出そうになかったので、ふいとそっぽを向いた。相変わらず窓外は人々の活気で賑わっている。

「確か、学校が今建て直しの最中で、仮の校舎を借りて再開したとか。でも、妖精族の子どもまで受け入れたせいで、人が足りないらしいよ」

と、ソールハロツシュがにこつと笑う。

それはつまり、学校の臨時教師というか……講師というか。

「子どもを相手にするのか？」

「あとは……がれきの撤去作業や荒らされた庭の片付け、年配の方の家に行って話を聞く仕事なんかもあるけど、それは一種の医療行為だね」

残された選択肢は重労働か医療行為というわけらしい。もちろん前者はお断りだし、身体蘇生を実際にやってしまった俺が今さら医療行為というのも変だ。

「一応聞くけど、他には？」

「魔物退治とか？」

「無理だ」

仕方ない、学校でボランティアするか。何もしないよりはマシだし、もしかするとそこで見えてくるものもあるかもしれない。

「分かった。俺、学校行くわ」

と、覚悟を決めると、彼が満足そうに頷いた。

「そう言うと思ったよ。だから最初に勧めたんだ」

「え、何で？」

何か理由でもあるのかと尋ねたら、ソールハロツシュはいつもみたいにふざけた答えを返す。

「今から慣れておけば、いつオレたちの子どもが出来ても困らないだろう？」

俺はにっこり微笑むと、ぎゅっと拳を握りしめた。そして彼の腹を思いっきり殴る。

「勝手に言ってる、この変態！」

f
i
n
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1659r/>

男で女な神の使者

2011年8月29日03時41分発行